和歌の浦学術調査報告書

2010年12月

和歌山県教育委員会

和歌の浦学術調査報告書

2010年12月

和歌山県教育委員会

和歌の浦全景

和歌の浦全景

巻頭図版2

干潟

干潟（撮影・松原時夫）

和歌の浦学術調査報告書

2010年12月

和歌山県教育委員会

序　　文

本報告書は、平成21年度に実施した和歌の浦学術調査報告書です。名勝和歌の浦は、平成22年８月５日に、和歌の浦干潟を中心として玉津島神社、妹背山多宝塔など、約90万㎡が国指定記念物（名勝）として指定されました。

古来より名勝である和歌の浦は、抜けるような青い空の下、緑豊かな緑地帯である山並みに囲まれ、水平線上に、幾重にも連なる長峰山脈があり、手前には毛見崎、更に章魚頭姿山に囲まれた大パノラマ空間の中に、海、川、砂嘴、干潟、島が存在します。片男波の砂嘴の外側には、躍動する大海原から波が打ち寄せ、内側には玉のように美しい六つの島である玉津島山が連なり、名草山の山容が水面に静かに影を落とします。干潟は潮の満ち引きにより、生命の循環を示すかのように姿を変えます。空、海、波、干潟、音は、動的に躍動して景観を変え、一瞬たりとも同じではありません。

この景観保全のため、神亀元年（724）、和歌の浦に行幸された聖武天皇は、春秋２回、官人を遣わし玉津島之神、明光浦之霊を祀るよう詔をだしました。

この名勝和歌の浦の自然・地理・歴史・価値について、まとめたのが本報告書です。この報告書が、名勝和歌の浦の価値を再認識するきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、報告書の刊行に際しましてご協力をいただきました多くの皆様方に、心から感謝申し上げます。

平成22年12月

和歌山県教育委員会

教育長　山　口　裕　市

例　　言

1　本書は、平成20年度に和歌山県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が実施した和歌の浦の学術調査報告書である。

2　調査は、県教育委員会が各分野の専門家からなる和歌の浦学術調査委員会を設置し、実施した。

3　報告書作成に関しては、関係機関及び地元の方々から助言・協力を得た。

4　調査で作成した図面・写真及び記録資料は、県教育委員会が保管している。

5　本書で使用した古写真（絵葉書）の掲載については、県立文書館　溝端佳則氏の協力を得た。

6　本書で使用した表紙写真、巻頭図版２（下）、天満宮･東照宮（11P）、玉津島神社（131P）については、写真家　松原時夫氏が撮影したものであり、掲載にあたっては同氏の協力を得た。

7　本書で使用した絵図については、東京藝術大学大学美術館、和歌山県立博物館、和歌山県立文書館の承諾を得た。

8　調査にあたっては、下記の機関及び方々からご教示をたまわった。

遠北　明彦　　大道　　眸　　海　禅　院　　紀州東照宮　　小板　政男
高橋　克伸　　玉津島神社　　天　満　宮　　西川　秀紀　　藤井　　清
松本　敬子　　松本　惠昌　　保井　彰友　　養　翠　園

和歌の浦学術調査報告書目次

第１章　経緯と経過……1
　第１節　和歌の浦の位置……1
　第２節　和歌の浦学術調査委員会の設置……3
第２章　土地利用と法規制……5
　第１節　都市計画法による土地利用について……5
　第２節　文化財保護法、和歌山県並びに和歌山市文化財保護条例による文化財保護……8
　第３節　自然公園法による国立公園指定……12
　第４節　都市計画法、和歌山県並びに和歌山市都市公園条例による公園指定……12
　第５節　都市計画法による風致地区指定……13
　第６節　港湾法に基づく港湾及び港湾区域……13
　第７節　海岸法に基づく海岸保全区域……14
　第８節　河川法に基づく河川区域……14
　第９節　和歌山県松食い虫被害対策事業推進計画に基づく区域指定……18
　第10節　その他……19
第３章　自然・地理環境……20
　第１節 和歌の浦地域の地質環境について ……20
　　１．地質概説……20
　　２．和歌の浦地域の地質……21
　第２節 植生 ……26
　　１．植生概要……26
　　２．植物相……28
　　３．植物相リスト……29
　第３節 和歌川河口干潟の範囲とそこに生息する底生動物 ……38
　第４節 地理的環境と考古資料 ……41
　　１．旧石器時代……41
　　２．縄文時代……41
　　３．弥生時代……42
　　４．古墳時代……43
　　５．奈良～平安時代……44
　　６．鎌倉～室町時代……46
　　７．江戸時代……47
第４章　名勝・史跡和歌の浦……51
　第１節　古代……51
　　１．聖武天皇と山部赤人……51

２．万葉景観と和歌の浦……53
３．歌枕として継承される和歌の浦……55
４．平安朝の和歌の浦―紀行文、日記、随筆、物語等―……55
第２節　中世……58
１．歌枕としての和歌の浦……58
２．実景資料『慕帰絵』『飛鳥井殿御下向之儀式』の和歌の浦 ……58
３．正徹、心敬の和歌の浦……59
第３節　近世……61
１．浅野幸長の和歌の浦整備……61
２．徳川頼宣の和歌の浦整備……63
⑴東照宮……64
⑵妹背山と三断橋……65
３．徳川治宝の和歌の浦整備……66
⑴御旅所移転・不老橋架橋……66
⑵入江の塩浜化と修景……68
４．名所としての和歌の浦……69
⑴民衆遊楽の地としての和歌の浦……69
⑵名所案内にみる和歌の浦……71
第４節　近・現代……75
１．市民による和歌の浦の景観保護活動……75
２．和歌公園の設置……75
３．観光開発……76
４．名勝指定と風致地区指定……77
５．戦後の和歌の浦……77
第５節　名勝及び史跡としての価値……79
１．和歌の浦の範囲……79
２．構成要素……80
⑴玉津島山……81
⑵天神山……82
⑶権現山……82
⑷章魚頭姿山（雑賀山）……82
⑸双子島他……82
⑹名草山……83
⑺和歌川河口部の干潟……83
⑻片男波……84
⑼御手洗池……84
⑽秋葉山……84

⑾玉津島神社……85
⑿塩竈神社……85
⒀天満宮……86
⒁東照宮……86
⒂元御旅所跡（県立和歌公園　８の字公園）……87
⒃芦辺屋跡、朝日屋跡……87
⒄不老橋……88
⒅金剛宝寺護国院（紀三井寺）……88
３．名勝としての価値……91
４．史跡としての価値……92
５．名勝及び史跡としての価値……92
６．指定の進め方……94

和歌の浦年表 ……107

資料編目次

資料編
資料１　県指定名勝・史跡和歌の浦学術調査委員会設置要綱 ……125
資料２　県指定文化財名勝・史跡和歌の浦指定一覧表、説明及び古写真等資料 ……127

図版目次

第１章
図１　和歌山県
図２　和歌の浦位置図
表１　県指定名勝・史跡和歌の浦学術調査委員会
第２章
図１　土地の利用について
図２　和歌の浦の法規制図・用途区分
図３　和歌山県指定文化財名勝・史跡和歌の浦の範囲
図４　和歌の浦の法規制図（自然公園）
図５　和歌の浦の法規制図（都市公園・風致地区）
図６　和歌の浦の法規制図（港湾・海岸・河川区域）
図７　和歌山県　高度公益機能森林、地区保全森林位置図
写真１　県指定文化財名勝・史跡和歌の浦
表１　用途区分一覧表
表２　文化財一覧表
第３章
図１　地質概略図
図２　和歌の浦地域の地質図
図３　地質柱状図
図４　旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡
図５　縄文時代前期頃の地形と主な遺跡
図６　弥生時代の主な遺跡
図７　古墳時代の主な遺跡
図８　聖武天皇の行幸経路（和歌山市博物館提供）
図９　万葉集の頃の紀ノ川と和歌の浦の地形（日下1976）
図10　奈良・平安時代の地形と主な遺跡
図11　室町時代頃の地形と中世の主な遺跡
写真１　泥質片岩（Ps）と苦鉄質片岩（Ms）（浪早崎）
写真２　苦鉄質片岩（田の浦漁港）
写真３　苦鉄質片岩（雑賀崎）
写真４　苦鉄質片岩中の石英脈（雑賀崎）
写真５　苦鉄質片岩の微褶曲（雑賀崎）
写真６　泥質片岩中の砂質片岩（Sd）と石英片岩（Qs）及び微褶曲（新和歌浦）
写真７　泥質片岩からなる蓬莱岩（新和歌浦）

写真８　風化した泥質片岩（妹背山）
写真９　泥質片岩の露頭（塩竈神社）
写真10　水軒堤防を覆う風成堆積物（西浜）
写真11　和歌浦干潟の主な底生動物の写真（古賀庸憲撮影）
写真12　水軒堤防全景
写真13　水軒堤防南端部（平成19年度調査）
表１　確認された相観植生単位
表２　文献および現地踏査による確認植物種内訳
表３　和歌の浦の植物相
第４章
図１　山部赤人の玉津島賛歌
図２　住吉如慶　紀州若浦之図（1645）
図３　住吉如慶　東照宮縁起
図４　御旅所　東照宮縁起
図５　小山吉三画「書簡図繪」杭州　戦前
図６　養翠園案内図
図７　原在明画
図８　紀伊国名所図会　巻の二（1811）
図９　歴史的に見た和歌の浦の範囲
図10　自然的名勝の範囲
図11　史跡の位置
図12　和歌の浦全体図
図13　第Ⅰ区
図14　第Ⅱ区
図15　第Ⅳ区
写真１　和歌の浦干潟
写真２　明治の頃の妹背山
写真３　章魚頭姿山から見る玉津島山
写真４　第Ⅰ区
写真５　章魚頭姿山から見る名草山、片男波
写真６　第Ⅱ区
写真７　第Ⅰ区、第Ⅲ区
写真８　第Ⅲ区　名草山
写真９　第Ⅳ区　章魚頭姿山
表１　構成要素一覧
表２　区分一覧表

第１章　経緯と経過

第１節　和歌の浦の位置

和歌山県は、近畿地方の南部に位置し、日本最大の半島である紀伊半島の西半部に位置する。山は森林資源に恵まれ、黒潮にも洗われる海と変化に富む海岸線、高野山や熊野三山など歴史文化に恵まれた地域である。ラムサール条約に登録された串本沿岸海域は、本州という高緯度に位置しながら、黒潮の強い影響下で、世界最北の大サンゴ群生域があり、熱帯魚類をはじめ多くのサンゴ礁性生物が生息している。また、標高1000ｍを超える山々が連なり、古来より神々が鎮まる神聖な土地とされてきた紀伊山地には、世界遺産に登録された修験道の拠点である「吉野・大峰」、熊野信仰の中心地である「熊野三山」、真言密教の根本道場である「高野山」の三霊場とそれらを結ぶ「参詣道」から構成される「紀伊山地の霊場と参詣道」がある。人の営みにより世代を超えて形成されてきた文化的景観を中心とする紀伊山地の自然と山岳霊場及び参詣道は、世界でも類を見ない価値の高い文化遺産である。

県庁所在地である和歌山市は、和歌山県の最も北、大阪府に接する位置にあり、紀ノ川河口に位置する。中世には鉄砲集団として有名な雑賀孫一が率いる雑賀衆がおり、また江戸時代は御三家紀州徳川家が治める紀州藩の城下町として栄えた。和歌山県面積の約４％であるが、県人口の約37％が集中し、近畿地方の府県庁所在地としては、大阪市、神戸市に次いで人口密度が高い。

和歌山市の南部に位置する和歌の浦は、万葉の時代より景勝地として著名な地である。神亀元年（724）聖武天皇の行幸で、宮廷歌人山部赤人により詠まれた、「若の浦に潮満ちくれば潟を無み　芦辺をさして鶴鳴き渡る」（万葉集　巻６・919）の名歌により、和歌の浦は都の貴族が憧れる地として、和歌の聖地、また歌枕として、名所となり、歴代天皇や貴族が訪れた。

近世には、和歌山城主浅野氏や徳川氏によって和歌の浦は保護、整備され、西国三十三カ所巡礼や高野山

図１　和歌山県

参詣の折に大勢の人びとが訪れた。紀州藩初代藩主徳川頼宣は、父家康を祀る東照宮、母養珠院を祀る妹背山多宝塔を整備して、歌枕としての和歌の浦に記念となる文化施設が備わることとなった。

明治以降、紀州藩の保護は途絶えたが、明治28年に県立和歌公園としての整備と活用が図られるようになり、また関西の奥座敷とも呼ばれる観光地となる。大正14年7月17日に、『和歌山県史跡天然記念物保存顕彰規程』に基づき、和歌山県の名勝に指定されて、その歴史的景観保全が図られた。

図２　和歌の浦位置図

第２節　和歌の浦学術調査委員会の設置

昭和31年９月29日に『和歌山県文化財保護条例』が制定された。その附則第２号により『和歌山県指定文化財規則』（昭和26年和歌山県教育委員会規則第７号）による指定文化財の指定を受けているものは、昭和33年３月31日までに限り、これを指定文化財とみなすとされた。その後、和歌の浦については指定されなかった。

平成19年６月24日、和歌の浦は、和歌山県教育委員会によって、県指定文化財名勝・史跡に指定された。指定範囲は、玉津島神社、塩竈神社、天満宮、東照宮、妹背山海禅院などの神社仏閣を中心として、芦辺屋・朝日屋跡地、不老橋、三断橋、奠供山、鏡山、御手洗池など面積10.2ヘクタールに及び、今後も追加指定を行う予定である。

平成20年９月に、国指定記念物の指定を目指し、和歌の浦の範囲やその学術的価値の検討を行うため、教育委員会が和歌の浦学術調査委員会（以下、調査委員会）を設置した。調査委員会では、和歌の浦が形成されてきた歴史、また名勝及び史跡としての価値の検討を行った。

調査委員会は３回開催された。第１回調査委員会では、和歌の浦に関してその対象を検討し、第２回調査委員会では、各分野に関して、第２章第１節地質を吉松敏隆、第２節植生を高須英樹、第３節生物を古賀庸憲、第４節地理的環境と考古資料を和歌山市教育委員会前田敬彦、第４章第３節２．⑵を菅原正明、第４章第３節４．第４節近現代を米田頼司、その他は県教育委員会が作成した案の監修を、古代を村瀬憲夫、中世を柏原卓、近世を藤本清二郎、米田頼司、庭園に関しては高瀬要一が行い、総括を水田義一会長が行うこととした。第３回調査委員会では、作成された案を全体的に検討し、学術調査報告書を完成した。印刷は平成22年度に行った。

表１　県指定名勝・史跡和歌の浦学術調査委員会

（五十音順）

氏名	所属・役職	専門分野	その他
柏　原　　卓	和歌山大学教育学部教授	国語学	
古　賀　庸　憲	和歌山大学教育学部教授	生物学（動物生態学）	
菅　原　正　明	元県立博物館副館長	考古学	副会長
高　須　英　樹	和歌山大学教育学部教授	生物学（植物生態学）	
高　瀬　要　一	和歌山県立紀伊風土記の丘館長	造園史	
藤　本　清二郎	和歌山大学教育学部教授	近世史	
村　瀬　憲　夫	近畿大学文芸学部教授	古代日本文学	
水　田　義　一	和歌山大学教育学部教授	歴史地理	会長
吉　松　敏　隆	前和歌山県立向陽高等学校校長	地質学	
米　田　頼　司	和歌山大学教育学部准教授	社会学	

和歌山県教育委員会

教育長	山口裕市（平成20年4月1日～）
生涯学習局長	宮下和己（平成20年4月1日～平成21年3月31日）
	井上　誠（平成21年4月1日～）
文化遺産課長	木下　淳（平成20年4月1日～平成21年3月31日）
	津井宏之（平成21年4月1日～）
教育企画員	田中修司（平成20年4月1日～平成22年3月31日）
副課長	吉田政弘（平成20年4月1日～平成22年3月31日）
	濱口　洋（平成22年4月1日～）
調査班長	渋谷高秀（平成20年4月1日～）
調査班	高橋智也（平成20年4月1日～）

和歌山市教育委員会

文化財班長	山田暢之（平成20年4月1日～平成21年3月31日）
	額田雅裕（平成21年4月1日～）
企画員	前田敬彦（平成20年4月1日～平成21年3月31日）

第２章　土地利用と法規制

和歌の浦は、さまざまな用途に利用された市街地であり、各種の法規制によって景観の保全が図られている。都市計画法により、区域指定がなされ、土地利用の用途地域指定がなされている。文化財保護法、和歌山県文化財保護条例、和歌山市文化財保護条例によって文化財指定され、現状を変更するには許可が必要な記念物、修理をする際には届出が必要な重要文化財などがある。また、自然公園法、和歌山県都市公園条例、和歌山市都市公園条例により保存と活用が図られる公園もある。風致地区内における建築等の規制に関する条例により、緑豊かな景観を形成している土地に対して緑地景観を守るための法規制もある。和歌の浦を構成する重要な要素である松に対しては、高度公益機能保安林、これを守るために周辺部の地区保全森林が指定され、緑が守られている。和歌浦の重要性からこれらの法規制は、重層する地区もある。

第１節　都市計画法による土地利用について

郊外の農地や山林を無秩序に開発し虫食い状態の市街化を作らないようにするため、図１下段のように、都市計画区域を市街地として積極的に開発していく地域（市街化区域）と、市街化を抑制して優良な農地や自然を残していく地域（市街化調整区域）に分割して土地利用の規制をしている。

更に、市街化区域においては、図１中段及び表１のように、住居系・商業系・工業系の12の用途を設定し建築できるものを制限したり商業施設を積極的に立地できるようにすることにより市街地を効率的に発展させ住み良いまちづくりをおこなっている（市HPより）。

市街化調整区域は、雑賀崎の瀬戸内海国立公園地域、田ノ浦地区、雑賀崎地区があり、その他の地区は、市街化地域である。なお、和歌の浦干潟の東側に位置する布引地区は、市街化調整区域である。

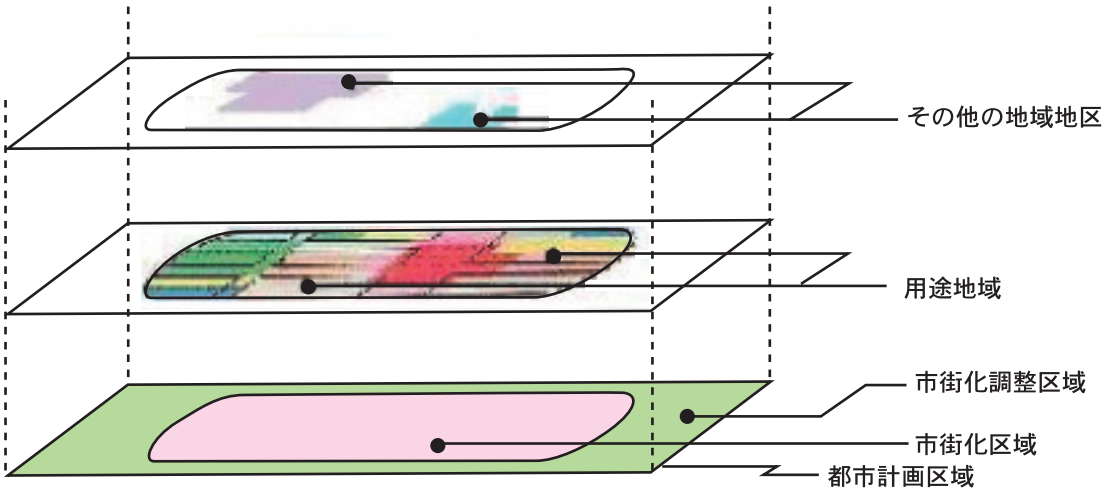


図１　土地の利用について（和歌山市ホームページより）

市街化地域の中の用途地域では、第１種低層住居専用地域には、和歌公園の権現山地区、秋葉山公園、第１種中高層住居専用地域には、和歌の浦東地区、片男波地区、第１種住宅地域には、和歌の浦中地区、準住居地域には、和歌の浦東地区の本町和歌浦線の両側、近隣商業地域としては、国道42号沿いの地区及び和歌の浦中の明光通りから和歌の浦南地区にかけて指定されている。商業地域としては、和歌の浦南地区の漁港の一部が指定されている。

表１　用途区分一覧表

用途地域	内容
第１種低層住居専用地域	低層住宅の良好な環境を守るための地域。小規模な店舗や事務所を兼ねた住宅や小中学校などが建てられる。高さ制限は10m。
第２種低層住居専用地域	主に低層住宅の良好な環境を守るための地域。小中学校などのほか、150㎡までの一定の店舗などが建てられる。高さ制限は10m。
第１種中高層住居専用地域	中高層住宅の良好な環境を守る為の地域。病院、大学、500㎡までの一定の店舗などが建てられる。
第２種中高層住居専用地域	主に中高層住宅の良好な環境を守る為の地域。病院、大学などのほか、1500㎡までの一定の店舗や事務所などが建てられる。
第１種住宅地域	住居の環境を守る為の地域。3000㎡までの店舗、事務所、ホテルなどは建てられる。
第２種住居地域	主に住居の環境を守るための地域。店舗、事務所、ホテル、パチンコ屋、カラオケボックスなどは建てられる。
準住居地域	道路の沿道において、自動車関連施設などの立地と、これと調和した住居の環境とを保護するための地域。
近隣商業地域	近隣の住民が日用品の買い物をする店舗等の業務の利便の増進を図る地域。住宅や店舗のほかに小規模の工場も建てられる。
商業地域	銀行、映画館、飲食店、百貨店、事務所などの商業等の業務の利便の増進を図る地域。住宅や小規模の工場も建てられる。
準工業地域	主として工業の業務の利便の増進を図る地域で、どんな工場でも建てられる。住宅や店舗は建てられますが、学校、病院、ホテルなどは建てられない。
工業専用地域	専ら工業の業務の利便の増進を図る地域。どんな工場でも建てられますが、住宅、店舗、学校、病院、ホテルなどは建てられない。

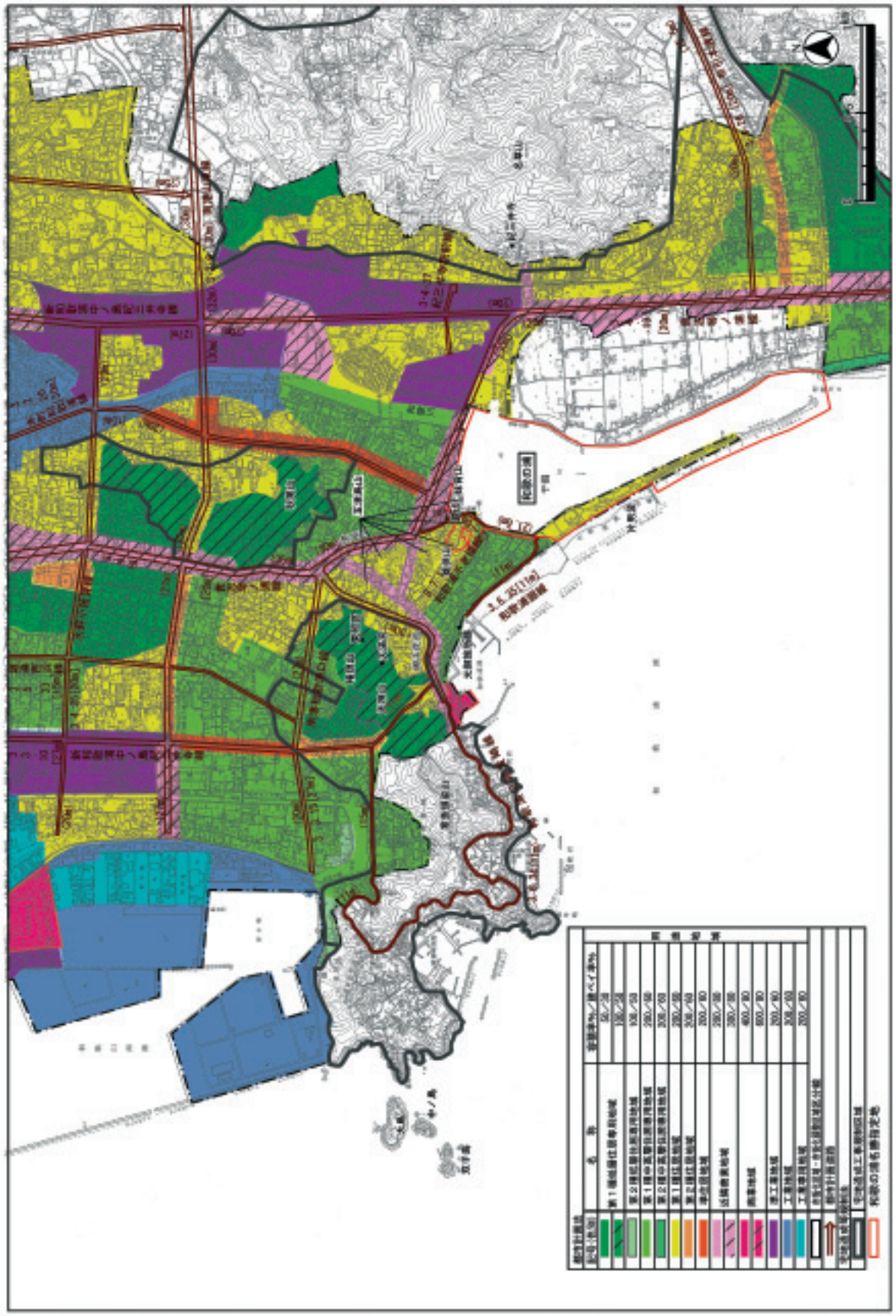


図２　和歌の浦の法規制図・用途区分

第２節　文化財保護法、和歌山県並びに和歌山市文化財保護条例による文化財保護

文化財保護法第27条、和歌山県文化財保護条例第３条、和歌山市文化財保護条例第３条により、指定されている和歌浦に関連する記念物、有形文化財以下のとおりである。また、登録有形文化財としては、和田家住宅、梅本家住宅、多田家住宅、小西家住宅などがある。

表２　文化財一覧表

文化財	種別	名称　及び　員数	指定年月日
記　念　物	名勝・史跡（県指定）	和歌の浦 奠供山　玉津島神社　塩竈神社　天満宮　東照宮　妹背山と三断橋　芦辺屋・朝日屋と鏡山　不老橋　御手洗池公園	平成20年６月24日
	史跡（市指定）	桑山玉州の墓	昭和46年１月９日
		猊口石	昭和63年３月30日
	名勝（市指定）	紀三井寺の三井水（三カ所）	昭和42年２月14日
	天然記念物（県指定）	鷹の巣「上人の窟」	昭和34年４月23日
	天然記念物（市指定）	紀三井寺　樟樹	昭和42年２月14日
		紀三井寺　応同樹	昭和41年２月11日
有形文化財	建造物（重要文化財）	天満神社本殿　１棟	大正５年５月24日
		天満神社楼門　１棟	昭和10年５月13日
		天満神社　２棟 末社多賀神社本殿（１棟）、末社天照皇太神宮豊受大神宮本殿（１棟）	昭和49年５月21日
		東照宮　７棟 本殿・石の間・拝殿、唐門、東西瑞垣（２棟）	大正５年５月24日
		楼門、東西回廊（２棟）	昭和40年５月29日
		護国院多宝塔　１棟 護国院楼門　１棟 護国院鐘楼　１棟	明治41年４月23日
	建造物（県指定）	護国院本堂　１棟	昭和49年４月９日
	建造物（市指定）	不老橋	平成７年５月10日
		妹背山　海禅院多宝塔	昭和42年２月14日
		湊御殿	昭和42年２月14日

文化財	種別	名称　及び　員数	指定年月日
有形文化財	美術工芸品 工芸品（重要文化財）	東照宮 徳川家康所用　南蛮胴具足　１領	昭和52年６月11日
		太刀13口７口	大正２年４月14日
		太刀２口	大正３年４月17日
		太刀１口	大正９年４月15日
		太刀２口	大正13年４月15日
		太刀１口	昭和３年４月４日
		歴代紀州藩奉納刀　13口	平成２年４月18日
		徳川家康所用　紺地宝尽小紋小袖 他３袖	昭和52年６月11日
		徳川家康所用　装束類	平成２年４月18日
		徳川頼宣所用　装束類	平成２年４月18日
	工芸品（県指定）	甲冑　４領２頭　馬具　４脅３双 弓鮮具（きゅうせんぐ）１手９張２具 （228本）、唐物茶壺銘華山他　４口、 牡丹唐草文様金華山裂　４枚	平成２年４月18日
	彫刻（重要文化財）	護国院　木造千手観音立像　１軀、 木造十一面観音立像　２軀	明治30年12月28日
		木造梵天帝釈二天王立像　２軀	明治32年８月１日
	彫刻（市指定）	金蔵院　大日如来座像　１軀	平成元年５月23日
		遍照院　木彫釈迦如来　１軀	昭和44年12月11日
	絵画（県指定）	東照宮　絵本著名東照宮縁起絵巻 ５巻	平成２年４月18日
	絵画（市指定）	穀屋寺　絵本着色紀三井寺縁起絵図	昭和44年12月11日
		雲蓋院　和歌浦図	昭和60年４月９日
	歴史資料（市指定）	望海楼遺址碑	平成20年８月31日
		奠供山碑	昭和63年３月30日

1. 御手洗池　2. 奠供山　3. 玉津島神社　4. 塩竈神社　5. 妹背山と三断橋
6. 天満宮　7. 東照宮　8. 鏡山と朝日屋、芦辺屋跡　9. 不老橋

図３　和歌山県指定文化財名勝・史跡和歌の浦の範囲

1. 御手洗池

2. 奠供山

3. 玉津島神社

4. 塩竈神社

5. 妹背山と三断橋

6. 天満宮

7. 東照宮

8. 鏡山と朝日屋、芦辺屋跡

9. 不老橋

写真１　県指定文化財名勝・史跡和歌の浦

第３節　自然公園法による国立公園指定

和歌山市においては、友が島、雑賀崎周辺部が自然公園法第５条により国立公園に指定されている範囲である。雑賀崎周辺は、景勝地として評価され、昭和25年５月に瀬戸内海国立公園に指定（編入）されており、海岸部一帯は、第３種特別地域、雑賀崎の大島、中の島、双子島は、第１種特別地域*となっている。

＊特別地域　風致の維持に重要な地域が指定され、その重要度により第一種から第三種までの区分がある。普通地域で届出が必要な行為に加え、指定動植物の採取や損傷、建物の色の塗り替え、自動車や船の乗り入れなどに「許可」が必要になる。また、木や花などを植える際にも植生の影響を考慮するため、「許可」が必要になる。

第４節　都市計画法、和歌山県並びに和歌山市都市公園条例による公園指定

和歌の浦には、和歌公園、雑賀崎公園、秋葉山公園、御手洗池公園がある。これらの公園は、和歌山県管理の和歌公園と和歌山市管理の秋葉山公園、御手洗池公園がある。

和歌公園

1895（明治28）年に内務大臣により、「和歌公園」として、古くから万葉集に歌われた名勝地和歌浦地区10箇所が指定され、明治30年６月29日追加決定された。面積にして56町３反７畝21歩である。全国的に見て時期も早く面積も大きい点が評価される。また指定の仕方には特徴があり、名勝和歌の浦を構成する核心的な部分である緑地、砂州、社寺仏閣など点々と分布している物件や土地を網羅して指定した点である。

和歌公園の都市計画法による緑地公園決定は、昭和23年５月15日になされている。和歌公園は、国有地、県有地である。公園を構成するのは、権現山地区、津屋公園・城跡山地区、大相寺地区、妹背山地区、鏡山地区、奠供山地区、片男波地区、８の字公園からなる。和歌山県によって整備活用が図られている。また御手洗池公園は、都市計画法による緑地公園の県告示が昭和48年12月25日になされ、東照宮所有地で、和歌山市が管理整備している。

雑賀崎公園

風致公園*として、和歌山市により昭和23年５月15日告示されたが、開設はされていない。

秋葉山公園

和歌山市により昭和23年５月15日告示された。頂上部からは、和歌山市内が一望できる。現在和歌山市により風致公園として整備され、活用が図られている。

＊風致公園は、特殊公園のうち、主として風致（自然の風景などのおもむき、味わい）の享受の用に供することを目的とする都市公園であり、樹木地、湖沼海浜等の良好な自然的環境を形成する土地を選定し、配置されたものをいう。

第５節　都市計画法による風致地区指定

和歌浦、雑賀崎、秋葉山が、昭和16年12月22日に内務省告示第668号により指定されている。また都市計画法の公園緑地決定に三地域ともに告示されている。

第３号御坊山地区（秋葉山）

第２種風致地区

第４種風致地区

第４号　和歌浦地区

第１種風致地区　和歌公園内の権現山地区、妹背山地区、奠供山～鏡山、および玉津島を含めた地区、片男波公園、秋葉山公園、御手洗池公園

第４種風致地区　第４号和歌浦地区（片男波）～和歌浦中

第５号新和歌浦雑賀崎地区

第１種風致地区

第２種風致地区

第３種風致地区

第４種風致地区

＊都市計画法（1968）第58条第１項および関連法令の規制を受けるべき土地として指定される「都市計画区域」のうち、風致地区は都市内部の公園・庭園・寺院・神社など緑豊かな景観を形成している土地に関して、都市の土地利用計画上、都市環境の保存を図るため指定する。規制としては、建築物の高さ、建ペイ率の規制等が各自治体の条例でかけられている。和歌山市の場合、建ペイ率、外壁からの後退距離、建物の高さ、緑化率の規制により第１種から第４種まで違いがある。

第６節　港湾法に基づく港湾及び港湾区域

今回指定された区域は、港湾法（昭和25年法律第218号）第33条第２項において準用する同法第９条の規定により和歌山県において管理する港湾及び港湾区域である（和歌山県報平成12年２月22日告示136号）。

和歌山下津港湾区域　　和歌川旭橋の下流域の河川水面、ただし、漁港法に基づき指定された雑賀崎漁港、田ノ浦漁港、和歌浦漁港の区域を除く。

第７節　海岸法に基づく海岸保全区域

今回指定された区域は、海岸法（昭和31年法律第101号）第３条第１項の規定により、海岸保全区域に指定されている（和歌山県告示第538号）。

1	沿　岸　名	和歌山県紀州灘沿岸
2	海　岸　名	和歌山下津港海岸
3	地区海岸名	片男波地区海岸
4	指 定 場 所	和歌山県和歌山市和歌浦南二丁目地内及び地先 和歌山県和歌山市和歌浦南三丁目地内及び地先

第８節　河川法に基づく河川区域

今回指定された１級河川紀ノ川水系和歌川（大門川を含む。）のうち、旭橋南から河口部までの河川区域は、河川法（昭和39年７月10日法律第167号）第９条第２項により、和歌山県が管理する河川区域である。

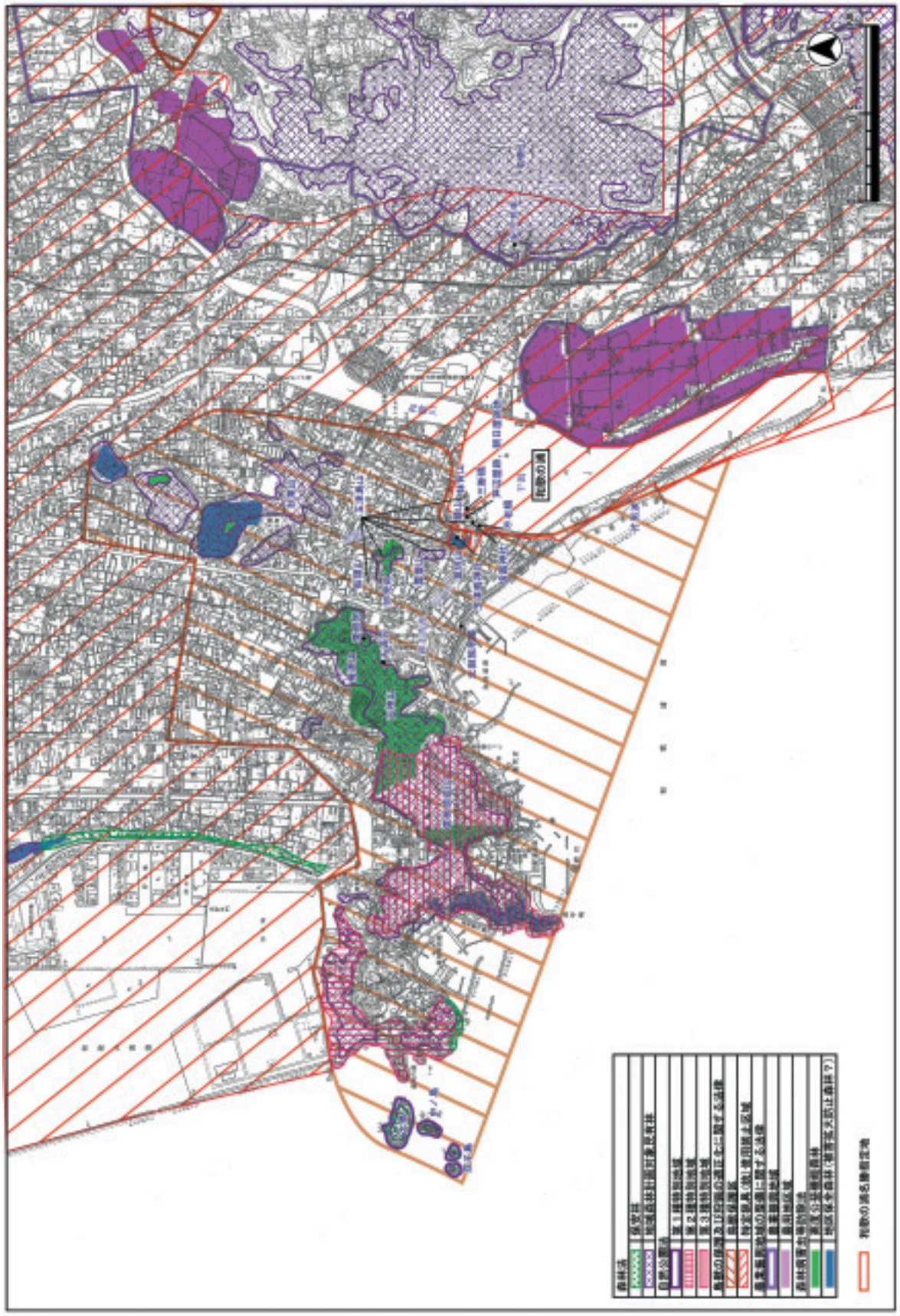


図４　和歌の浦の法規制図（自然公園）

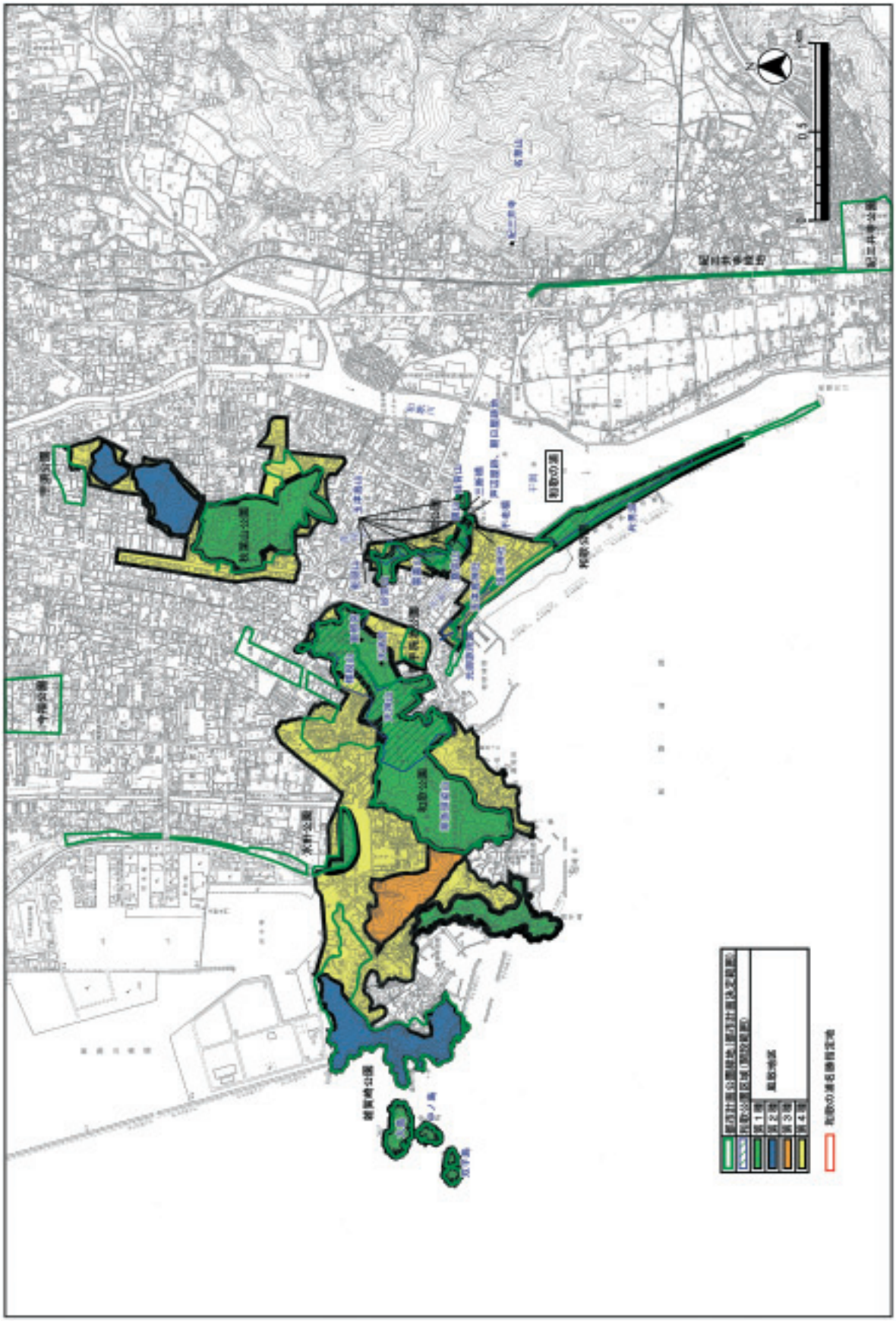


図５　和歌の浦の法規制図（都市公園・風致地区）

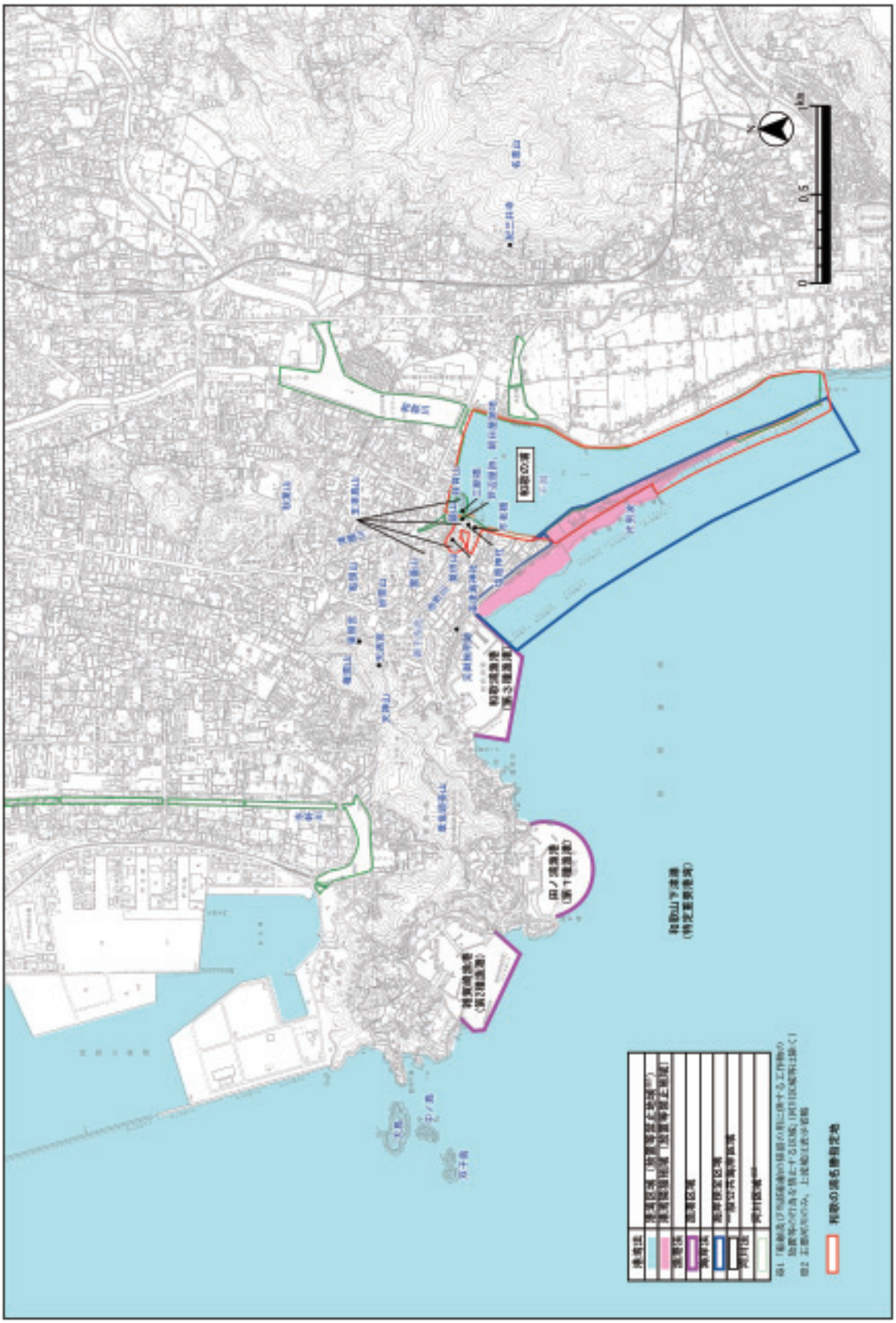


図６　和歌の浦の法規制図（港湾・海岸・河川区域）

第９節　和歌山県松食い虫被害対策事業推進計画に基づく区域指定

高度公益機能森林*としては、和歌公園の権現山地区、城跡山地区（妙見山）が指定され、地区保全森林としては、雑賀崎の一部、玉津島神社、秋葉山公園がある。

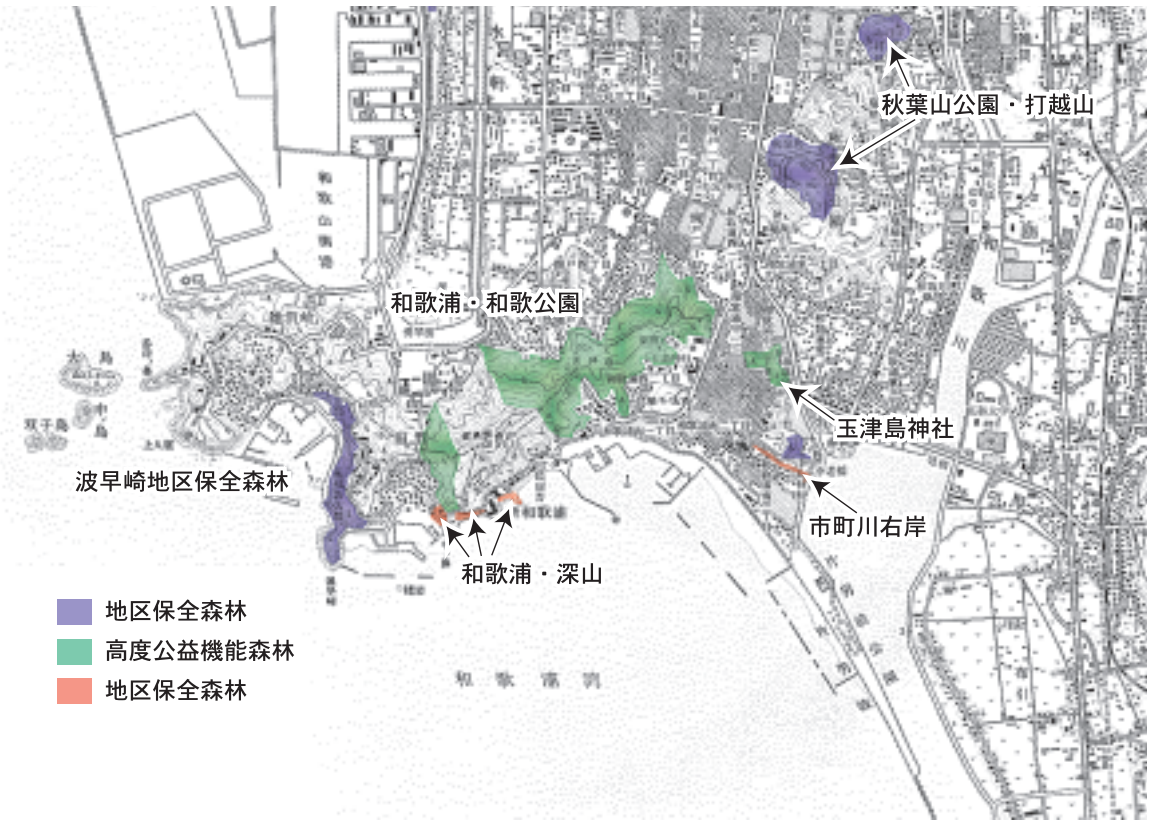


図７　和歌山県　高度公益機能森林、地区保全森林位置図（和歌山県作成）

＊高度公益機能森林とは、松林及びその他の公益的機能が高い松林であって、松以外の樹木では当該機能を確保することが困難な団地を形成する。
松林地区保全森林その位置及び規模からみて、当該森林の所有または管理者が自主防除を行わなければ高度保安公益機能森林に被害が拡大するおそれがあるとみとめられる団地を形成する松林。

第10節　その他

和歌浦干潟は、環境省が指定する重要湿地500に選定されている。片男波海水浴場は、平成18年5月に環境省が選定した「快水浴場百選」の海の部で特選。浪早ビーチは、海の部で選定されている。章魚頭姿山は、全国観光地百選海岸美1位である。（社）和歌山県観光連盟によって和歌の浦の片男波周辺は朝日百選に、雑賀崎・田の浦周辺は夕日百選に選定されている。

以上のように、名勝和歌の浦を構成している万葉時代の六つの島、玉津島の緑の空間及び内湾である干潟と海を区分する砂州は、和歌公園として保存と活用が図られている。また緑豊かな景観により第1種風致地区として、和歌公園の片男波公園、奠供山地区、権現山地区、妹背山地区、さらに奠供山に続く和歌浦中地区が、第4種風致地区として和歌浦南地区が指定されている。章魚頭姿山全体は、瀬戸内海国立公園、和歌公園として守られている。和歌の浦の景観形成の重要な要素である松の緑に関しては、高度公益機能森林として和歌公園の権現山地区、城跡山地区が守られている。天満宮の背後の天神山、東照宮の背後の権現山、養珠寺跡地の背後の雑賀衆の城があったとされる城跡山（妙見山）は、その重要度により和歌公園、第1種風致地区、高度公益機能森林と三種の規制下にある。また和歌公園である片男波公園や妹背山地区は、第1種風致地区でもある。

名勝和歌の浦の景観は、明治以降指定された県立和歌公園として、その主要な部分は守られ、更に重層して風致地区としても保全されてきたのである。社寺仏閣である玉津島神社、天満宮、東照宮、妹背山多宝塔を中心とした緑の空間、砂州に対する景観保全は、現在も継続してそれを守るための各種法規制の中にある。平成20年6月には、県指定文化財名勝・史跡和歌の浦として、奠供山、玉津島神社、塩竈神社、天満宮、東照宮、妹背山と三断橋、芦辺屋・朝日屋跡と鏡山、不老橋、御手洗池公園に対し和歌山県文化財保護条例により文化財指定が行われ、文化財としても保護されることとなった。

第３章　自然・地理環境

第１節　和歌の浦地域の地質環境について

1. 地質概説

和歌の浦地域は、中央構造線の南側に分布する三波川帯に位置し、山地部及び平地部の基盤岩は変成岩類、平地部は沖積層からなる。三波川帯は、関東山地から中部地方、紀伊半島、四国をへて九州佐賀関半島まで、延長800km 以上にわたって連なり、低温高圧型の広域変成岩類からなる地帯である。三波川帯の変成岩類の色や地質構造が、特有の地形や景観を醸し出し、景勝地となっている所も多く、和歌の浦の他に、埼玉県の長瀞渓谷や三重県の二見浦、徳島県の大歩危・小歩危などがある。なお、三波川帯及び後述の御荷鉾緑色岩類の名称は、群馬県藤岡市を流れる神流川上流の三波川及びその流域にそびえる御荷鉾山に由来する。

和歌山県内の三波川帯は、和泉山脈の南麓にそって東西に延びる中央構造線と長峰山脈南麓の有田川構造線に挟まれた地帯で、北は和泉層群、南は秩父帯と接している。三波川帯を構成する変成岩類は、北部の三波川結晶片岩類及び南部の玄武岩溶岩や火山砕屑岩、蛇紋岩などからなる弱変成の御荷鉾緑色岩類である。

結晶片岩類は、堆積岩などの岩石が形成された後に強い圧力等を受け、鉱物が再結晶して別の岩石になったもので、源岩によって苦鉄質片岩（緑色片岩）、泥質片岩（黒色片岩）、石英片岩などに分類され、片理と呼ばれる縞模様が発達する。緑色岩類は、海底火山活動による岩石などが弱変成した岩石で、緑色をなす。

図１　地質概略図

三波川帯の北部は、結晶片岩類に曹長石の斑晶を伴う点紋帯と、それを伴わない無点紋帯とに区分でき、和歌の浦地域は、無点紋帯に属する。無点紋帯の変成度については、緑泥石からザクロ石帯低温部にあたることから、点紋帯よりも低い330～440℃ の温度条件下であったと考えられる（廣田1991）。

変成岩類の源岩の大半は、中生代ジュラ紀の堆積岩類で、変成作用は中生代白亜紀後期と考えられている。県北部の御荷鉾帯、無点紋帯、点紋帯のカリウム－アルゴン年代値は、それぞれ125.1～91.2Ma（×百万年）、96.7～74.0Ma、75.0～72.0Maである（栗本1995）。

和歌山平野に広く分布する沖積層は、海岸平野及び谷底平野堆積物、浜堤堆積物、風成堆積物、砂浜堆積物、旧河道堆積物、現河床堆積物からなる（宮田ほか1993）。紀ノ川北岸に

位置する楠見西小学校北東200 m付近のボーリング調査では、深度約27 mまではシルト、砂礫、砂などの沖積層、それ以深約31 mまでは角礫の後期更新世（1～10万年前）、さらに約67 mまでは中央構造線の破砕帯、74～80 mには中期更新世（10～70万年前）の地層が重なっている（岡田ほか1998）。

2. 和歌の浦地域の地質

⑴三波川結晶片岩類

和歌の浦地域に分布する三波川帯の結晶片岩類は、曹長石の斑晶を含まない無点紋帯の結晶片岩類であり、おもに苦鉄質片岩、泥質片岩、石英片岩からなる。浪早崎から雑賀崎にかけての地域には、おもに苦鉄質片岩、章魚頭姿山から天神山、秋葉山公園及び名草山にかけては、おもに泥質片岩が広く分布し、苦鉄質片岩や石英片岩を伴う。以下に、宮田隆夫ほか（1993）をもとにして記述する。

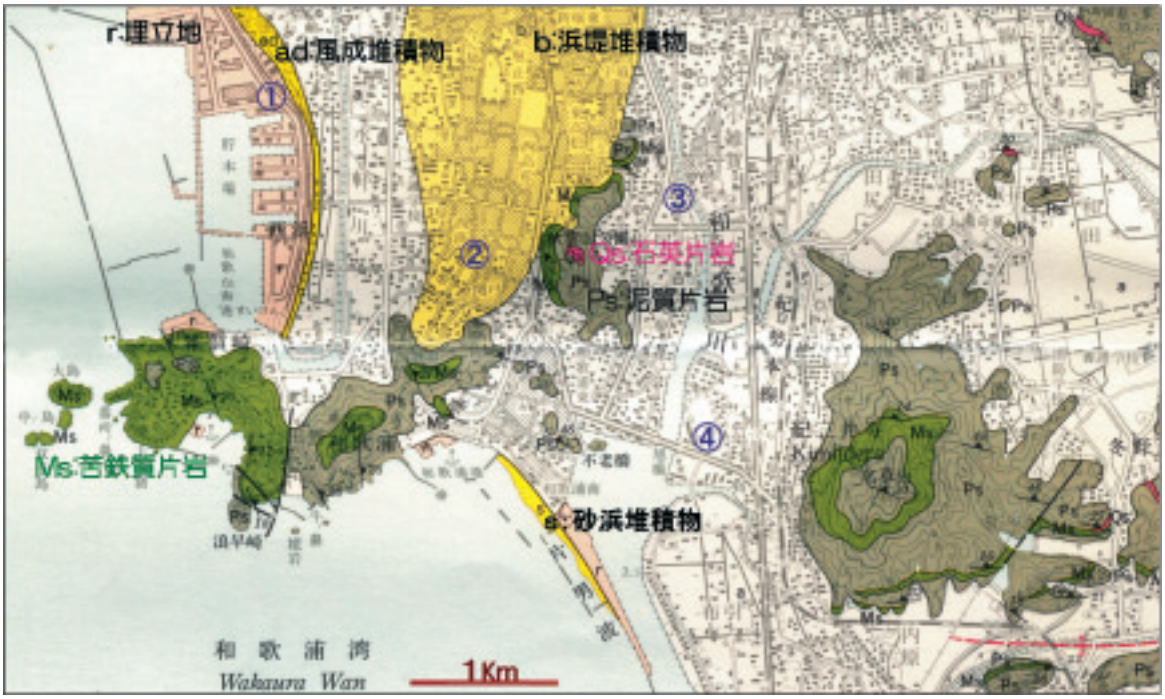


図２　和歌の浦地域の地質図（宮田隆夫ほか：1993から引用）
①～④：図３のボーリング地点を表す。

①泥質片岩

泥質岩を源岩とする結晶片岩で、暗灰色をなし、黒色片岩とも呼ばれる。片理が著しく発達し、石英、曹長石に富む優白質層と緑泥石や石墨に富む暗灰色の層の縞状構造をなしている（写真９）。片理面上には、ちりめんじわ褶曲による線構造が見られる。また、和歌浦から雑賀崎にかけての海岸沿いでは、泥質片岩が何枚も重なる板を折りたたみかけたような構造をなすキンク褶曲や泥質片岩に強い圧力がはたらき、ある方向に雁

行状の割れ目ができ、そこに珪質な熱水が入って結晶したエシェロン状の石英脈がみられる。

②砂質片岩

砂岩を源岩とする結晶片岩で、淡灰色ないし黄褐色をなす。多くは、層厚数10㎝以下で、しばしば泥質片岩と互層する（写真６）。泥質片岩に比べ、片理や線構造の発達は弱く、石英や曹長石をより多く含んでいる。

③苦鉄質片岩

玄武岩質火山性堆積岩を源岩とし、緑ないし暗緑色をなす。マグネシウムや鉄に富む有色鉱物を多く含み、緑色片岩、塩基性片岩とも呼ばれている。雑賀崎付近に分布する苦鉄質片岩は、見かけの層厚が約100ｍで、玄武岩質火山性堆積物を主体とし、一部にピローブレッチャ（枕状溶岩片）を挟んでいる（写真３）。苦鉄質片岩には、泥質片岩ほど一般的ではないが、片理面上にちりめんじわ褶曲が認められる（写真５）。無点紋片岩の苦鉄質片岩は、おもに緑泥石、緑れん石、アクチノ角閃石、曹長石、石英からなる。また、しばしば残留単斜輝石を含むことがある（写真４）。

④石英片岩

おもにチャートや石英に富む砂岩から変成した岩石で、石英が最も多く、斜長石や緑泥石などを含む。石英が卓越するものは、灰ないし灰白色をなすが、随伴する鉱物によって緑色や灰青色、赤褐色をなす。調査地域では、秋葉山で観察できる。多くの場合、泥質片岩の薄層と互層しており、源岩が層状チャートと考えられている（写真６）。

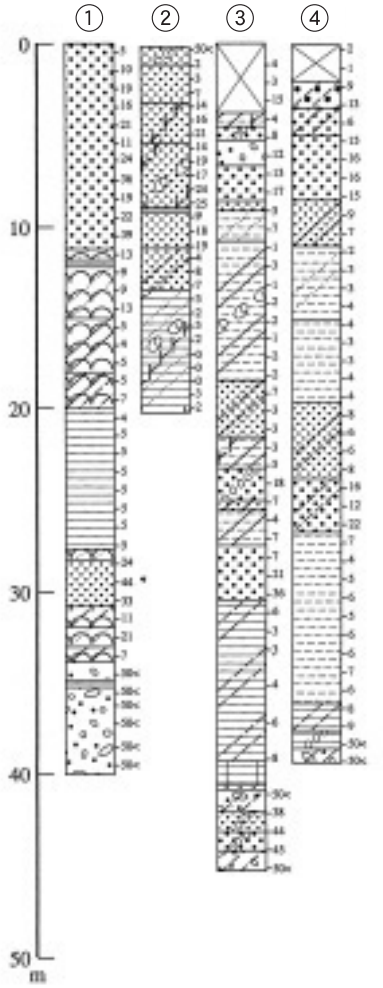


図３　地質柱状図
（国土地理院：2000，1/25,000土地条件図和歌山から引用。調査地点は図２参照）

⑵第四系

和歌浦周辺の平地に広がる第四系について、図３の地質柱状図に基づいて以下に記述する。

和歌山市西浜の地点①では、地表から順に、中粒砂層、砂ないし粘土、シルトまじりの火山灰質ローム層、粘土層が厚く重なり、その下位の地下約35ｍ以深はＮ値（標準貫入試験の値）が50以上の砂礫層からなる。

紀ノ川左岸の低地は、縄文海進時には内湾となっていたと考えられ、その後、７世紀までには紀ノ川の堆積作用が進み、広域にわたって沖積低地が形成された（日下1973）と考えられている。

和歌山市塩屋の地点③では、地表から順に、中粒砂層、

貝化石や粘土混じりのシルト層、シルト混じりの中粒砂層、腐食植物や粘土混じりのシルト層、礫混じりの中粒砂層、粘土混じりのシルト層、中粒砂層、シルト混じりの粘土層、固結粘土層が重なり、さらにその下位の地下約40～45ｍにはＮ値が50前後でシルト混じりの砂礫ないし礫混じりの細ないし中粒砂層が見られる。和歌川流域は、縄文海進以降11世紀頃まで紀ノ川の主流が通過していたと考えられる（日下1980）。

⑶地質構造

和歌川の東方にある名草山周辺地域では、片理の一般走向は東－西から西北西－東南東とかなり一定し、全体として北傾斜である。一方、西方の雑賀崎から秋葉山にかけての地域では、片理の一般走向がN30°ＥからN30°Ｗとばらつきが見られ、傾斜は東へ５°ないし30°と緩やかである。

このように、和歌川をはさんで両地域では、一般走向に差異が認められるものの、片理面上のちりめんじわ褶曲などによる線構造はともにほぼ東西方向に集中し、その大部分が東に沈下している。

和歌川の西方における一般走向の変化および傾斜が緩いことは、この地域が褶曲構造の軸部に当たるためと判断される（宮田ほか1993）。

3. おわりに

近年、三波川帯は、ジュラ紀から白亜紀にかけての海洋プレートの沈み込みに伴う付加帯であり、地下深くで変成され、その後地表に現れたと考えられている。

和歌の浦地域は、三波川帯の結晶片岩類からなり、双子島等の島々を含めて番所ノ鼻から浪早崎にかけての海岸線には苦鉄質片岩（緑色片岩）、蓬莱岩や妹背山を含めて田野漁港から新和歌浦にかけて泥質片岩（黒色片岩）がよく露出している。これらの結晶片岩類がもつ片理構造や含有鉱物に由来する緑や黒などの色調、その後の変動による断層や褶曲、石英脈等の特性がアクセントをつけて、この地域特有の地形・景観を醸している。

和歌の浦地域の海岸線は、露頭条件が良く県内の三波川帯の形成過程を研究する上で絶好のフィールドであり、古くから多くの地質研究者が訪れ、公表されている論文も多い。最近では、エシェロン状の石英脈から、地下深部における岩石の溶解と流体移動を伴う変形メカニズムを明らかにする研究も行われている。また、和歌川河口部に形成されている片男波の砂州は、高松や水軒地区の砂州とともに和歌山平野の発達史を明らかにする上でも重要な地形、堆積物である。和歌の浦は、瀬戸内海国立公園の指定地域の一部であり、最近、環境省によって和歌山県地域の管理計画が策定されている。

このように、和歌の浦の地域は、結晶片岩類の基盤岩とそれを覆う第四紀の地層からなり、今も地質学的研究が行われている重要な地域であるとともに、自然の営みによってつくられた特有の地形、景観を背景として、万葉の古から続く歴史・文化を育んできた貴重な地域であると言える。

〈露頭写真〉

写真１　泥質片岩(Ps)と苦鉄質片岩(Ms)（浪早崎）

写真２　苦鉄質片岩（田の浦漁港）

写真３　苦鉄質片岩（雑賀崎）

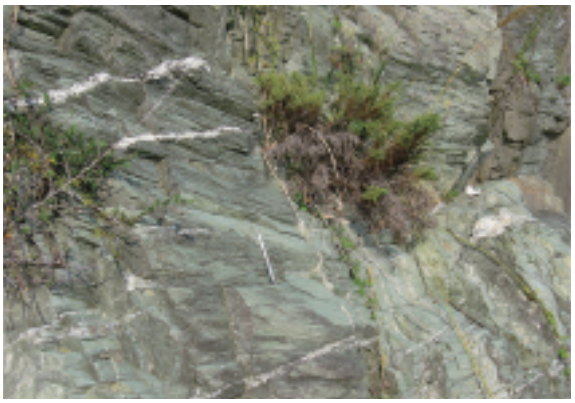


写真４　苦鉄質片岩中の石英脈（雑賀崎）

写真５　苦鉄質片岩の微褶曲（雑賀崎）

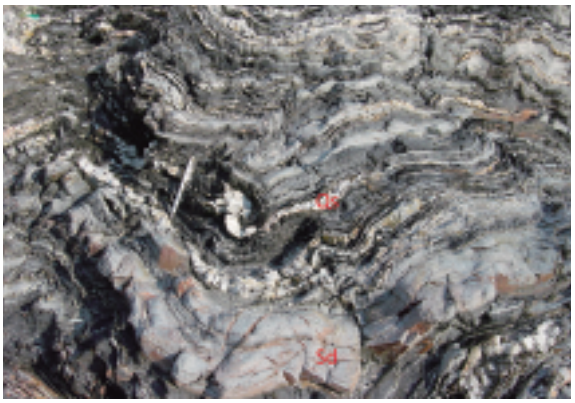


写真６　泥質片岩中の砂質片岩（Sd）と石英片岩（Qs）及び微褶曲（新和歌浦）

写真７　泥質片岩からなる蓬莱岩（新和歌浦）

写真８　風化した泥質片岩（妹背山）

写真９　泥質片岩の露頭（塩竈神社）

写真10　水軒堤防を覆う風成堆積物（西浜）

第２節　植生

1. 植生概要

和歌の浦および秋葉山周辺域の現地踏査で確認できた植物群落は、表１に示したように15群落とその他６土地利用単位である。しかし、自然植生の分布域は極めて限定的であり、ほとんどの植生は代償植生で占められている。

表１　確認された相観植生単位

基本分類		相観植生単位
自然植生	海岸風衝低木林	トベラーウバメガシ群落 マサキートベラ群落 サカキーヒサカキ群落
	海岸断崖地草本植生	アゼトウナ群落
代償植生	常緑広葉樹二次林	ヒメユズリハーヤブニッケイ群落 ウバメガシーヤマモモ群落 ウバメガシ群落
	常緑針葉樹二次林	クロマツ群落 アカマツ群落
	落葉広葉樹二次林	コナラーハゼノキ群落 アカメガシワークサギ群落
	植林	マダケ群落 モウソウチク群落
	二次草地	ダンチク群落 ススキ群落
その他		園地林 芝生地 造成裸地 構造物 自然裸地 解放水域

天神山から権現山、章魚頭姿山へと続く丘陵部は、その多くが東照宮および天満宮の社叢林として保護されてきた森林であるが、本来は常緑針葉樹二次林であるクロマツ群落およびアカマツ群落であったと考えられる。しかし、1970年代以降の度重なるマツ枯れによって、多くのマツが枯死した。斜面上部や尾根にはマツを多く含む林分も存在するが、斜面下部や谷部では、高木層にはホルトノキ、クロガネモチ、ツブラジイ、カゴノキ等の常緑広葉樹やイヌマキなどが優占している。また亜高木層には、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、アラカシ、サカキ等が、低木層にはアオキ、ネズミモチ、ヤブニッケイ、サカキ、ホルトノキ、カクレ

ミノ等の常緑広葉樹がおおく、マツ類の若木や実生はほとんど認められない。草本層は海岸近くに多いシダ植物、イシカグマが優占しており、その他ベニシダ、イノデ、オニヤブソテツなどが多く認められる。中でも天満宮の社叢は、部分的にアカマツが残り、アカマツーウバメガシ林の様相を呈した林分も認められる。こうした林分はやや乾燥した立地に成立しており、アカマツ、アイグロマツのほかヤマモモ、ウバメガシ、カナメモチ、マルバグミ、シャシャンボ、ヒサカキ、カクレミノ、マンリョウ等によって特徴づけられる。一方草本層はコシダのほかベニシダ、イタチシダ類などがわずかに認められる程度で、種数も被度も少ない。

大島、中島、双子島を含む雑賀崎地域の植生は、自然植生としての海岸風衝低木林が成立している。すなわち、トベラーウバメガシ群落、マサキートベラ群落、サカキーヒサカキ群落が部分的に発達する（中村正寿．1978）。大島を除いて平坦部の植生の多くはやはりクロマツ群落であったと考えられるが、このクロマツもその大半が現在は枯死している。かわって、マサキ、トベラ、シャリンバイ、オオバグミ、モッコク、ネズミモチ等が増加しイブキやネズミサシなどの針葉樹が点在するほか、イタビカズラ、テイカカズラ、フユヅタ等のつる植物や、ハマボッス、ツワブキ、ハマウド、ハマナデシコ、ツルナ、アゼトウナ等の海岸性植物が多く認められる。

大島の平坦部はネザサの密生するネザサ群落であったことが記録されている（中村正寿．1978）。しかしこのネザサは1971年の一斉開花によって枯死し、ススキ群叢から遷移の進行に伴って、ヒメユズリハ、トベラ、シャリンバイ、マサキ、オオバグミ等の常緑広葉樹が優占する群落になっている。大形のオオバグミが密集した個体群を形成していること、林床にキキョウランが認められることは大きな特徴である。ユリ科のキキョウランは南西諸島では多くの自生が認められるが、九州、四国ではまれとなり、淡路島と並んで雑賀崎地域が北限の自生生育地となっている。

中島も小規模ながらよく発達したクロマツ群落であったが、現在クロマツはほとんど認められない。かわって、ウバメガシ林がよく発達し、イブキを混成させている。中島は、キキョウランの大きな個体群が発達する点で大変貴重である。双子島は頂上部にわずかに植生が成立するにすぎないが、エノキ、ウバメガシ、マサキ、トベラ、ヤブニッケイ、オオバグミ等がかなり密生した群落を形成している。

秋葉山の山頂近くの平坦地には、アカマツおよびクロマツと両者の雑種であるアイグロマツがやや優占したマツ群落が認められる。周囲の斜面および斜面下部も、かつてはこうしたマツ群落であったと考えられるが、現在はほとんどすべて枯死してしまった。代わって、クロガネモチ、クスノキ、アラカシ、ヤブニッケイなど、常緑性樹木が優占する常緑広葉樹二次林となっている。しかし、クヌギ、コナラ、ハゼ、ノグルミ、エノキ、ムクノキ等の落葉広葉樹も相当混在しており、明確な群落型は認めがたい。亜高木層および低木層にはカクレミノ、ネズミモチ、シャシャンボ、カナメモチ等の常緑性樹種が多いが、イヌビワやムラサキシキブ、ネジキなどの落葉性樹種も交えている。草本層は乾燥のためか概して発達が悪い。

2. 植物相

植物相の概要は表２にまとめた。表にも示されたように、文献による記録112種を含めて、シダ植物16科41種、裸子植物３科６種（１雑種を含む)、被子植物81科312種、合計359種を記録した。この植物相リストには我が国の野生種だけでなく、帰化植物も含めた。また、園芸・栽培植物は除外したが、これらが移出して自生している場合は取り上げた。

表２　文献および現地踏査による確認植物種内訳

分類群			科数	属数	種数
シダ植物			16	28	41
裸子植物			3	3	6
被子植物	双子葉植物	離弁花類	50	120	162
		合弁花類	20	61	84
	単子葉植物		11	52	66
合計			100	264	359

この中には和歌山県版レッドデータブック記載種が３種含まれている。すなわち、イブキ（準絶滅危惧)、ジュウニヒトエ(絶滅危惧ＩＢ類)、ツメレンゲ(絶滅危惧Ⅱ類)である。レッドデータブック記載種ではないが、先にも述べたようにキキョウランが、分布北限の種として重要である。こうした分布限界の種としては、クスドイゲも重要である。この種は九州、四国では普通種であり、山口県から岡山県までの瀬戸内沿岸にも比較的多く認められるが、兵庫県以東、近畿地方では極めてまれな種である。また他の地域では比較的まれなホルトノキが多数認められることも和歌の浦周辺のみならず、和歌山市周辺の森林として特徴的なことである。

特筆すべきこととしては、最近、雑賀崎（トンガの鼻）からタブノキの生育が確認されたことである（土井．2003)。タブノキは日本を代表する照葉樹林の重要な構成要素であり、九州から東北地方までの広い分布域を占める種である。しかし、瀬戸内沿岸地域にはほとんどその生育が認められず、服部（服部．1987、1992、1993、2002）は、年降水量1600ｍｍの等値線より内側の地域での分布の欠落を示したうえで、乾燥条件による発芽の抑制が大きくその原因となっている可能性を示している。和歌山県でも従来タブノキの分布は由良町以北では知られていなかった。

3. 植物相リスト

表３　和歌の浦の植物相

	科名	学名	和名
シダ植物	ヒカゲノカズラ科	*Lycopodium serratum* Thunb.	トウゲシバ
	イワヒバ科	*Selaginella remotifolia* Spring.	クラマゴケ
	トクサ科	*Equisetum arvense* L.	ギナ
	ハナヤスリ科	*Botrychium japonicum*（Prantl）Underw.	オオハナワラビ
		Ophioglossum petiolatum Hook.	コヒロハハナヤスリ
	ゼンマイ科	*Osmunda japonica* Thunb.	ゼンマイ
	ウラジロ科	*Dicranopteris linearis*（Burm. fil.）Underw	コシダ
		Gleichenia japonica Spr.	ウラジロ
	フサシダ科	*Lygodium japonicum*（Thunb.）Sw.	カニクサ
	コバノイシカグマ科	*Hypolepis punctata*（Thunb.）Mett. ex Kuhn	イワヒメワラビ
		Microlepia marginata（Panzer）C. Chr.	フモトシダ
		Microlepia marginata（Panzer）C. Chr. var. *bipinnata* Makino	クジャクフモトシダ
		Microlepia strigosa（Thunb.）Presl.	イシカグマ
		Pteridium aquilinum（L.）Kuhn var. *latiusculum*（Desv.）Underw. ex Hell.	ワラビ
	ホングウシダ科	*Sphenomeris chinensis*（L.）Maxon	ホラシノブ
	ホウライシダ科	*Coniogramme intermedia* Hieron	イワガネゼンマイ
		Onychium japonicum（Thunb.）Kunze.	タチシノブ
	イノモトソウ科	*Pteris cretica* L.	オオバノイノモトソウ
		Pteris multifida Poir.	イノモトソウ
	チャセンシダ科	*Asplenium incisum* Thunb.	トラノオシダ
		Asplenium sparelii Hook.	コバノヒノキシダ
	オシダ科	*Arachniodes aristata*（Forst.）Tindale	ホソバカナワラビ
		Arachniodes simplicior（Makino）Ohwi	ハカタシダ
		Arachniodes simplicior（Makino）Ohwi var. *major*（Tagawa）Ohwi	オニカナワラビ
		Cyrtomium falcatum（L. lil.）Prel.	オニヤブソテツ
		Cyrtomium fortunei J. Sm.	ヤブソテツ
		Dryopteris championi（Benth.）C. Chr. ex Ching	サイゴクベニシダ
		Dryopteris erythrosora（Eaton）O. Ktze.	ベニシダ
		Dryopteris pacifica（Nakai）Tagawa	オオイタチシダ
		Dryopteris lacera（Thunb.）O. Ktze.	クマワラビ
		Dryopteris uniformis（Makino）Makino	オクマワラビ
		Dryopteris varia（L.）O. Ktze.	ナンカイイタチシダ
		Polystichum polyblepharum（Roem. ex Kunze.）Presl	イノデ
	ヒメシダ科	*Stegnogramma pozoi*（Lagasca）K. Iwats. subsp. *mollissima*（Fischer ex Kunze）K. Iwats.	ミゾシダ
		Thelypteris acuminata（Houtt.）Morton	ホシダ
		Thelypteris dentata（Forsk.）St. John	イヌケホシダ
	イワデンダ科	*Diplazium subsinuatum*（Wall. ex Hook. et Grev.）Tagawa	ヘラシダ
	ウラボシ科	*Crypsinus hastatus*（Thunb.）Copel.	ミツデウラボシ
		Lemmaphyllum microphyllum Presl	マメヅタ
		Lepisorus thunbergianus（Kaulf.）Ching	ノキシノブ

		Pyrrosia lingua（Thunb.）Farw.	ヒトツバ
種子植物			
裸子植物	マツ科	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ
		Pinus densi-thunbergii Uyeki	アイグロマツ
		Pinus thunberugii Parlatore	クロマツ
	ヒノキ科	*Juniperus chinensis* L.	イブキ
		Juniperus rigida Sieb. et Zucc.	ネズミサシ
	マキ科	*Podocarpus macrophyllus*（Thunb.）D. Don	イヌマキ
被子植物			
双子葉類			
離弁花類	ヤマモモ科	*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.	ヤマモモ
	クルミ科	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.	ノグルミ
	ブナ科	*Castanea arenata* Sieb. et Zucc.	クリ
		Castanopsis cuspidata（Thunb. ex Murray）Schottky	ツブラジイ
		Quercus acutissima Carruthers	クヌギ
		Quercus glauca Thunb. ex Murray	アラカシ
		Quercus phillyraeoides A. Gray	ウバメガシ
		Quercus serrata Thunb. ex Murray	コナラ
	ニレ科	*Aphananthe aspera*（Thunb.）Planch.	ムクノキ
		Celtis sinensis Pers. var. *japonica*（Planch.）Nakai	エノキ
		Ulmus parvifolia Jacquin	アキニレ
	クワ科	*Broussonetia kajinoki* Sieb.	ヒメコウゾ
		Fatoua villosa（Thunb.）Nakai	クワクサ
		Ficus erecta Thunb.	イヌビワ
		Ficus nipponica Fr. et Sav.	イタビカズラ
		Humulus japonicus Sieb. et Zucc.	カナムグラ
	タデ科	*Persicaria capitata*（Buch.-Ham. ex D. Don）H. Gross	ヒメツルソバ
		Persicaria longiseta（De Bruyn）Kitag.	イヌタデ
		Persicaria senticosa（Fr. et Sav.）H. Gross	ママコノシリヌグイ
		Polygonum aviculare L.	ミチヤナギ
		Polygonum filiforme Thunb.	ミズヒキ
		Reynoutria japonica Houtt.	イタドリ
		Rumex acetosa L.	スイバ
		Rumex acetosella L.	ヒメスイバ
		Rumex japonicus Houtt.	ギシギシ
	ツルナ科	*Tetragonia tetragonoides*（Pall.）O. Kuntze	ツルナ
	スベリヒユ科	*Portulaca oleracea* L.	スベリヒユ
	ナデシコ科	*Cerastium viscosum* L.	オランダミミナグサ
		Dianthus japonicus Thunb.	ハマナデシコ
		Myosoton aquaticum（L.）Moench	ウシハコベ
		Sagina japonica（Sw.）Ohwi	ツメクサ
		Silene gallica L. var. *galiica* L.	シロバナマンテマ
		Stellaria media（L.）Villars	ハコベ
	アカザ科	*Chenopodium album* L.	アカザ
	ヒユ科	*Achyranthes bidentata* Blume var. *japonica* Miq.	ヒカゲイノコズチ
		Achyranthes fauriei Lev. et Van	ヒナタイノコズチ
	マツブサ科	*Kadsura japonica*（Thunb.）Dunal	サネカズラ
	ヤドリギ科	*Viscum album* L. subsp. coloratum Komarov	ヤドリギ

モクレン科	*Michelia compressa*（Maxim.）Sargent	オガタマノキ
クスノキ科	*Cinnamomum camphora*（L.）Presl.	クスノキ
	Cinnamomum japonicum Sieb. ex Nakai	ヤブニッケイ
	Lindera glauca（Sieb. et Zucc.）Blume	ヤマコウバシ
	Litsea coreana Leveille	カゴノキ
	Machilus thunbergii Sieb. et Zucc.	タブノキ
	Neolitsea sericea（Bl.）Koidz.	シロダモ
キンポウゲ科	*Aquilegia adoxoides*（DC.）Ohwi	ヒメウズ
	Clematis apiifolia DC.	ボタンヅル
	Clematis terniflora DC.	センニンソウ
	Ranunculus quelpaertensis Nakai	キツネノボタン
	Thalictrum aquilegifolium L. var. *intermedium* Nakai	カラマツソウ
メギ科	*Nandina domestica* Thunb.	ナンテン
アケビ科	*Akebia quinata*（Thunb.）Decaisne	アケビ
	Akebia trifoliata（Thunb.）Koidz.	ミツバアケビ
	A. x pentaphylla Makino	ゴヨウアケビ
ツヅラフジ科	C *occulus trilobus*（Thunb.）DC.	アオツヅラフジ
	Stephania japonica（Thunb.）Miers	ハスノハカズラ
ドクダミ科	*Houttuynia cordata* Thunb.	ドクダミ
コショウ科	*Piper kadzura*（Chois.）Ohwi	フウトウカズラ
ツバキ科	*Camellia japonica* L.	ヤブツバキ
	Camellia sinensis（L.）O. Kuntze	チャ
	Cleyera japonica Thunb.	サカキ
	Eurya emarginata（Thunb.）Makino	ハマヒサカキ
	Eurya japonica Thunb.	ヒサカキ
	Ternstroemia gymnanthera（Wright et Arn.）Beddome	モッコク
ケシ科	*Corydalis incisa*（Thunb.）Pers.	ムラサキケマン
アブラナ科	*Macleaya cordata*（Willd.）R. Br.	タケニグサ
	Capsella bursa-pastoris（L.）Medic.	ナズナ
	Cardamine flexuosa With.	タネツケバナ
	Lepidium virginicum L.	マメグンバイナズナ
	Raphanus sativus L. var. *hortensis* Backer f. *raphanistroides* Makino	ハマダイコン
	Rorippa indica（L.）Hieron.	イヌガラシ
ベンケイソウ科	*Orostachys japonicus*（Maxim.）Berger	ツメレンゲ
	Sedum makinoi Maxim.	マルバマンネングサ
ユキノシタ科	*Deutzia scabra* Thunb.	マルバウツギ
	Sxifraga stolonifera Meerb.	ユキノシタ
トベラ科	*Pittosporum tobira*（Thunb. ex Murray）Aiton	トベラ
バラ科	*Agrimonia pilosa* Ledeb. var. *japonica*（Miq.）Nakai	キンミズヒキ
	Amelanchier asiatica（Sieb. et Zucc.）Endl. ex Walp.	ザイフリボク
	Duchesnea indica（Andr.）Focke var. *leacocephala* Makino	ヘビイチゴ
	Eriobotrya japonica（Thunb.）Lindl.	ビワ
	Geum japonicum Thunb.	ダイコンソウ
	Pourthiaea villosa（Thunb.）Decne var. *laevis*（Thunb.）Stapf	カマツカ
	Prunus hisauchiana Koidz. ex Hisauchi	ヤマザクラ
	Rosa multiflora Thunb.	ノイバラ

	Rosa wichuraiana Crepin	テリハノイバラ
	Rubus hirsutus Thunb.	クサイチゴ
	Rubus microphyllus L. fil.	ニガイチゴ
	Rubus parvifolius L.	ナワシロイチゴ
	Rubus buergeri Miq.	フユイチゴ
	Rubus palmatus Thunb. var. *coptophyllus* A. Gray	モミジイチゴ
	Rubus sieboldii Blume	ホウロクイチゴ
イラクサ科	*Boehmeria niponoinivea* Koidz.	カラムシ
	Boehmeria nivea（L.）Gaudich. var. *tenacissima*（Gaudich.）Miq.	ナンバンカラムシ
マメ科	*Amphicarpaea edgeworthii* Benth. var. *japonica* Oliver	ヤブマメ
	Albizia julibrissin Durazz.	ネムノキ
	Caesalpimia decapetala（Roth）Alst. var. *japonica*（Sieb. et Zucc.）Ohashi	ジャケツイバラ
	Canavalia lineata（Thunb.）DC.	ハマナタマメ
	Desmodium paniculatum（L.）DC.	アレチヌスビトハギ
	Desmodium racemosum（Thunb.）DC.	ヌスビトハギ
	Indigofera pseudo-tinctoria Matsum.	コマツナギ
	Kunmerovia striata（Thunb.）Schindler	ヤハズソウ
	Lespedeza cuneata（DuMont de Courset）G. Don	メドハギ
	Lespedeza cyrtobotrya Miq.	マルバハギ
	Lespedeza pilosa（Thunb.）Sieb. et Zucc.	ネコハギ
	Lotus corniculatus L. var. *japonicus* Regel	ミヤコグサ
	Pueraria lobata（Willd.）Ohwi	クズ
	Rhynchosia volubilis Lour.	タンキリマメ
	Sophora hlavescens Ait.	クララ
	Trifolium repens L.	シロツメクサ
	Trifolium dubium Sibth.	コメツブツメクサ
	Vicia angustifolia L.	カラスノエンドウ
	Vicia hirsuta（L.）S. F. Gray	スズメノエンドウ
	Vicia tetrasperma（L.）Schreb.	カスマグサ
	Wisteria florobunda（Willd.）DC.	フジ
カタバミ科	*Oxalis corniculata* L.	カタバミ
	Oxalis corymbosa DC.	ムラサキカタバミ
	Oxalis dillenii Jacq.	オッタチカタバミ
フウロソウ科	*Geranium thunbergii* Sieb. et Zucc.	ゲンノショウコ
トウダイグサ科	*Acalypha australis* L.	エノキグサ
	Euphorbia supina Rafin.	コニシキソウ
	Euphorbia maculata L.	オオニシキソウ
	Mallotus japonicus（Thunb.）Muell. Arg.	アカメガシワ
	Mercurialis leiocarpa Sieb. et Zucc.	ヤマアイ
ユズリハ科	*Daphniphyllum teijsmannii* Zoll. ex Kurz	ヒメユズリハ
ニガキ科	*Ailanthus altissima* Swingle	ニワウルシ
センダン科	*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq.	センダン
ウルシ科	*Rhus javanica* L. var. *roxburghii*（DC.）Rehder et Wils.	ヌルデ
	Rhus succedanea L.	ハゼノキ
モチノキ科	*Ilex chinennsis* Sims	ナナミノキ
	Ilex crenata Thunb.	イヌツゲ

		Ilex integra Thunb.	モチノキ
	ニシキギ科	*Ilex pedunculosa* Miq.	ソヨゴ
		Ilex rotunda Thunb.	クロガネモチ
		Euonymus alatus（Thunb.）Sieb. f. *striatus*（Thunb.）Makino	コマユミ
		Euonymus japonicus Thunb.	マサキ
		Euonymus sieboldianus Bl.	マユミ
		Celastrus orbiculatus Thunb.	ツルウメモドキ
	ミツバウツギ科	*Euscaphis japonica*（Thunb.）Kanitz	ゴンズイ
	ブドウ科	*Ampelopsis brevipedunculata*（Maxim.）Trautv. var. *heterophylla*（Thunb.）Hara	ノブドウ
		Parthenocissus tricuspidata（Sieb. et Zucc.）Planch.	ツタ
		Cayratia japonica（Thunb.）Sagn.	ヤブガラシ
	ホルトノキ科	*Elaeocarpus sylvestris*（Lour.）Poir. var. *ellipticus*（Thunb.）Hara	ホルトノキ
	アオギリ科	*Firmana simplex*（L.）W. F. Wight	アオギリ
	グミ科	*Elaeagnus macrophylla* Thunb.	オオバグミ
		Elaeagnus pungens Thunb.	ナワシログミ
	イイギリ科	*Xylosma congestum*（Lour.）Merr.	クスドイゲ
	スミレ科	*Viola grypoceras* A. Gray	タチツボスミレ
		Viola manndshurica W. Becker	スミレ
		Viola ovato-oblonga（Miq.）Makino	ナガバタチツボスミレ
	ウリ科	*Trichosanthes cucumeroides*（Ser.）Maxim.	カラスウリ
		Melothria japonica（Thunb.）Maxim. ex Cogn.	スズメウリ
	ミズキ科	*Aucuba japonica* Thunb.	アオキ
		Swida macrophylla（Wall.）Sojak	クマノミズキ
	ウコギ科	*Dendropanax trifidus*（Thunb.）Makino	カクレミノ
		Fatsia japonica（Thunb.）Decne. et Planch.	ヤツデ
		Hedera rhombea（Miq.）Bran	フユヅタ
	セリ科	*Angelica japonica* A. Gray	ハマウド
		Chamaele decumbens（Thunb.）Makino	セントウソウ
		Cnidium japonicum Miq.	ハマゼリ
		Hydrocotyle sibthorpioides Lam.	チドメグサ
		Osmorhiza aristata（Thunb.）Makino et Yabe	ヤブニンジン
		Torilis japonica（Houtt.）DC.	ヤブジラミ
合弁花類	ツツジ科	*Lyonia ovalifolia*（Wall.）Drude var. *elliptica*（Sieb. et Zucc.）Hand.-Mazz.	ネジキ
		Rhododenndron macrosepalum Maxim.	モチツツジ
		Vaccinium bracteatum Thunb.	シャシャンボ
		Vaccinium oldhamii Miq.	ナツハゼ
	サクラソウ科	*Lysimachia mauritiana* Lam.	ハマボッス
	ヤブコウジ科	*Ardisia crenata* Sims	マンリョウ
		Ardisia japonica（Thunb.）Blume	ヤブコウジ
		Myrsine seguinii Lev.	タイミンタチバナ
	カキノキ科	*Diospyros kaki* Thunb.	カキノキ
	ハイノキ科	*Simplocos glauca*（Thunb.）Koidz.	ミミズバイ
		Simplocos prunifolia Sieb. et Zucc.	クロバイ
	モクセイ科	*Ligstrum japonicum* Thunb.	ネズミモチ
		Ligstrum obtusifolium Sieb. et Zucc.	イボタノキ

キョウチクトウ科	*Trachelospermum asiaticum*（Sieb. et Zucc.）Nakai	テイカカズラ
アカネ科	*Damnacanthus macrophyllus* Sieb. ex Miq.	ジュズネノキ
	Galium kikumugura Ohwi	キクムグラ
	Galium niewerthi Fr. et Sav.	ヤエムグラ
	Gardenia jasminoides Ellis	クチナシ
	Paederia scandens（Lour.）Merrill	ヘクソカズラ
ヒルガオ科	*Calystegia soldanella*（L.）Roem. et Schult.	ハマヒルガオ
	Convolvulus arvensis L.	セイヨウヒルガオ
ムラサキ科	*Trigonotis peduncularis*（Trevir.）Benth.	キュウリグサ
クマツヅラ科	*Callicarpa japonica* Thunb.	ムラサキシキブ
	Callicarpa mullis Sieb. et Zucc.	ヤブムラサキ
	Clerodendrum trichotomum Thunb.	クサギ
シソ科	*Ajuga nipponensis* Makino	ジュウニヒトエ
	Clinopodium gracile（Benth.）O. Kuntze	トウバナ
	Lamium album L. var. *barbatum*（Sieb. et Zucc.）Fr. et Sav.	オドリコソウ
	Lamium amplexicaule L.	ホトケノザ
	Lamium purpureum L.	ヒメオドリコソウ
ナス科	*Lycium chinense* Miller	クコ
	Solanum americanum Mill.	アメリカイヌホオズキ
ゴマノハグサ科	*Paulownia tomentosa*（Thunb.）Steud.	キリ
	Veronica arvensis L.	タチイヌノフグリ
	Veronica persica Poiret	オオイヌノフグリ
キツネノマゴ科	*Justicia procumbens* L.	キツネノマゴ
オオバコ科	*Plantago asiatica* L.	オオバコ
	Plantago virginica L.	ツボミオオバコ
スイカズラ科	*Lonicera japonica* Thunb.	スイカズラ
	Viburmum dilatatum Thunb.	ガマズミ
オミナエシ科	*Patrinia villosa*（Thunb.）Juss.	オトコエシ
キキョウ科	*Wahlenbergia marginata*（Thunb.）A. DC.	ヒナギキョウ
キク科	*Ambrosia artemisiaefolia* L. var. *elatior*（L.）Descurtilz	ブタクサ
	Artemisia indica Willd.	ヨモギ
	Aster ageratoides Turcz. subsp. *ovatus*（Fr. et Sav.）Kitam.	ノコンギク
	Bidens frondosa L.	アメリカセンダングサ
	Bidens pilosa L. var. *pilosa* L.	コセンダングサ
	Cirsium maritimum Makino	ハマアザミ
	Conyza bonariensis（L.）Cronq.	アレチノギク
	Conyza canadensis（L.）Cronq.	ヒメムカシヨモギ
	Conyza sumatrensis（Retz.）Walker	オオアレチノギク
	Cotula australis（Spreng.）Hook. f.	マメカミツレ
	Crassocephalum crepidioides（Benth.）S. Moore	ベニバナボロギク
	Crepidiastrum keiskeanum（Maxim.）Nakai	アゼトウナ
	Dendranthema japonicum（Makino）Kitam.	リュウノウギク
	Erigeron annuus（L.）Pers.	ヒメジョオン
	Eupatorium chinennse L.	ヒヨドリバナ
	Facelis retusa（Lam.）Sch. Bip.	キヌゲチチコグサ
	Farfugium japonicum（L. fil.）Kitam.	ツワブキ
	Gnaphalium affine D. Don	ハハコグサ

		Gnaphalium japonicum Thunb.	チチコグサ
		Gnaphalium pensylvanicum Willd.	チチコグサモドキ
		Gnaphalium spicatum Lam.	ウラジロチチコグサ
		Hypochoeris radicata L.	ブタナ
		Ixeris dentata（Thunb.）Nakai	ニガナ
		Ixeris stolonifera A. Gray	ジシバリ
		Kalimeris yomena Kitam.	ヨメナ
		Lactuca indica L.	アキノノゲシ
		Lactuca sororia Miq.	ムラサキニガナ
		Lapsana apogonoides Maxim.	コオニタビラコ
		Leibnitzia anandria（L.）Turcz.	センボンヤリ
		Pertya scandens（Thunb.）Sch. Bip.	コウヤボウキ
		Picris hieracioides L. subsp. *japonica*（Thunb.）Krylov	コウゾリナ
		Senecio vulgaris L.	ノボロギク
		Solidago altissima L.	セイタカアワダチソウ
		Solidago virgaurea L. subsp. *asiatica* Kitam.	アキノキリンソウ
		Sonchus oleraceus L.	ノゲシ
		Taraxacum albidum Dahlst.	シロバナタンポポ
		Taraxacum japonicum Koidz.	カンサイタンポポ
		Taraxacum laevigatum（Willd.）DC.	アカミタンポポ
		Taraxacum officinale Weber	セイヨウタンポポ
		Xanthium occidentale Bertol.	オオオナモミ
		Youngia denticulata（Houttuyn）Kitam.	ヤクシソウ
		Youngia japonica（L.）DC.	オニタビラコ
単子葉類	ユリ科	*Allium grayi* Regel	ノビル
		Asparagus lucidus Lindley	クサスギカズラ
		Dianella ensifolia（L.）DC.	キキョウラン
		Hemerocallis fulva L.	ヤブカンゾウ
		Lilium lancifolium Thunb.	オニユリ
		Liriope minor（Maxim.）Makino	ヒメヤブラン
		Metanarthecium luteo-viride Maxim.	ノギラン
		Ophiopogon japonicus（L. fil.）Ker − Gawl.	ジャノヒゲ
		Ophiopogon japonicus（L. fil.）Ker − Gawl. var. *umbrosus* Maxim.	ナガバジャノヒゲ
		Ophiopogon planiscapus Nakai	オオバジャノヒゲ
		Reineckea carnea（Andr.）Kunth	キチジョウソウ
		Scilla scilloides（Lindl.）Druce	ツルボ
		Smilax china L.	サルトリイバラ
	ヒガンバナ科	*Lycoris radiata* Herb.	ヒガンバナ
	ヤマノイモ科	*Dioscorea japonica* Thunb.	ヤマノイモ
		Dioscorea quinqueloba Thunb.	カエデドコロ
		Dioscorea tenuipens Fr. et Sav.	ヒメドコロ
		Doiscorea tokoro Makino	オニドコロ
	アヤメ科	*Iris japonica* Thunb.	シャガ
		Sisyrinchium atlanticum Bicknell	ニワゼキショウ
		Tritonia x crocosmaeflora Lemoine	ヒメヒオウギズイセン
	イグサ科	*Juncus tenuis* Willd.	クサイ
		Luzula capitata（Miq.）Miq.	スズメノヤリ
	ツユクサ科	*Commelina communis* L.	ツユクサ

	Pollia japonica Thunb.	ヤブミョウガ
	Tradescantia fluminensis Vellozo	トキワツユクサ
イネ科	*Avena fatua* L.	カラスムギ
	Agropyron tsukushiense（Honda）Ohwi var. *transiens*（Hack.）Ohwi	カモジグサ
	Andropogon virginicus L.	メリケンカルカヤ
	Arundo donax L.	ダンチク
	Briza maxima L.	コバンソウ
	Briza minor L.	ヒメコバンソウ
	Bromus catharticus Vahl	イヌムギ
	Cynodon dactylon（L.）Pers.	ギョウギシバ
	Digitaria ciliaris（Retz.）Koei.	メヒシバ
	Digitaria violascens Link	アキメヒシバ
	Eleusine indica（L.）Gaertn	オヒシバ
	Eragrostis cilianensis Link ex vignolo Lutati	スズメガヤ
	Eragrostis curvula（Schrad.）Nees	シナダレスズメガヤ
	Eragrostis ferruginea（Thunb.）Beauv.	カゼクサ
	Eragrostis poaeoides Beauv.	コスズメガヤ
	Festuca myuros L.	ナギナタガヤ
	Imperata cylindrica（L.）Beauv.	チガヤ
	Miscanthus sinensis Anderss.	ススキ
	Oplismenus undulatifolius（Arduino）Romer et Schultes	チヂミザサ
	Sporobolus fertilis（Steud.）W. Clayton	ネズミノオ
	Paspalum dilatatum Poir	シマスズメノヒエ
	Paspalum urvillei Steud.	タチスズメノヒエ
	Pennisetum alopecuroides（L.）Spreng.	チカラシバ
	Phyllostachys bambusoides Sieb. et Zucc.	マダケ
	Phyllostachys heterocycla（Carr.）Mitford	モウソウチク
	Pleioblastus chino（Fr. et Sav.）Makino var. *viridis*（Makino）S. Suzuki	ネザサ
	Pseudosasa japonica（Sieb. et Zucc. ex Steud.）Makino	ヤダケ
	Setaria viridis（L.）Beauv.	エノコログサ
	Setaria viridis（L.）Beauv. var. *pachystachys*（Fr. et Sav.）Makino et Nemoto	ハマエノコロ
	Setaria glauca（L.）Beauv.	キンエノコロ
	Setaria faberi Herrm.	アキノエノコログサ
	Sorghum halepense（L.）Pers. var. *propinquum*（Hitchc.）Ohwi	セイバンモロコシ
	Poa annua L.	スズメノカタビラ
	Zoysia japonica Steud.	シバ
サトイモ科	*Arisaema thunbergii* Blume subsp. *urashima*（Hara）Ohashi et J. Murata	ウラシマソウ
カヤツリグサ科	*Carex lenta* D. Don	ナキリスゲ
	Cyperus rotundus L.	ハマスゲ
ヤシ科	*Trachycarpus fortunei*（Hook.）H. Wendl.	シュロ
ラン科	*Cymbidium goeringii*（Reichb. fil.）Reichb. fil.	シュンラン
	Liparis nervosa（Thunb.）Lindl.	コクラン

植物相調査の対象地域は、秋葉山、天神山から雑賀崎までの和歌の浦地区、妹背山、鏡山等を含む玉津島山地区および片男波である。

学名および科の配列は以下の文献に従った。

岩槻邦男編.	1992：	日本の野生植物　シダ	311pp.	平凡社.	東京.
佐竹義輔他編.	1989：	日本の野生植物　木本Ⅰ	321pp.	平凡社.	東京.
佐竹義輔他編.	1989：	日本の野生植物　木本Ⅱ	305pp.	平凡社.	東京.
佐竹義輔他編.	1982：	日本の野生植物　草本Ⅰ単子葉類	305pp.	平凡社.	東京.
佐竹義輔他編.	1982：	日本の野生植物　草本Ⅱ離弁花類	318pp.	平凡社.	東京.
佐竹義輔他編.	1981：	日本の野生植物　草本Ⅲ合弁花類	259pp.	平凡社.	東京.
清水建美編.	2003：	日本の帰化植物	337pp.	平凡社.	東京.
長田武正.	1989：	日本イネ科植物図譜	759pp.	平凡社.	東京.
鈴木貞雄.	1978：	日本タケ科植物総目録	384pp.	学習研究社.	東京.
大井次三郎.	1965：	改訂新版　日本植物誌　顕花編	1560pp.	至文堂.	東京.

第３節　和歌川河口干潟の範囲とそこに生息する底生動物

和歌川河口干潟は一般に認識されているよりも広い部分を含んでいる。この干潟は紀ノ川河口干潟と共に環境省の重要湿地500に指定されているが、指定区域は干潟域全体、すなわち、河口干潟の汽水域全体である。これは地元で片男波の干潟と呼ばれる場所だけでなく、和歌川については塩屋の水門まで、塩屋で和歌川と合流する和田川についてはさらに上流川の、潮の干満の影響を受ける場所まで（少なくとも紀勢本線の鉄橋よりは上）、紀三井寺川と中津川、そしてあしべ通りに沿って流れ不老橋に続く市町川についてはほぼ全域が和歌川河口干潟である。保全の関係上、詳細には触れないが、それぞれの場所が異なる環境条件を有することにより、全体として極めて多様な環境条件を有する干潟を形成している。この極めて多様な干潟環境が後述するように、全国屈指の底生生物相の生息を可能にしていると考えられる。

和歌川河口干潟の底生動物は、わかやま海域環境研究機構（2000）、堀（2002）、木邑ら（2003）、木邑ら（2004a，b）等に報告されている。レッドリスト種など貴重種が35種、全体で270種（他に魚類が58種）が記録されている。木邑ら（2004b）は「和歌川河口で34種もの貴重種が確認されていることは、この場所が、全国的に少なくなった干潟生物が多く生息する重要な干潟環境が維持されていると評価できる」と述べている。堀（2002）はトウガタガイ類６種の生息を報告したが（他の報告と合わせて８種確認）、そのうちヌノメホソクチキレとクラエノハマイトカケギリについては、生貝が採集されたのは和歌川河口干潟が初めてであった。生息情報が極めて少ないためかレッドリストにすら挙げられていない。和歌川河口には大正時代の途中まではアシ原が残り、シオマネキが多数生息していたらしいが、おそらく埋め立てなどによるアシ原の消失とともに絶滅し現在では見られない。

和歌川河口域で特筆すべき底生動物は、ワカウラツボ（局所的にまとまった個体群が生息、個体数は日本最大か；小林ら2003）、ハマグリ、８種のトウガタガイ類（堀2002；木邑ら2004a；未発表データ）、多くのレッドリスト種を含むオニツノガイ超科６種の生息（木邑ら2004a）（イボウミニナのまとまった個体群は九州以北では少なく希少性が特に高く、ヘナタリとウミニナの個体群は近畿地方最大）、イボキサゴ（河口付近に高密度で生息）、ハクセンシオマネキとオサガニ（どちらも近畿地方最大または最大級の個体群）、しばしば採集されるウモレマメガニ（古賀ら2003）等であろう。

古賀　2007の調査では和歌川から底生動物86種（他に硬骨魚類が４種）が記録され、これは上記の報告に比べるとはるかに少ない。しかし、新たにサザナミツボ、ハギノツユ、カゴメイトカケクチキレ、コヤスツララ、コウロエンカワヒバリガイ（貝類５種）、Glycera macintosh、ヤマトキョウスチロリ（多毛類２種）、ニホンドロソコエビ、シミズメリタヨコエビ、ニホンスナモグリ（甲殻類３種）、シロボヤ（ホヤ類１種）の合計11種が記録された。これまでの報告と合わせると、和歌川河口域から底生動物281種、硬骨魚類58種（うち貴重種37種）の生息が確認されたことになる。281種がいかに多い数かを理解するために他の著名な干潟と比較してみよう。東京湾最大の小櫃川河口干潟（盤州干潟：面積約800ha）に生

息する底生動物が約70種、ラムサール条約に登録されている名古屋の藤前干潟（面積約250ha）が約130種である。それに対し和歌川河口干潟は約35haとこれら2つの干潟と比べてかなり小さいにも拘わらず281種も生息している。底生動物相の豊かさにかけては全国屈指といっても過言ではないだろう。

写真11　和歌浦干潟の主な底生動物の写真（古賀庸憲撮影）

ハクセンシオマネキ（雄）

オサガニ（雄）

ワカウラツボ

ウモレマメガニ

イボキサゴ

イボウミニナ

ハマグリ

ウミニナ

ヘナタリ

クラエノハマイトカケギリ

ヌノメホソクチキレ

タイラギ（生貝）（絶滅危険）

マゴコロガイ（二枚貝、アナジャコの胸部に付着）（絶滅寸前）

タイワンガザミ（成オスの脱皮殻）

クルマエビ類の１種の稚エビ

チゴガニ

マメコブシガニ

ケフイソガニ（交尾中、手前がメス、奥がオス）

ホウボウ

カレイ類の１種（稚魚）

ノコギリガザミ（死に殻）

コメツキガニ（交尾中、上がメス、下がオス）

ユビナガホンヤドカリ

第４節　地理的環境と考古資料

1. 旧石器時代（数万年前～約 12000 年前）

およそ１万８千年前、ウルム氷期の最盛期頃の気温は現在よりも年平均で約６度低く、海水面は現在より 140 ｍも低かったとみられる。そのため、和歌山市沖の紀淡海峡は完全に干上がった状態であり、中央には大阪湾から太平洋側に流れる河川があり、現在の日高川沖合いに当時の海岸線があったものと推定される。その後、１万８千年前から１万年前までは晩氷期で、気候が徐々に温暖化していく時期で、氷河の融解が著しく、海水面が毎年１ cm 以上も上昇し、１万年前には現在の海水面から約 30 ～ 40 ｍ低い位置に達し、現在の紀ノ川河口付近にまで海水が侵入したとみられる。

旧石器時代終末から縄文時代前半期頃の遺物として、和歌山市今福の標高３～５ｍの砂丘上で採集されたサヌカイト製尖頭器がある。現存長6.7cm で中央部で欠損している。押圧剥離が顕著でなく、厚みがあるため先端部ではなく基部と判断される。砂丘の形成時期は縄文時代前期の縄文海進以降との考えもあるが、古い時期の砂丘が存在した可能性があり注目される。

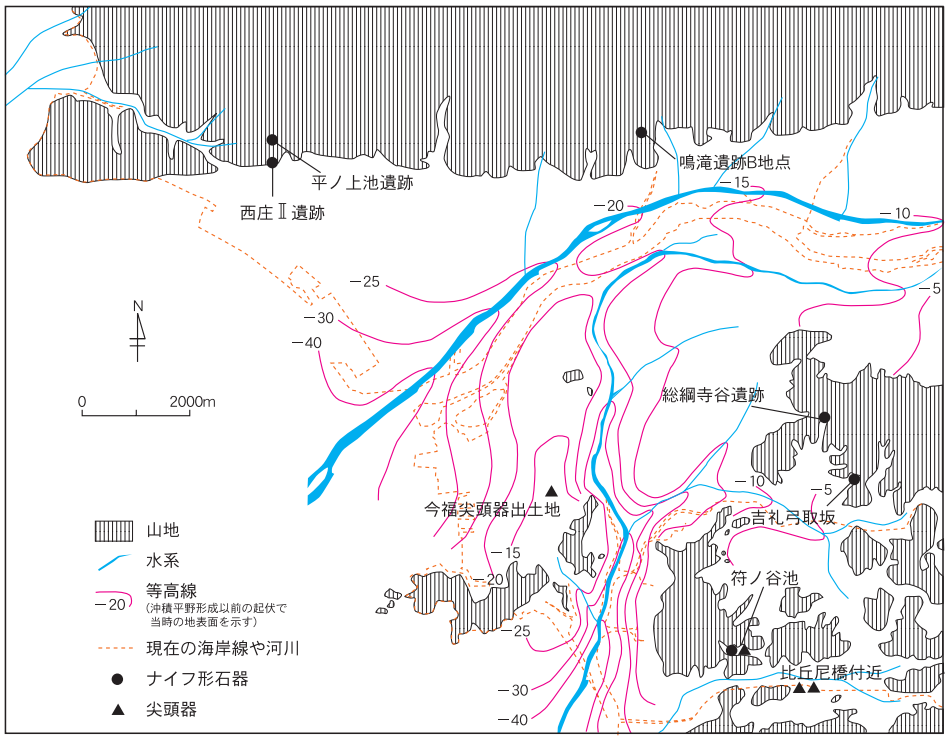


図４　旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡
（地形図は日下 1980 より作成。遺跡は中原 2010 等を参考にして作成）

2. 縄文時代（約 12000 年前～約 2400 年前）

縄文時代草創期から前期にかけては温暖化が進行し、縄文時代前期がその最盛期とされ、海が最も内陸まで進出した時期と理解されている（縄文海進、およそ 6000 年前）。現在の紀ノ川河口から約 10 ｋｍ東方の高積山南西麓の標高約７ｍに前期土器を主体とし、ハイガイ・ヤ

マトシジミ・ハマグリ・マガキなどの内湾性貝殻を出土した禰宜貝塚が所在する。和歌浦周辺では磯ノ浦から南東方向に延びる砂州が発達し、雄湊付近を経て雑賀の山々付近にまで及んでいた。縄文時代中期から晩期頃には現在の海水準とほぼ同じレベルにまで低下する。

秋葉山西麓の秋葉山貝塚は猨口石岩陰遺跡とも呼ばれる岩陰遺跡で、晩期縄文土器のほかハイガイ・オキシジミなどの貝類が出土する。これらの貝は河口や干潟の砂泥質に生息するもので、遺跡周辺の環境を示している。波の浸食作用により抉り取られた岩陰を、陸化後に生活の場としたのであろう。

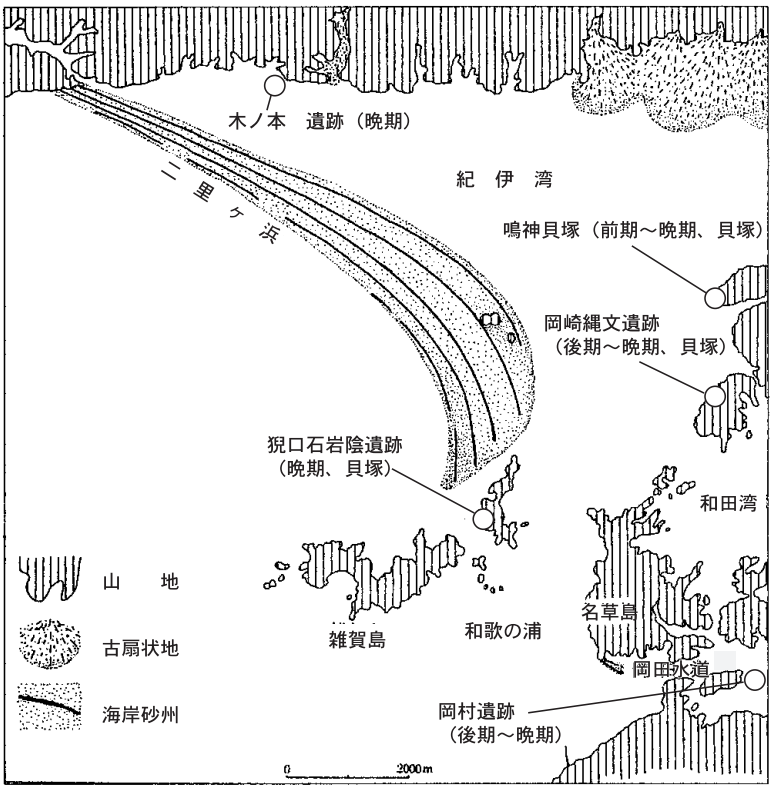


図５　縄文時代前期頃の地形と主な遺跡
（地形図は日下 1991を使用）

3. 弥生時代（約2400年前～約1750年前）

このころの海水準は現在と同じかやや低く、紀ノ川の堆積作用が進行した結果、花山西方の鳴神・秋月・太田付近一帯には低地が広がっていた。東方から西流してきた紀ノ川は海岸線に形成された大規模な砂丘に沿うように南へ屈曲し、名草山西麓に注いでいたとみられる。名草山西方の河口部から５kmほどさかのぼった、紀ノ川東側に和歌

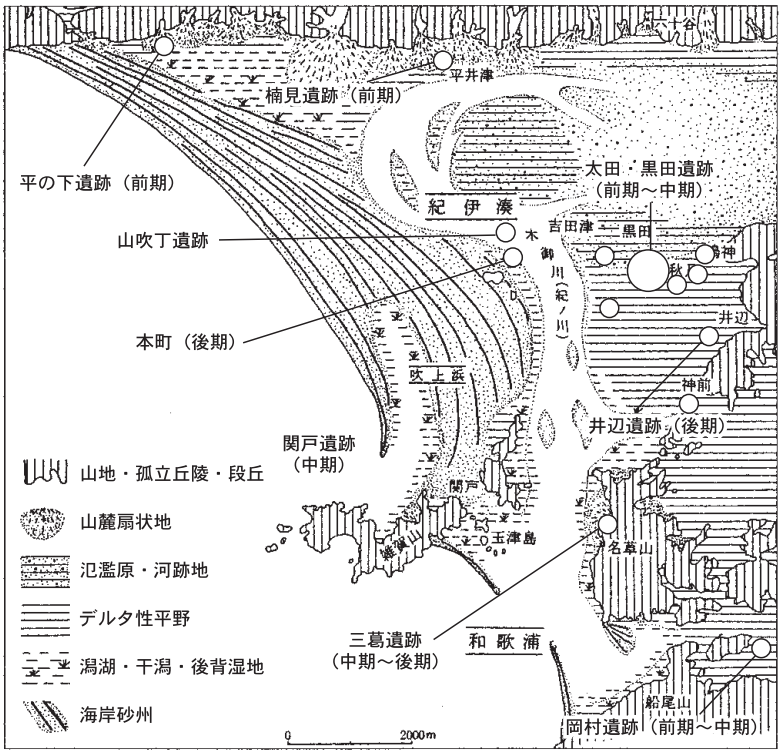


図６　弥生時代の主な遺跡
（地形図は日下 1991の古墳時代頃の地形図を使用）

山県を代表する大規模集落遺跡である太田・黒田遺跡が位置する。太田・黒田遺跡や亀ノ川沿いの海南市岡村遺跡など紀ノ川南岸～有田川北岸域は結晶片岩が基盤層となるため、当該域で製作された土器には片岩粒が含まれ、他地域から出土する場合に抽出が可能である。特に弥生時代中期前半の甕にはこの片岩が顕著で縄文土器の流れを組む技法で製作された特徴的な甕（紀伊型甕と呼ばれる）が製作され他地域に搬出された。また、片岩製石包丁の素材・未製品・製品も多く県外の遺跡に搬出されている。紀伊型甕や片岩製石包丁の出土する範囲は大阪府、兵庫県、徳島県、奈良県に及び、太田・黒田遺跡や岡村遺跡へは瀬戸内系の弥生土器や大阪の河内地方の土器が搬入されている。当時、この河口域を媒介して土器をはじめとする多くの生活物資が行き来した状況がうかがわれる。

当該地域では磯ノ浦から南東方向に延びた砂堆の南端に関戸遺跡が存在し、出土したタタキ石が弥生時代の石器である可能性がある。遺跡は外海に面しているが、雑賀山にも近く安定した立地の場所に海浜集落が作られたのであろう。近年、名草山西麓の低丘陵上で確認された三葛遺跡は水田耕作を生活基盤としない集団により形成された可能性があり、紀ノ川河口域の遺跡として注目される。砂堆中央部の東側、紀ノ川に面した内湾部付近で弥生時代後期の土器が散布する（山吹丁遺跡、本町遺跡）が、遺跡の形成は顕著ではない。

4. 古墳時代（4～6世紀）

弥生時代と同様に土入・梶取付近で南へ屈曲した紀ノ川は名草山西麓に流れていた。磯ノ浦から南東方向に延びる砂堆の海側に2列目の砂堆が形成され、砂堆はますます発達し、この頃には雑賀山・秋葉山と連結したとみられている。紀ノ川の堆積作用で平野部は拡大し、現在の和歌山平野に近い状況になっていた。

和歌山平野東方の岩橋丘陵上に築かれた岩橋千塚古墳群には700基にも及ぶ古墳が確認され、全国的に見ても有数の群集墳となっており、当時、紀ノ川河口一帯を支配した紀氏集団の墓域とみられている。5世紀代は大和盆地南西部を拠点とした葛城氏が大和政権中枢部で権力を得た関係で紀ノ川ルートの重要性が増し、重要な遺

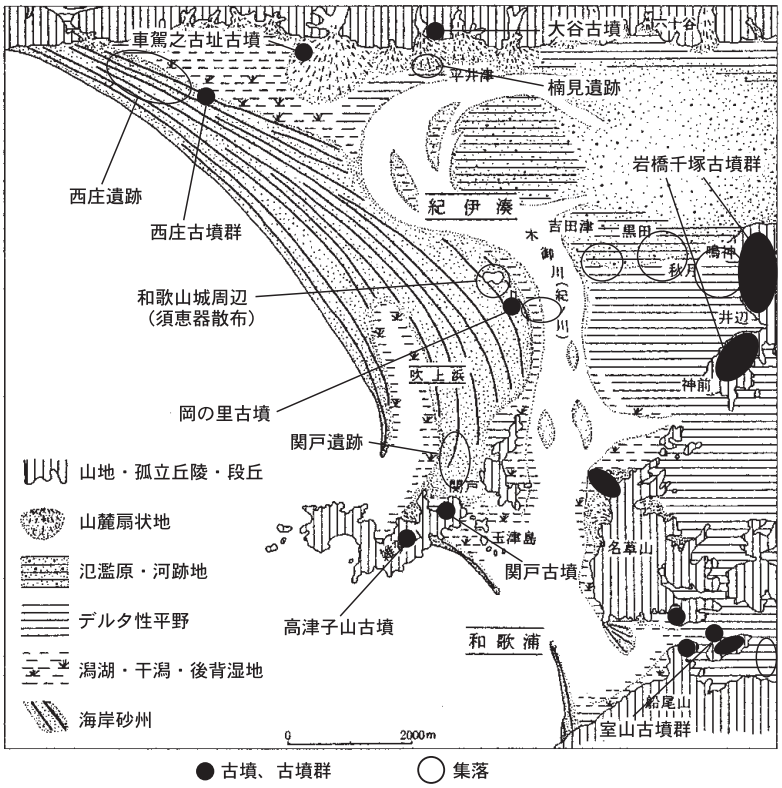


図7　古墳時代の主な遺跡（地形図は日下 1991 を使用）

跡が紀ノ川沿いから奈良県御所市まで点々とみられる。河口部の木ノ本には盾形周濠をもつ県内最大規模の車駕之古址古墳（前方後円墳、周濠・外堤を含めた全長は約120m）が築かれ、日本で唯一の金製勾玉が出土し、その類例は朝鮮半島の伽耶・新羅の王族級の有力古墳に求められる。5世紀末築造の大谷古墳（前方後円墳、全長約70m）からも国内でほとんど類例のない馬冑と馬甲が出土し、埋葬された石棺は九州阿蘇山の石材による家形石棺を採用している。また大谷古墳に近接する楠見遺跡からは朝鮮半島製品に類似する初期須恵器が多量に出土し、渡来工人の存在が想定される。この紀ノ川河口は当時、大阪の河内潟とともに、大和政権にとって九州や大陸への門戸となっていた時代であり、渡来系文物ばかりでなく新しい技術を携えた渡来人もまた多く往来し、和歌山の歴史･文化にも多大な影響を及ぼした。

対象地域の古墳分布は希薄である。雑賀山では高津子山古墳（5世紀、主体部不明）、関戸古墳（6世紀、横穴式石室）、関戸箱式石棺などが点々と築かれ、北方では岡山丘陵の岡の里古墳（7世紀初頭、竪穴式石室）などが存在するにすぎない。集落遺跡の関戸遺跡からは5～6世紀の須恵器や土錘などの出土が知られ、この時代から集落としての存在が明確になる。高津子山古墳は雑賀山の海に突出した眺望の開けた頂上部に立地する。横ハケ調整された埴輪（5世紀代）は、車駕之古址古墳と類似し、その立地が注目される。関戸古墳は岩橋千塚古墳群に類似する横穴式石室を主体部としており、6世紀代の付近の集団が岩橋千塚古墳群を築いた集団と密接な関係にあったことを示唆する。

『日本書紀』によると安閑2年（535）に経湍屯倉（和歌山市布施屋と推定）･河辺屯倉（和歌山市川辺と推定）が設置され、欽明17年（556）に海部屯倉が設置される。大阪から雄ノ山峠を越えるルートと南海道との交差する交通の要所に位置する経湍・河辺への屯倉の設置は、紀ノ川下流平野一帯を支配していた紀氏集団への大和政権による東方のクサビとして、また、海部屯倉設置は紀氏を支えていた海部集団を紀氏集団から分離するねらいがあったことが指摘される。海部屯倉の位置は確定されていないが、和歌浦を含む後の海部郡の範囲に設置されたとみなされる。

5. 奈良～平安時代（8世紀～12世紀）

この頃までに陸化はかなり進み、海岸部の砂州がさらに発達している。紀ノ川本流は土入･梶取付近で大きく湾曲し、城北･広瀬を経て南流し、名草山西麓に注いでいた。このルートは律令時代において名草・海部両郡の境界となっていたとみなされる。海部郡は現在の加太から吹上、和歌浦、さらには海南市下津町まで海岸線に沿って点々と分布する特殊な郡域をもっていたことが指摘される。海部郡内の可太郷は、そのうちの加太から黒江付近までを占め（一部、途中に木本郷が存在）、「和歌浦」も郷内に含まれる。雑賀山など和歌浦北部の規模のより大きい山塊は北から延びてきた砂堆によってすでに連結されており、対岸の名草山や北東部の井辺の福飯ヶ峰などは、紀ノ川をはじめ和田川・亀ノ川などの堆積によって陸つづきとなっていた。付近一帯には潮の干潮によって見え隠れする陰顕泥地（タイダル・フラット）が広くひろがり、玉津島は満潮時には完全に陸地から分離される小島をなしていた。

南海道が設置され、和泉山脈の南麓を加太まで続き、そこから海路で淡路、さらに四国へとルートが整備された。

天神山北麓に位置する関戸遺跡からは、奈良～平安時代の須恵器・土師器などの土器類のほかに各時代の漁網錘も多く出土しており漁村遺跡であることは間違いないが、和同開珎・神功開宝の出土も知られ、海上交通・物資流通に関係する港としての機能を有していたことも想定される。また、8世紀中頃とみられる唐草文軒平瓦（紀伊国分寺瓦に類似）は、和歌浦行幸との関係を指摘する見解もあり、その当否は別にしても遺跡としての重要性を示している。

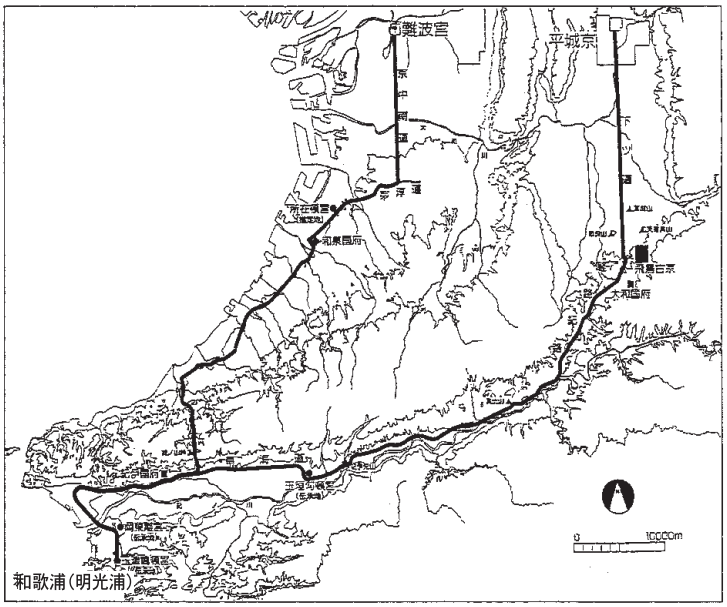


図８　聖武天皇の行幸経路（和歌山市立博物館提供）

磯ノ浦から延びる砂堆の北端に位置する古墳時代の製塩遺跡として著名な西庄遺跡からは、奈良・平安時代の多量の製塩土器、７世紀代の掘立柱建物群、海獣葡萄鏡などの出土があり、律令期にも重要な役割を果たした遺跡と評価できる。

10世紀前半に成立した『延喜式』には、大嘗祭の由加物条には神に供える由加物の内容とそれを差し出す国として紀伊・淡路・阿波の三ヶ国があげられ、紀伊国から差し出される由加物である海産物は「賀多潜女（かつぎめ）」が採り備えるとされる。賀多が可太郷の範囲だとすると和歌浦はたんなる景勝地だけではなく、大嘗祭の由加物を採取する神聖な空間であり、神亀元年（724）の聖武天皇、天平神護元年（765）の孝謙天皇による大嘗祭直前の和歌浦行幸は遊覧的性格とともに大嘗祭に関係する神聖な土地を訪れて神事を執り行うことに意味があった可能性も指摘される。

奈良時代の紀伊国の沿岸部からは米や海産物、なかでも塩が多く貢納されており、加太ノ瀬戸を通って大阪湾岸にはいり淀川を遡上する場合と紀ノ川を遡上する場合があり、いずれにしても物資の集積、船の集結などの点で紀ノ川旧河口付近が重要な位置を占めていた。当時の紀ノ川は、現在の土入川から和歌川の流路をとり、和歌浦へと注いでいた。和歌浦湾の入江は現在よ

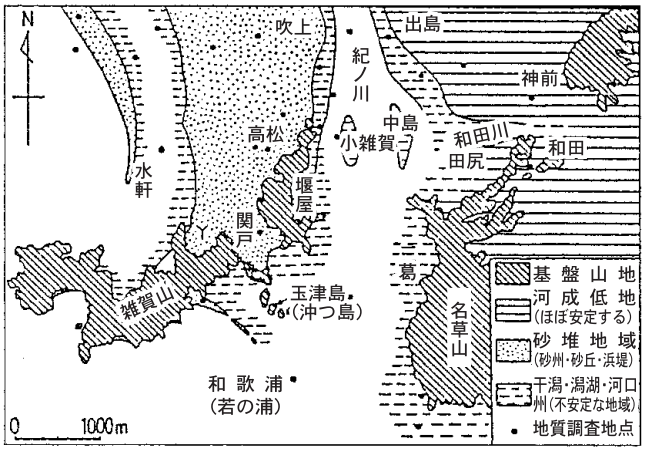


図９　万葉集の頃の紀ノ川と和歌の浦の地形（日下1976）

り山裾まで奥深く湾入し玉津島は小島で、小雑賀や中島付近には河口州があった。和歌浦北部は吹上・高松から続く砂堆（砂州・砂丘）と繋がっていたが、河口付近は干潟や低湿地が広がっていた（図9・10）。

天仁2年（1109）の『中右記』の吹上浜から馬で日前宮に向かうことができた記事などからみて、平安時代の11世紀末頃に起こった紀ノ川の洪水により紀ノ川本流は砂堆を一気に破壊して、北島付近から砂山・水軒を経て大浦に至り、そこから海に注ぐ新しい流れになっていたと考えられる（図11）。

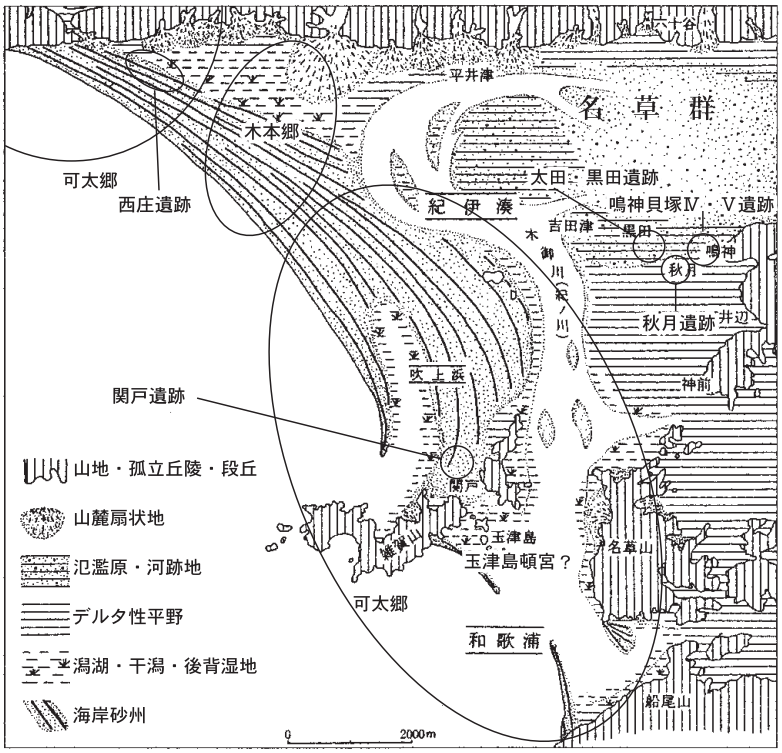


図10　奈良・平安時代の地形と主な遺跡
（地形図は日下 1991 を使用。
郷の配置は栄原永遠男 1993 論文より概念図として作成）

6. 鎌倉～室町時代（13世紀～16世紀）

戦国時代の明応7年（1498）の地震・津波によって、海岸の砂堆が切れて、紀ノ川本流が西流してそのまま海に注ぐというほぼ現在の流路の位置になったと推定される。明応年間（1492～1501）に和歌山市湊の和田浦にあった多くの寺社が吹上へ移転しており、それは建物の倒壊や境内が流路に変わるなどの被害を受けたためと考えられるからである。明応以前は雑賀崎の大浦付近が紀ノ川河口で、明応以

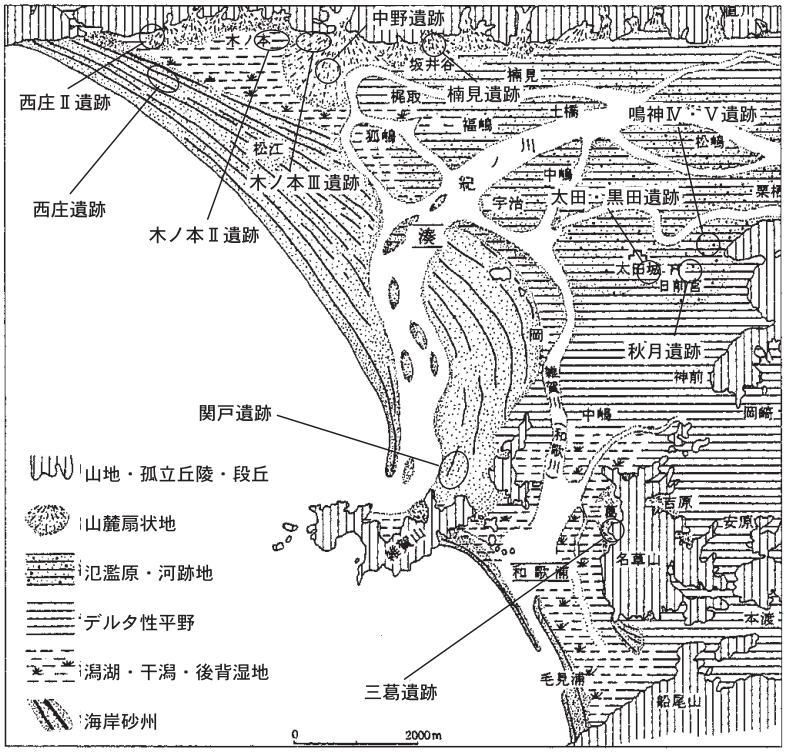


図11　室町時代頃の地形と中世の主な遺跡
（地形図は日下 1991 を使用）

降は前記のように西流して海へ注ぐが、紀ノ川下流域は紀ノ川が分流し、和歌山平野を網状に流れていたとみられる。

関戸遺跡からは鎌倉時代の瓦器が多量に出土し、厚さ35cmの貝層も確認されている。貝層はハマグリが80%を占め、アカ貝・カキ・ヤマトシジミなどが伴う。弥生時代以降、継続して営まれていた本遺跡の室町時代以降の遺物が稀薄になるのは、紀ノ川本流の流路変化や砂堆の発達など遺跡を取り巻く環境が大きく変化したためであろう。また、名草山西麓の三葛遺跡からは、鎌倉～室町時代の瓦器・土師器・東播系こね鉢・備前焼擂鉢などの遺物が多く採集されており、この地域の人々が海上交通や物資流通にたずさわった可能性が認められる。

7. 江戸時代（17世紀～19世紀）

紀ノ川の河口に近い和歌山平野中央部に城下町が建設され、紀ノ川両岸に堤防が設置され、紀ノ川の河道は固定された。和歌川は水量が減少したものの、流れは安定したものとみられる。

和歌川河口に浮かぶ妹背山内に海禅院多宝塔が建立されている。家康公33回忌を契機としておこなわれたお万の方（家康の側室養珠院）による経石の勧進により多量の経石が集まり、慶安2年（1649）にそれらを地下室に納め、上に題目碑を建て、覆屋の小堂が建立されたという。調査により長さ1～25cmの扁平な石材に「南無妙法蓮華経」の題目を石に書き写したものが多量に確認され、後水尾上皇まで参加したといわれる経石勧進が実際に行われ、15万点にも及ぶとされる経石が埋納された様子が判明しつつある。

西浜の海岸沿いに防潮・防波のために築かれた水軒堤防は、近年の発掘調査により遺存状態が良いことが確認され、その実態が明らかになりつつある。堤防は海側の石堤と石堤東側の陸側に築かれた土堤からなる。石堤は基底部で幅約12m、上端部で幅3.5～4m、高さ約4mで、海側は一辺30～40cmの和泉砂岩を約40度の角度で積み上げ、陸側は砂岩と片岩で構築される。和泉砂岩の切り込みハギ、布積みなどの技法は和歌山城石垣構築技術に通じるものであり、築造にあたっての紀州藩の関与が推定される。土堤は幅13m以上で高さが5mにも及ぶ。土堤の内部堆積土には18世紀中頃までの遺物が含まれることから、土堤の築造は18世紀中頃以降であり、石堤も同時期の可能性が高いとみられる。全長が1kmにも及ぶ水軒堤防は、江戸時代中期の土木遺産であり、全国的にみても類例が少なく、その歴史的価値は高い。

写真12　水軒堤防全景

写真13　水軒堤防南端部（平成19年度調査）

参考文献　引用文献

第３章　自然・地理環境

第１節　地質

岡田篤正ほか　1998　和歌山平野北東部における中央構造線の地下構造，活断層研究，17，P.84 － 96

日下雅義　1980　歴史時代の地形環境，古今書院，392P.

国土地理院　2000　１/25,000土地条件図　和歌山

廣田善夫　1991　紀伊半島西部の三波川変成帯の地質，島根大理紀要，No.25，P.131 － 142

宮田隆夫ほか　1993　和歌山及び尾崎地域の地質，地域地質研究報告（５万分の１地質図），地質調査所，P.68

吉松敏隆ほか　1999　紀伊半島の地質と温泉，URBAN KUBOTA，No.38，P.56

和歌山県（2001）：保全上重要なわかやまの自然　－和歌山県レッドデータブック－

第２節　植生

土井浩．2003．雑賀崎（トンガの鼻）の樹木　タブノキの自生地　紀州生物　32号　26．

服部保．1985．日本本土のシイータブ型照葉樹林の群落生態学的研究．神戸群落生態研究会研究報告　１：１－98．

――― 1987．照葉樹林構成種の分布と環境．群落研究　４：９－14．

――― 1992．タブノキ型林の群落生態学的研究Ⅰ．タブノキ林の地理的分布と環境．日本生態学会誌　42：215－230．

――― 1993．タブノキ型林の群落生態学的研究Ⅱ．タブノキ型林の地理的分布と立地条件．日本生態学会誌　43：99－109．

――― 2002．照葉樹林の植物地理から森林保全を考える．種生物学会編　保全と復元の生物学　203－222．文一総合出版．東京．

中村正寿．1978．和歌浦・雑賀崎の植物　和歌山市教育委員会　和歌山市文化財総合調査報告（１）　27－49．Plate2．

――― 1991．和歌山市域の植物　和歌山市史編纂委員会　和歌山市史　第１巻　105－135．

和歌山県．2001．保全上重要なわかやまの自然　－和歌山県レッドデータブックー　428pp．

第３節　和歌川河口部干潟生物

堀　成夫　2002　和歌川河口干潟のトウガタガイ類．うみうし通信，（36）：　10－11．

木邑聡美・野元彰人・杉野伸義・和田恵次　2003　和歌浦干潟で確認された希少貝類．南紀生物，45（１）：７－12．

木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義　2004a　和歌山県北中部の河口・干潟域における大型底生動物相（Ⅰ）．南紀生物，46（１）：31－36．

木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義　2004b　和歌山県北中部の河口・干潟域における大型底生動物相（Ⅱ）．南紀生物，46（２）：137－141．

小林由佳・和田恵次・杉野伸義　2003　汽水棲巻貝ワカウラツボ（腹足綱：ワカウラツボ科）の分布に関係する要因．日本ベントス学会誌，58：３－10．

古賀庸憲・溝口和子・粟田剛史・池田幸右・池田三智子・上水流裕司・北山貴己・小山貴子・里中美哉・出口弘美・根ヶ山亮・和田恵次　2003　和歌川河口干潟で採集されたウモレマメガニ Pseudopinnixa carinata（Ortmann，1894）（カクレガニ科）．南紀生物，　46（２）：145－146．

古賀庸憲　2007　和歌山県沿岸域．In：飯島明子（編），第７回　自然環境保全基礎調査　浅海域生態

系調査（干潟調査）業務報告書．74－81．環境省自然環境局　生物多様性センター．
わかやま海域環境研究機構　2000　紀の川河口をフィールドにした生態系等の調査・研究（干潟調査）報告書．

第４節　地理的環境と考古資料

日下雅義　1976 「和歌浦」『地理』21―８
日下雅義　1980 『歴史時代の地形環境』
日下雅義　1991 「紀ノ川の河口と海岸地形の変化」『和歌山市史』第１巻
栄原永遠男　1993 「和歌の浦と古代紀伊－木簡を手がかりとして－」『和歌の浦　歴史と文学』
菅原正明　2002 『久遠の祈り　紀伊国神々の考古学②』
薗田香融　1975 「古代海上交通と紀伊の水軍」『古代の日本』５　近畿
中原正光　2010 「都道府県別旧石器時代遺跡・縄文時代草創期遺跡の一覧表と文献　和歌山県」『日本列島の旧石器時代遺跡－日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベース－』
額田雅裕　1996 「中世頃の地形環境復原図」『和歌山市立博物館研究紀要』10
前田敬彦　2006 「和歌山市三葛採集の考古資料について－名草山西麓の新発見複合遺跡の紹介－」『和歌山市立博物館研究紀要』20
松下　彰　1986 「堀止採集のポイント」『紀伊風土記の丘年報』第13号
松下　彰　1987 「高津子山古墳の埴輪」『紀伊風土記の丘年報』第14号
宮田啓二　1955 「関戸遺跡」『あさも』第４巻第３号
宮田啓二　1964 「和歌山市関戸出土の蔵骨器」『熊野路考古』４
宮田啓二　1968 「和歌山市関戸遺跡」『古代学研究』50
矢田俊文　1991 「明応七年紀州における地震津波と和田浦」『和歌山地方史研究』21
和歌山県教育委員会・（財）和歌山県文化財センター 2007「平成19年度　県指定史跡水軒堤防発掘調査現地説明会資料」
（財）和歌山県文化財センター 2008「県指定史跡水軒堤防　現地説明会資料」

第４章　名勝・史跡和歌の浦

第１節　古代

奈良時代には、紀ノ川は現在の和歌川の流路を流れ和歌の浦を河口部として、和歌浦湾に注いでいた。入江は、現在より山裾まで奥深く湾入し、小雑賀や中島付近まで河口州であった。雑賀山の東方に連なる玉津島は、船頭山・妙見山辺りまでは成長期の砂浜が陸地となるが、雲蓋山・奠供山・鏡山・妹背山の４つの小島は満潮時には完全に陸から分離して海中に点在した。その周囲は潮の干満によって、干潟や低湿地が広がっていた。また和歌浦北部は吹上・高松から続く砂堆（砂州・砂丘）と繋がっており、片男波の砂州は形成されつつあった（日下2001）。

紀ノ川河口部に位置する和歌の浦は景勝地として著名であるが、奈良時代以前、紀伊国では政治的、経済的にどのような位置を占めるのか。栄原永遠男氏によると、古墳時代後期の紀ノ川河口部の和歌の浦は、「大嘗祭の由加物を採集する聖なる場所」であり、沿岸地域が、「物資や船の集積」など、「中央への物資貢献の基地」として紀伊国の経済上の最重要拠点であった。この地は、「紀ノ川下流平野の開発と支配を通じて、巨大な経済力を持ち、紀ノ川水上交通の掌握を通じて巨大な水軍力をもって瀬戸内海の海上交通を支配した」紀氏集団により支配されていた。大和朝廷は、この地を支配下に治めるために、経湍屯倉、河辺屯倉、海部屯倉を設置し、河川・海上交通の要を押えて巨大な力を誇る在地の紀氏集団を分裂に追い込み、支配下に治めた。和歌の浦は、景勝地であると共に「紀伊国の宗教上・経済上・交通上、したがって政治上の最重要地点」（栄原1993）として存在した。

1. 聖武天皇と山部赤人

神亀元年（724）10月８日、聖武天皇は、紀伊国に行幸する。玉津島に到着し、その後14日間滞在する。12日には「岡の東」に「離宮」を造営し、そして16日に天皇は次のような詔を出す。

> 山に登り海を望むに、この間最も好し。遠行を労せずして、以て遊覧するに足れり。故に「弱浜（わかはま）」の名を改めて「明光浦（あかのうら）」とし、宜しく守戸を置きて荒穢（こうわい）せしむことなかれ。春秋二時に官人を差遣し、玉津島の神・明光浦の霊を奠祀せしめよ。（『続日本記』）

同行した宮廷歌人山部赤人は、長歌一首反歌二首からなる玉津島賛歌を詠む。

> 神亀元年甲子冬十月五日、紀伊国に幸す時に山部宿彌赤人の作る歌一首併せて短歌
> やすみしし　わご大君の　常宮と　仕へ奉れる　雑賀野ゆ　そがひに見ゆる　沖つ島　清き渚に　風吹けば　白波騒ぎ　潮干れば　玉藻刈りつつ　神代より　然そ貴き　玉津島山（万葉集　巻６・917）

図１　山部赤人の玉津島賛歌（『元暦校本万葉集』勉誠社版より　東京国立博物館蔵）

反歌二首

沖つ島　荒磯の玉藻　潮干満ち　い隠り行かば　思ほえむかも（万葉集　巻６・918）

若の浦に　潮満ち来れば　潟をなみ　芦辺をさして　鶴鳴き渡る（万葉集巻６・919番）

この玉津島賛歌は、「若浦」の初見史料であり、歌枕和歌の浦の本歌の地位を占める。

長歌では、天皇家の平安と永遠を、行幸地和歌の浦・玉津島の尊さを讃え、反歌では、叙景を中心に据えて、第一首は潮干の、第二首では満ち潮の和歌の浦を歌う。

海上に点々と伸びる玉津島山の連なり、この玉なす島々の連なりは、ある種の霊的存在であり、そこに神が宿ると、古代の人々は神の存在をみていた。聖武天皇や赤人もこの玉津島山の景観を前にして、「玉津島の神･明光浦の霊」をみて、「神代より　然そ貴き　玉津島山」と詠み、玉津島の神代以来の貴さに満たされた（村瀬1993）。

和歌の浦へは数多くの天皇の行幸があった。天皇の畿外への行幸は、『続日本紀』に記録された95年間で、わずか４名で、延べ回数は６回にすぎない。うち紀伊国へは３回、和歌浦は２回も訪れている。また記録はないが大宝元年（701）の持統太上天皇と文武天皇も和歌の浦を訪れた可能性が高く、『日本後記』によると、延暦23年（805）に桓武天皇が和歌の浦を訪れる（寺西1993）。政治の重要な局面を担うものとして即位した天皇（持統・聖武・称徳）、また政治の重要な局面に際会した天皇（文武）が、その時点で紀伊へ行幸を行うのである。時代の重要な局面に天皇という重い政務についたことを神に報告し、また皇統安泰を、紀伊の

神に祈るための行幸と考えられている。天皇即位後に祭祀を行う聖地として、河口部に広がる小島が点在する景観は、淀川（天満川）河口部の八十島と呼ばれる多くの小島が点在したかつての難波と同様である。神を祭る場所としては、和歌の浦も難波同様の条件を備えていた。天皇即位後に祭祀を行う聖地として、難波と玉津島とが共通することを意識、そうした聖地が畿内では難波、畿外では紀伊であることが多くの官人に知られていた（直木1991）。なお、聖武天皇の紀伊国行幸の目的については、如上の直木説の他にも諸説がある。例えば、先述の詔にもある「遊覧」もその目的のひとつであった。万葉時代も後期に入ると、旅に遊覧的性格が付与されてくるのである。ただしこの「遊覧」は、天子の行う「望祀の礼」と深く関わっており、単に風光を愛でるという意味での「遊覧」ではない。また天皇家が祀る伊勢神宮と、平城京を中において対称の位置関係にある、和歌の浦（玉津島）が行幸の地として選ばれたという見方もある。いずれにしても、この行幸が神祭りと深く関わって行われたであろうことは、詔の内容から判断しても間違いのないところである。

聖武天皇の皇女、称徳天皇が和歌の浦を訪れたのは父の行幸から41年後、天平神護元年（765）10月である。南浜に望海楼を設けて雅楽及び雑伎を楽しみ、臨時に市場を設けた。

その40年後、桓武天皇は延暦23年（805）10月11日に玉津島に行幸した。三日間滞在し、船を浮かべて遊覧し、和歌浦を観賞している。「今、御座所を御覧に磯嶋も奇麗しく、なぎさもさわやかにして、御意もおだひにまします。」とし、山部赤人の詩に詠われた玉津島山の風景が継承されていたことが窺える。

2. 万葉景観と和歌の浦

山部赤人が詠んだ和歌の浦の景観美とは何か。弱浜、成長する片男波の砂嘴が出島の先端に延びる。外には片男波に打ち寄せる大海原からの波、干潟は、潮の満ち引きにより生物の循環を示すかのように姿を変える（写真１）。６つの島々が玉をなして連なり、東方には、穏やかで柔らかな姿の名草山が、静かな水面にその山容の影を落とす。ずっと南の方には高野山から西に延びた藤代の峰、熊野への入り口である長峰山脈が連なる（写真１Ａ）。それは沖の島、地ノ島に続く。

万葉びとが繰り返し眺めにやってきた和歌浦の景観とは、奠供山、妹背山から南に見る「空と海と島山とが一体」をなし、「満々とした力を秘めて静かに満ち来る潮とそして深く引きゆく潮の、変化に富んだ風景、」「静かな入江に浮かぶ玉津島山であり」、「微妙に変化する水辺の風景の静寂感と力動感」（村瀬1993）であった。それは、「干潟、砂嘴・水平線・山並みが幾重にも重なった景観」（寺西1993）である。

この和歌の浦（玉津島）は、先に掲げた山部赤人の長歌反歌を含めて、万葉集に14首残されている。その大部分は、聖武天皇の紀伊国行幸の折の詠と見なしてよい。いずれも和歌の浦の広々として躍動的な景観がよくとらえられている。

潮満たばいかにせむとか海神の神が手渡る海人娘子ども（万葉集　巻７・1216）

写真１　和歌の浦干潟（上Ａ，下Ｂ）

名草山言にしありけり我が恋ふる千重の一重も慰めなくに（万葉集　巻７・1213）
玉津島見てし良けくも我はなし都に行きて恋ひまく思へば（万葉集　巻７・1217）
玉津島よく見ていませあをによし奈良なる人の待ち問はばいかに（万葉集　巻７･1215）
和歌の浦に白波立ちて沖つ風寒き夕へは大和し思ほゆ（万葉集　巻７・1219）
我が舟の梶はな引きそ大和より恋ひ来し心いまだ飽かなくに（万葉集　巻７・1221）
玉津島見れども飽かずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため（万葉集　巻７・1222）
紀伊国の雑賀の浦に出で見れば海人の燈火波の間ゆ見ゆ（万葉集　巻７・1194）

後半の4首は、行幸に従った貴顕の一人である藤原卿（おそらく藤原麻呂）の作であり、和歌の浦を訪れた万葉びとの感動が伝わってくる（村瀬2002）。

3. 歌枕として継承される和歌の浦

神亀元年の紀伊国行幸を契機として、赤人の「若浦歌」や藤原卿の「玉津島歌」により、和歌の浦・玉津島は、わが国有数の歌枕・歌道の聖地となり、平安朝の以後の王朝和歌に受け継がれ、宮廷人たちの憧れの地となり、多くの文人墨客がこの地を訪れることとなる。また和歌の浦は平安時代以降に名所絵として絵画化され、屏風や障子に四季の風物や人々の風俗と共に描かれた。

とりわけ、山部赤人の「若の浦に潮満ち来れば……」の歌が、『古今集仮名序』（紀貫之）に取り上げられたことは、和歌の浦の歌枕化、名所化への道を決定づけることとなった。もちろん「若の浦」の「若」が「和歌」の連想と結びついたことは言うまでもない（村瀬1993）。

こうして平安朝以降の和歌には、おびただしい数の和歌の浦歌が登場することとなる。

老いの波寄せじと人はいとへども待つらんものを和歌の浦には（後拾遺和歌集）
家の風吹き伝ふとも和歌の浦にかひある言の葉にてこそ知れ（山家集）
和歌の浦のみぎはの鶴しはぐくまば葦のしたねぞよながかるべき（相模集）

等々、枚挙にいとまがない。

4. 平安朝の和歌の浦―紀行文、日記、随筆、物語等―

日本有数の歌枕・名所としての位置を占めるにいたった和歌の浦は、平安朝以降、多くの歌人、文人墨客を呼び寄せることとなった。そして訪れた人々の中には、紀行文を記し、後世にその足跡を伝えた。記録としては、桓武天皇行幸以来、和歌の浦に関する文献上の記録は途絶えるが、11世紀になると、貴族の旅行記や日記に和歌の浦が現れるようになる。なお、平安時代になると、奈良時代とは異なって、和歌の浦と共に吹上浜も注目されるようになる（薗田・藤本1991、小山1993）。吹上浜は、寛平年間（888～897）、菊合せの州浜に吹上浜が登場するのが初見である。菅原道真（845～903）がそれに付ける和歌「秋風に吹上に立てる白菊は　花かあらぬか波の寄するか」を詠む。道真自身は、吹上浜を訪れてはいないが、文人たちにはその美しさが伝わっていたと考えられる。

和歌の浦を訪れた歌人、文人たちの残した紀行文には、以下のものがある。

藤原公任（きんとう）（966～1041）は、平安時代中期の代表的な歌人で、紫式部や清少納言といった当時一流の才女からも格別に尊敬された。寛弘6年（1009）から長和3年（1014）の間、粉河寺へ詣でた際に和歌の浦を訪れた。和泉国から騎馬により紀ノ川付近で一泊したあと、吹上砂丘の南に延びるリッジ（尾根線）に成長した松原を通り、和歌村の北の沢を抜け、玉津島社につく。帰りは吹上浜を訪れて帰途に着くという道順である。

やうやう御社に至る程、入り江のほとりに海人の家かすかにて、船どもづなぎ網ども干しなどしたるも、都に変はりてをかし。御社に詣で着きて御弊奉り、所々めぐりて見れば言ひやらん方なし。おもしろくをかしきを思ふに、人に見せぬを誰も思ふべし。そこの有様、言はばなかなかをとりぬべし。かかる所にてなかなかものも言はれぬものになんありける。帰さに後ろの岩屋を見れば仏のいと哀げにておはするを、

海人ののりわたしけむしるしにや岩屋に跡をとどめ置きけん

和歌の浦より帰るにおもしろささらなり。老いたる海人を見て、少将、

年を経て和歌の浦なる海人なれど老の波には猶ぞ濡れける

吹上の浜に至りぬ。風の砂を吹き上ぐれば霞のたなびくやうなり。げに名に違はぬ所なりけり。

（『前大納言公任集』）

この記録からは、美しい和歌の浦の光景があり、吹上浜の白砂も霞のように舞い上がり名に違わぬ所として意識されている。また万葉の頃とは違う和歌の浦の地形変化が判明する。紀ノ川の流路は奈良時代と変わらないが、玉津島社が鎮座する奠供山や鏡山周辺は陸化し、入江となり、万葉の頃には用いられなかった「入江」が、この頃から使われる。また松の生育も言われる。松は、和歌の浦の景観を彩る重要な景物となった。さらに帰途に寄った吹上浜の白砂青松の風景を絶賛したことは、万葉時代にはなかったことである。そして人々は、和歌の浦・吹上浜を合わせて訪れるようになり、それは中世を通じての慣行となる。

次に関白藤原頼通（990～1074）は、藤原氏全盛期の最高権力者である。永承3年（1048）10月、57歳の時、高野山に参詣し、帰途和歌の浦・吹上浜を遊覧した。

清砂崔嵬たり。天山に登るが如く、葱嶺に向かふに似たり。暫く雑賀松原を経、和歌浦に向はしめ給ふ。翠松蓋を傾け、白浪蹄を洗ふ。風流の地勢に飽くを見るごとに、いよいよ七宜の天然に稟くるを感ず。なお吹上の浜、和歌の浦の指点するに、山辺の説、柿本の調べと雖も、此の地と合はすれば則ち難し。然のみならず、轡を按へ鞍を扣へ、争ひて色々の貝を拾ふの輩、已に老若を別たず。各志の及ぶに任せ、興に乗るの余り、殆ど日の暮るるを忘る。

（『宇治関白高野山御参詣記』）

天山のような高い吹上の浜に登り、和歌の浦に行くが、海辺の波浪に浸食され、岩肌を露出させた玉津嶋周辺の岩山の絶景やその上にみどりの蓋をさしかける磯馴の松の姿も重しという。白砂の連なる吹上浜と岩山の和歌の浦との対照の妙を思うと、山部の説、柿本の歌も十分とはいえないという。

また藤原宗忠（1062～1141）は、天仁2年（1109）11月、48歳の時、熊野参詣の帰途、和歌の浦、吹上浜を遊覧した（『中右記』）。

和歌浦に着く。厳石色々、松樹処々、地形幽趣にして、風流勝絶せり。海上を渡るの

間、自然藤代山、和左々加山を過ぎ了んぬ。未刻馬･下人等来り合ひ、海浜を廻り渡る。…吹上浜に着く。地形の体たらく、白砂高く積み、遠く山岳を成すこと三、四十里許りなり。全く草木無く、白雲を踏むが如し。誠に以て希有なり。此の地の勝絶、筆端すること能はず。馬より下りて暫く遊覧す。

結晶片石の伽羅岩の岩山とそれを彩る松、岩山と松を主体とする風景が平安時代における和歌の浦の風景である。また吹上浜の白浜の壮観が、述べられる。

こうして和歌の浦あるいは吹上の浜が、紀行文の数々にも取り上げられ、また歌枕として歌われていく中で、清少納言は

浜は、有度浜。長浜。吹上げの浜。打出の浜。諸寄の浜。千里の浜、広う思ひやらる。（『枕草子』）

と、浜の名所として、吹上の浜をとりあげている。また別のところでは、浦の名所として和歌の浦をあげている（薗田・藤本1991）。

また、物語の舞台としても吹上の浜が登場する。『うつほ物語』（10世紀後半、『源氏物語』が書かれる50年程前の長編物語）では、神南備種松（かんなびのたねまつ）が吹上の浜に建てた豪邸において、物語が展開する（三木2008）。

第２節　中世

10世紀末に紀ノ川の主流路が現在の水軒川に変わり、旧河道となった和歌川は水量が減り、土砂の運搬･堆積量が急激に減少したため、海岸線の変化は少なくなった。旧河道となったことで片男波の砂洲の発達は微弱となり、長い年月をかけ細長い繊細な、北野殿の旅日記でいう「こまやかなる風情」の砂州となった。そのため、玉津島山周辺は深まった入江となり、干潟が形成された。玉津島山と呼ばれる島々は、妹背山だけを残し、他の島は陸地とつながった。細長い片男波砂州の出現により、静かな入江の海面と荒い外洋の白波の対照も和歌の浦の景観となる。

この地は中世には歌枕・歌道の聖地として、藤原為家、為氏ら多くの貴族、また頓阿、正徹、心敬、宗祇など歴々たる歌人が訪れ、数多くの歌を残した。当時の和歌の浦の景観を伝えるのは、慕帰絵詞のみであったが、近時『飛鳥井殿御下向之儀式』が発見された。

1. 歌枕としての和歌の浦

平安時代歌枕・歌道の聖地として確立した和歌の浦は、中世になってもその性格を引き継ぐ。藤原俊成とその子孫が歴代、歌道の宗家を継承する。これが、御子左家ないし二条家である。この家長が勅撰和歌集の撰者である。和歌集の編纂には歌道の宗家が撰者の命を受け、撰者は住吉と玉津島へ必ず御参りした。御子左家は、俊成、定家、為家、為氏と継承されるが、玉津島社への崇敬が高まったのは、為家の頃からである。為家（1197～1275）は、度々玉津島社に参詣し、弘長３年（1260）には、一門を率いて社頭で「玉津島社歌合」を興行した。「和歌の浦波」は、それ以降、歌道と同義語として用いられるようになった。為家の長男為氏（1222～86）は、和歌の浦ののどかな春を「人問はば　見ずとやいはむ　玉津島　かすむ入江の　春のあけぼの」と詠んだ。御子左家ないし二条派の和歌浦憧憬、玉津島崇敬は、新玉津島社の京都勧進となって完結し、玉津島社は篤く崇敬され、和歌の浦は歌道の聖地として歌人の憧れの場所になった。結果、鎌倉時代から室町時代にかけて、「和歌の浦」「玉津島」を読み込んだ作品が数限りなく生み出された。

2. 実景資料『慕帰絵』『飛鳥井殿御下向之儀式』の和歌の浦

慕帰絵は、第三世覚如上人（1270～1351）の生涯を描いた絵巻である。和歌の浦を描いた最も古い絵図である。当地への旅は、巻七第１段で簡潔に述べられる。絵図の中央に玉津嶋明神、右に玉津嶋に行く路の様子、左に広々とした和歌浦湾を画く。文明４年（1482）に失われた巻一、巻七の二巻を「和歌棟梁之仁」である飛鳥井雅康がことば書きをまた藤原久信が絵を補作したという。当時の本願寺門主は蓮如上人であり、歌道を介して飛鳥井雅康と交わったと想像される。延慶～政和年間（1308～17）、覚如は、花鳥風月を賞でる気持ちが強くなって、そばの人に誘われ、身内も供も連れないで、ただ一人、騎馬で紀州の旅に出た。めざす先は和歌の神様として名高い玉津島明神である。まず、携行した施物を捧げて、深く礼拝した。しかるのちに、社殿で10首の和歌を詠んだ。吹上浜から蟻の熊野詣で賑わう和歌の

浦へ出て、玉津島明神に参り、巨大な樹木に囲まれた中に、玉津嶋明神は祀られている。枝には宿願の人々の絵馬が懸けられ、南無玉津嶋明神、願わくば、われに歌才を与えたまわれと一心に祈った。この時詠んだ句が「忘れじな和歌の浦波立ち返り　心を寄せし玉津嶋姫」である。玉津嶋参詣ののち、人々は、美しい曲線を画く州浜に出る。玉藻が打ち上げられ、貝も見える。ここは海上眺望絶景の地であり、遠く四国が見える（小松編集1990）。当時「蟻の熊野詣」と称されるほどの多くの人々で賑わう和歌の浦と社殿のない巨大な根上松を御神木とする玉津嶋明神、背後には海が織りなす躍動感に満ちた和歌浦湾が描かれる。聖武天皇が景観保存を詔で出し、山部赤人が歌を詠んだ地が、中世後期、風光明媚な和歌の浦として、和歌三神、歌道の聖域として玉津嶋が尊崇されていたことを伝える絵図である。

空白期であった中世の和歌の浦に関して、その消息を知る資料が明らかになった。文明11年（1460）5月4日から9日までの蹴鞠・和歌名門として著名な飛鳥井雅康が雑賀の地を訪れた時の記録が『飛鳥井殿御下向之儀式』である（海津2003）。

文書からは、中世和歌の浦の風景とも言うべき和歌の浦の様子が読み取れる。「紀三井寺、毛見郷、船尾郷の舟と共に数十そうにて、」雅康一行が和歌浦の玉津島と天神にお参りし、舟で布引に渡り、毛見に行っている。干潟を介した毛見、三葛、和歌浦を舟が行き交い、網を曳いて捕れた魚を「御さんしきをかまうた遊屋」で料理の腕を競い合っている事が書かれている。中世後期に、高級貴族である飛鳥井雅康らが、万葉からの名勝和歌の浦の和歌の神様玉津嶋、「和歌之天神」、紀三井寺を参拝していること、また和歌の浦は海を生業とする海民の生活の場でもあったことが読み取れる。（米田2007）

3. 正徹、心敬の和歌の浦

中世になると、和歌文学は武士の間にも広まる国民的文芸となる。室町時代、正徹・心敬・宗長・宗祇などが現れ、和歌や連歌を広め、歌道に新しい息吹を吹き込んだ。正徹・心敬は和歌の浦を訪れる。

正徹（1381～1459）は、私家集『草根集』巻三によると、永享11年（1439）8月、59才の時、一行を伴って初めて和歌の浦玉津嶋社に来た。

名に高き其神松をあふぎきて　心しらるる玉津しま山
あこがれの玉津嶋社は、根上松であり、
浪を我しらずかけづる言の葉は　あさかりけりな和かのうら松
和歌の浦を美しい景観を見もしないで、言葉の遊戯に陥っていた自分を恥じた句である。
さして行たづもあしべもなかりけり　かたを浪こすしほはあれども
松うづむ真砂は山もさだまらず　たえず吹上の風にまかせて

（『草根集』）

正徹は、玉津嶋周辺の風景、入江や片男波の砂州を、和歌の浦の風景のありのままに描写した。

心敬（1406～1475）は、正徹の弟子であり、紀伊国名草郡に生まれた天台宗僧侶で連歌師として時代を代表する歌人である。和歌、連歌の修行と仏道の修行を同一視し、次代の宗祇などに影響を与えた。

寛正４年（1463)、紀州に帰り、『心敬百首和歌』を作る。その中に「眺望」と題する一首があり、和歌の浦を詠んだ。

眺望

今日はまたてにとるばかりかすむにも　筆をぞなぐるわかのうらの浪

和歌の浦の辺の、春けしきにむかひて侍るに、とし久しく、おぼろなることの葉に、かけ侍しは、かたはらいたき事に也

（『心敬百首和歌』）

間近に春景色を眺めているが、筆舌に尽くしがたい、真景にふれず、和歌の浦を詠んだり、歌ったりしたことは、おろかであったと自己批判している。

古今和歌集以後、新古今和歌集を中心に現実を離れて想像の歌が詠まれる。本歌取りや歌枕・掛詞を拠所に、美しく想像した世界を詠むことこれが和歌の特徴の一つとなる。歌枕の地であること、和歌詠草の比喩になることは、和歌文学史上、和歌の浦が重要な地であることを意味する。正徹、心敬は、和歌の浦を名所歌枕として歌道の聖地として詠んできたが、実際に現地を訪れ、その景観美を見た時、自らの歌がどれほど真景とかけ離れたものか自己批判するほどに、中世の和歌の浦は万葉以来の美しい景観を保持していた。

第３節　近　　世

中世以降近世までには片男波砂洲が発達したものの、相対的に地形の変化は少なかったが、近世に入ると和歌の浦の景観に人文的な要素が大きく加わった。景観変遷の上では二つの画期がある。一つは、豊臣、浅野、徳川家により多くの神社・仏閣が復興・新築の事業が展開された近世初頭16世紀末から17世紀半ば頃までの時代、二つは第10代藩主徳川治宝が行った19世紀段階である。

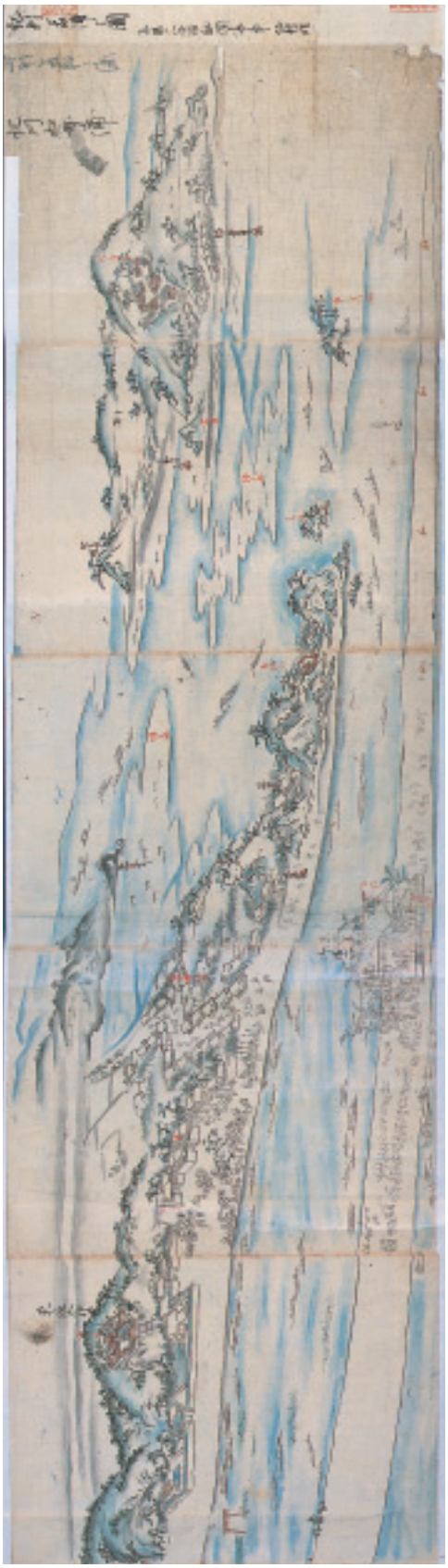
1. 浅野幸長の和歌の浦整備

天正13年（1585）３月下旬に、和泉国を平定して、紀伊国平定の陣を和歌山に張った秀吉は、４月初め、和歌の浦玉津島社に詣でた。その時、「打出て　玉津島より　なかむれば　みどり立ちそふ　布引の松」と詠んだ。紀伊国の新しい支配者として和歌の浦玉津島社へ参拝した。自らの参拝を古代の聖武天皇の和歌の浦行幸と重ね合わせたのであろう（藤本1993）。「神代より　然そ貴き　玉津島山」への畏敬の念、和歌の浦は尊崇の地であり、神を祭る地という意識が見られる。

豊臣期、羽柴秀長の城代桑山重晴は、天正16年（1588）以降、「和歌之天神」（天満宮）に荒神社や本地堂を建立するなどの保護を加えた。天満宮信仰の起源は古代～中世における海民の天神信仰もしくは荒神信仰であり、14～15世紀、菅公を祀る形で瀬戸内海に拡がった「綱敷天神」信仰が当地にも定着し、これが継承され、発展して江戸初期に天満宮（「南無天満大自在天神」）となった（米田2009）。天満宮は古来より入江の奥まった高台（天神山中腹）に位置し、海民が尊崇する社として存在した（鳴海2009）。また和歌の浦という地域は信長・秀吉と対抗した雑賀惣国の水軍の拠点であり、紀州平定後は人心掌握の目的もあって重視され、政治的な配慮がなされた。それ故に天満宮は豊臣政権期から注目された（藤本2009）。

ついで、慶長５年（1600）関ヶ原後は浅野氏が紀州の領主となり、天満宮・玉津島社の再興を中心とする和歌の浦の整備を図った。すなわち慶長11年(1605)境内地を拡大しつつ、楼門・回廊・唐門・瑞垣・本殿・拝殿を再建するという大規模な社殿造営を行った。浅野幸長は当代随一の大工塀内吉政を登用し、桃山様式の先駆けとなる建物を建築した。同時に入江の入口に位置する玉津島神社の社地に本殿等を再建した。藤原惺窩（せいか）は「碑銘」を著し、浅野氏が和歌の浦に菅神廟＝天神社を再興した意義を詳しく述べている。これらの事業は近世和歌の浦の整備、景観変遷の上で一大画期をなした。この段階では、天満宮・天神信仰中心の和歌の浦が形成される可能性もあった（藤本1993）。浅野幸長は、景勝地であり、霊地である和歌の浦の要に位置する天満宮の整備を図ったが、天満宮は、和歌山城の鎮守という意味を持った可能性がある（米田2009）。

名古屋城本丸御殿が完成した直後の慶長20年（1615）４月、浅野幸長の娘春姫と徳川家康の息子義利の婚儀が行われたが、このために名古屋城本丸御殿次間に障壁画が描かれた。この障壁画を、和歌の浦を「実景とはことなる『古来の図様』をもとに名所絵的に描かれたもの」とする見解（高松2005）もあるが、これは当世の和歌山城下から和歌の浦へのアプロー



（東半分）

（西半分）

図２　住吉如慶　紀州若浦之図　1645　（東京藝術大学大学美術館蔵）

チと近景（実景）を描いた風俗図であり、「泰平の治世」下での和歌の浦が描かれている。この絵の構図がその後の名所絵の粉本となった（米田2009）。寛文3年（1663）・同5年（1665）に狩野探幽が描いた「和歌浦図」・「和歌浦」（掛軸）は和歌川方面から和歌の浦の景観を描き、紀三井寺・玉津島・天満宮という名所三所を実景的に描いている。近世前期（17世紀中葉）に描かれた和歌浦図屏風においては近世初期に整備された名所三所を中心に位置付けており、和歌の浦の景観変遷史上で天満宮・玉津島社が再建された意義はきわめて大きいと言えよう（藤本2009）。

尚、名古屋城本丸御殿次之間の障壁画には、東は名草山・紀三井寺から西は雑賀崎までが描かれており、近世期に和歌の浦がどのような範囲で認識されていたかが伺えるが、この範囲で和歌の浦を描くことは、和歌の浦全体をパノラマで描く「紀州若浦之図」（1645・図2）に踏襲されている。「紀州若浦之図」は、「東照宮縁起絵巻」（1646・図3）の下絵として描かれたもので、地勢と地誌とが忠実に踏まえられ作成されている。「紀州若浦之図」には紀三井寺や玉津島など、広く知られた和歌の浦を象徴する地名のみならず、「ヒクニ岩」、「松カハナ」、「馬トドメ」など現地の地誌に詳しい者のみが知り得るような地名を含めて39の地名が書き込まれている。描かれている位置や地形上の特徴も正確である。とくに入江部分は干潟に降りる石段（雁木）が三箇所描かれていることなど、そのディテールまでもが忠実に描き込まれており、綿密な現地踏査が行われて絵図が制作されたものと考えられる。「紀州若浦之図」は単なる風景の写生ではなく、地勢と地誌が踏まえられ、これらが明示された和歌の浦図になっているのである。

名所和歌の浦の範域の西端として描かれる雑賀崎についても、集落に「西の山」、信長に追われた教如が身を隠したという伝説がある上人窟に「タカノス」、大島に「オサ島」双子島に「フタゴ山」という書き込みが入れられて詳細に描かれている。雑賀崎は釣りの名所であったが、『紀伊国名所図会』には、次のように記されている。

「此地漁戸多し。西南の方に鷹巣といへる所あり。千尋の巌壁聳えて、下不測の海に臨めり。其峻険たとふるにものなし。海中大小の石を抽ず。おのおの形によつて名を設く。南の方は煙波渺々として、目涯の窮るところ、水天相接るのみ。初秋の頃より、いつも好事の風客、こゝに来て釣をたれ、半日の閑をなぐさむもの多し。」（『紀伊国名所図会』）

2. 徳川頼宣の和歌の浦整備

豊臣滅亡後の元和5年（1619）、紀州徳川家初代藩主頼宣が入国する。名勝和歌の浦の自然景観の中に、歌道の聖地としての玉津島社、海民の天神信仰心を基底に中世以来菅公を祀る天満宮、熊野参詣・西国三十三カ所観音霊場の紀三井寺があり、それらが織りなす人文景観の中に、新たな景物として、頼宣は父家康を祀る紀州東照宮と母養珠院を祀る妹背山多宝塔を加えた。頼宣は、東照宮や妹背山造営、廟所、聖域として和歌の浦を創出するとともに、天下の大祭和歌祭を生み出し、庶民に開放された空間・眺望点としての観海閣を造成した。

⑴東照宮

紀州東照宮社では、和歌山城内ではなく、景勝地和歌の浦の権現山に勧請された。しかも入江の最も奥に鎮座する地主神である天神社または天満天神と並べる形で造営された。

同社は頼宣の紀州入国とともに計画され、東照大権現を祀る東照社として建立された。元和６年（1620）起工、元和７年（1621）に竣工･遷宮式が行われた。『紀伊続風土記』によれば、境内は方八町で、宮山周囲50町余りであった。現在は頼宣を合祀している。

鬱蒼とした木々に囲まれた東照宮参道は青石が敷き詰められ、両側は低い石垣で区切られる。鍵の手で折れ曲がると、急勾配の108段の石段にたどり着く。参道と石段の両側には、家臣団が寄進した石灯籠が並ぶ。高台の南端には、楼門が南面し、その両脇に東西廻廊が建つ。高さ約２ｍの石垣により一段高くなった社地北側には、唐門と瑞垣、その内側に正面に拝殿、その奥に本殿が建ち、「石の間」と呼ばれる部分で繋いで一つの建物にまとめたもので権現造りと呼ばれる。かつて江戸期には社殿の右に三重の塔、左に薬師堂があった。社殿建物は和様という伝統様式を用い、様々な彫り物で飾る。内外部共に黒、赤の漆を塗り、複雑な組物や彫刻類には色とりどりの色彩を施す。また社殿の隅々まで金箔を施す。代表的な江戸時代初期の建造物である。

東照宮の例祭は、元和８年（1622）に趣向を凝らした絢爛豪華な風流の祭りとして創始され、江戸時代には、毎年４月･９月に例祭が行われたが、４月のそれは国中第一の大祭であった。また祭礼時に片男波に御旅所（図４）が設けられた。

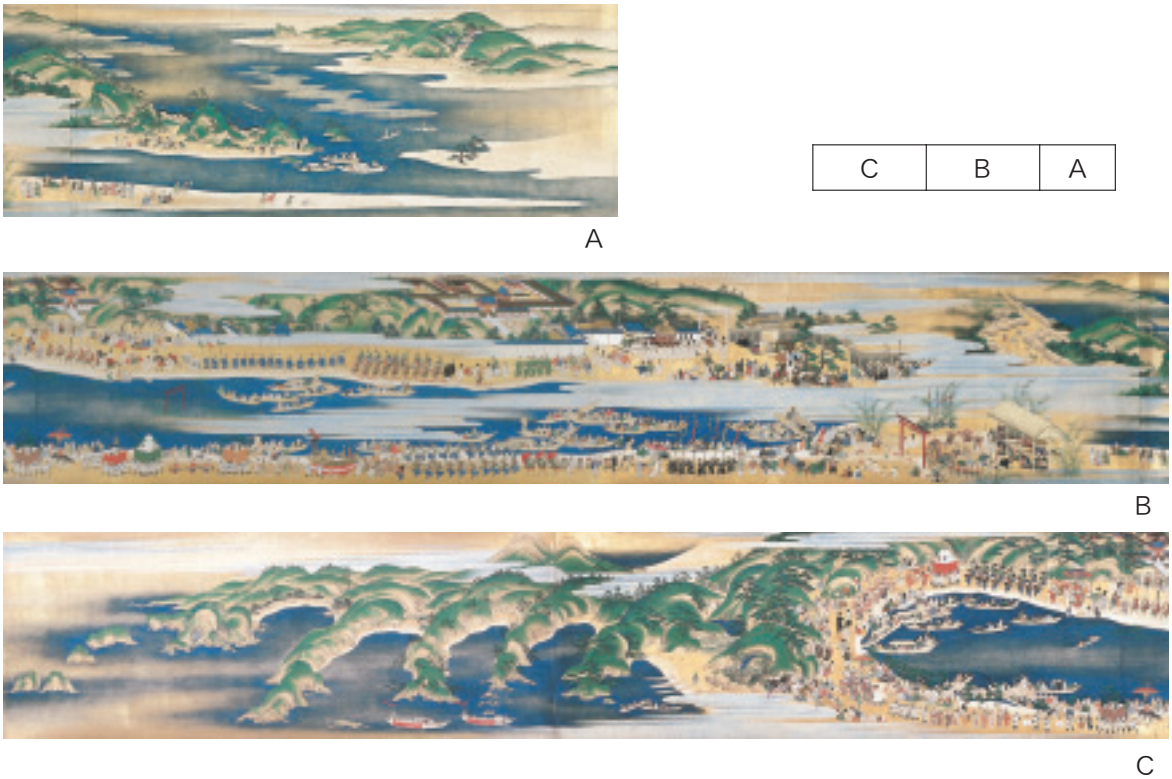


図３　住吉如慶　東照宮縁起（紀州東照宮蔵）

図４　御旅所　東照宮縁起（図３Ｂ右半拡大図）

⑵妹背山と三断橋

和歌川河口に浮かぶ妹背山は、周囲250m程の小島で、相模の江ノ島、近江の竹生島、安芸の厳島と並ぶ水辺の名勝であった。妹背山はかつてイモ嶋と呼ばれていた。元和５年（1619）に和歌山初代藩主徳川頼宣が和歌山に入国した翌年に、頼宣は、家康の東照社を和歌の浦に卜定し、着工しており、この島に弁才天を勧請したことから、弁天島と呼ばれていた。しかし、養珠院の希望により、この島を御法山にするに当って、慶安元年（1648）にこの弁才天社は近くの甲崎の蜆宮に移され、妹背山が整備された。

写真２　明治の頃の妹背山

妹背山の西側には、砂岩製高蘭付きの三断橋が架けられている。この橋は県下で最古の石橋で、妹背山を整備した慶安期に建造されたものである。『紀伊国名所図会』に、「こは杭州西湖の六橋のおもかげありて、風景真妙にして、壮観足らずということなし。」と記されている。三断橋は、何度か補修されているが、橋の原型そのものは4世紀にわたって崩れることなく、今日まで継承されている。

三断橋を通り妹背山へと渡ると、その正面の右側の梵文題目碑があり、かつては「経王堂」と呼ばれる「小堂」の中に祀られる形であった。さらに、南側の磯部の道を行くと、東向きに水中に東側柱を立てた懸造（かけづくり）の観海閣が建っている。観海閣は三断橋と同じ時期に頼宣により建造されたものであり、四季を通じて民衆に開放されていた。ここから石段を登ると多宝塔（和歌山市指定文化財）の前に出る。この多宝塔の下には石室（東西210cm、南北164cm、深さ4 m）があり、この中に『法華経』の「題目」（南無妙法蓮華経の七字）が書写された15万個を超える経石が埋納されている。この経石の埋納は、東照大権現の三十三回忌（慶安元年（1648）　4月17日）を期に、家康の側室で頼宣の生母である養珠院（お万の方、1577～1653）が、衆生の慰霊救済と天下静謐を祈って発願したものである。この浄業には、後水尾上皇（1596～1680）・皇后（第2代将軍徳川秀忠の女徳川正子、東福門院）はじめ公家衆から庶民に至るまで、また僧俗を問わず多くの人々が参加するところとなり、経石の題目数の合計が250万返に達したことをもって、慶安2年（1649）にこの浄業は成就している。経石が埋納された石室の上には、経石埋納供養の経緯が刻まれた高さ268cmの砂岩製の題目碑が造立され、覆屋としての小堂が建てられた。この4年後、承応2年（1653）に養珠院が江戸御館で没し、養珠院の師である日遠上人の埋葬されている甲州大野山本遠寺に埋葬された。明暦元年（1655）には頼宣により、養珠院の菩提を弔うため、この小堂を多宝塔の御廟として建替整備された。多宝塔が建造されたその2年後に多宝塔内に養珠院の遺骨を納めた釈迦仏を安置し、法事が行われた。この経石埋納事業には、上皇・中宮・女宮をはじめ、僧俗の区別なく人々は競って経石を進納している。江戸時代初期にあって身分を超えて多くの人々が参画したこのような法事は、我が国の歴史の中でかつてなかったことであり、題目碑にも、このことは「叡慮映石典是前代未聞奇異耳」と記されている。

平成16年から同17年にわたる妹背山護持顕彰会による3度の妹背山多宝塔下石室の経石調査により、妹背山は、『法華経』の物語を具現化した御法の山であると考えられるに至った。目下、15万個の経石が調査されている。

3.徳川治宝の和歌の浦整備

⑴御旅所移転・不老橋架橋

江戸後期、紀州藩主治宝は、儒学を復興させ、国学を普及させ、藩主退任後も古代政治や玉津島社、和歌の浦に強い関心を寄せ、多くの文化事業を手がけた。文化3年（1806）儒学者仁井田好古らに『紀伊続風土記』編纂事業を命じ、その成果により文化10年（1813）和歌の浦の奠供山山麓に「望海楼遺趾碑」（仁井田好古撰文）を建立した。ついで退任後の天保3年

(1832)奠供山の山上に拝所を整備し、「奠供山碑」(仁井田好古撰文)を建立した。拝所は幕末期に取り払われたが、奠供山山上には跡地があり、そこから一望の下に和歌の浦を見渡すことができる。奠供山拝所整備の翌年、鏡山東の茶屋(当時2軒)の横に芭蕉句碑を建立した。

治宝の和歌の浦再生事業は御旅所移転、不老橋架橋で仕上げられた。嘉永3年（1850）10月、片男波の外海に近い側にあった御旅所が波の影響を受けるという理由でより東の、砂嘴の内側の干潟にお旅所升形を造成し、移転するように命じた。同時に「輿の巌」と新御旅所の東側、すぐ近接した個所とを結ぶ線上入江にまっすぐの堤を築き、その北端に当たる「輿洗岩」の上にアーチ橋を掛け、「輿洗岩」の南と接続させた（高橋1990)。北側の「輿洗岩」の周囲は造成され、陸地となった。この橋を含む堤の道「御裏道」と記されているが、和歌の例祭時には、御輿の御幸道ではなく、藩主や東照宮関係者が通行するお成り道であった。橋は嘉永4年（1851） 4月に完成し、同5月に「不老橋」と命名された。治宝の長寿を祈念した命名である。橋は九州肥後の石工技術を導入し、雲形レリーフの高欄は湯浅の石工が作成している。アーチ橋は当時本州ではめずらしいものであり、藩の天文数学方・蘭学方山羽幸之助が技術導入に関与し、橋名は上賀茂社書家岡本保誠の揮毫であり、国学者伊達千広が取り結んだ可能性がある（藤本1989)。不老橋とそこから続く入江の堤は、すぐ北にある三断橋と妹背山の景色を考慮し、和歌の浦干潟を中国杭州西湖（図5）に見立て、西湖に掛けられた白堤・蘇堤に見立てた景物を新たに加えたとの解釈が可能である。架橋は舟行を確保するためであるが、アーチ橋を採用したのは、そのアーチと借景の名草山の山稜カーブが調和するよう配慮されており、きわめて高度な設計がなされた。治宝は儒学者･国学者を動員し、学術水準が高い文化事業を行った。また、ほぼ同じ頃に造園された回遊式庭園を持つ、養翠園（国指定名勝）の庭園（図6）にはこの和歌の浦の景色、景物が取り入れられたと言われている（『和歌の浦 不老橋』)。

図5　小山吉三画「書簡図繪」杭州　戦前

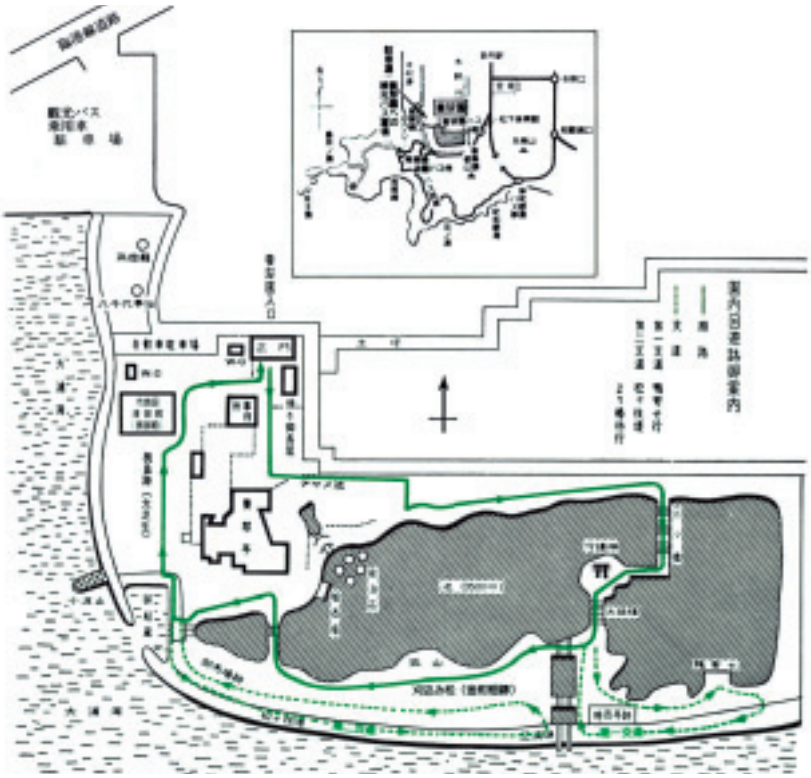


図６　養翠園案内図

⑵入り江の塩浜化と修景

入江の塩浜化については、宝永４年（1707）から享保10年（1716）まで宝永の大地震による沿岸の塩浜が壊滅する状況下で、一時的な措置として市町前干潟の一部が塩浜化されたことがある。しかし、宝暦５年（1755）和歌村から市町前の塩浜化が出願されたが、その地を管轄する雲蓋院は藩祖頼宣の「御旅北側之入江、塩浜為仕申間敷事」との意向に従い、塩浜化を容認しなかったが、十数年後に取り壊わされた。また、70年後の文政８年（1825）、石井伝左衛門・境内六ヶ坊よりの出願があり、これが認められて新道東側の入江の一部が塩浜にされている（藤本1989　高橋克伸1989）。

天保３～10年（1832～39）頃に描かれた「和歌浦之図」（和歌山市立博物館所蔵）には御旅所北側の入江の半分ほどが「塩浜」として描かれている。「紀州和歌浦絵図」には堤で囲った「シホハマ（塩浜）」が描かれている。岩瀬広隆の「紀州和歌浦之図」には新御旅所が描かれているが、輿洗岩の上に掛けられた不老橋および南へほぼ一直線に堤が造成され、塩浜は現在の市町川堤と、新御旅所に通ずる不老橋延長の堤とで画されている。新御旅所のある造成地は変形四角形で、今日も道路の形状からその範囲を確定しうるが、治宝によるこの新御旅所の造成で鳥居が建てられ、その周辺の聖地化がなされた。すでに塩浜化のために築かれた東西の土堤（市町沿い）はさらに東に延ばされ、その範囲での塩浜拡大化も可能となったが、南北の新堤（御旅所への御成道）より東に拡大することはなくなった。経済的要求と移転による聖地環境の確保の併存が図られたが、何よりも、不老橋とその南に続く堤が造成さ

れることで、玉津島社に近接した三断橋・妹背山・不老橋・新堤・入江以東の干潟の景色が修景され、名所景観の要となった点が重要である。この景観は、その後名所絵の定型として確立した。塩浜としての土地利用は、天満宮前まで続いていた広い入江が縮小するという景観変容を生じさせたが、御旅所移転・不老橋架橋・新堤の造成によって干潟景観が和歌の浦東部に保持され、和歌の浦の地に全体として古代・中世・近世と重畳する和歌の浦の景観が維持されることになった（高橋1990）。

4. 名所としての和歌の浦

歌枕・歌道の聖地として、古来より多くの貴族や歌人が尊敬し訪れた和歌の浦に、紀州初代藩主徳川頼宣は祖廟を設置することで、新たな要素を加えた。風光明媚な自然景観、歌枕としての名所に、新たな東照宮、妹背山など寺社名所が誕生し、近世の和歌の浦を、各階層の人々が、当地を目的地として、さらに熊野参詣、西国三十三所観音霊場巡礼、高野山・粉河寺参詣の折に訪れるようになる。訪れた人により、地誌・案内記・紀行などが残され、和歌の浦の文芸も和歌の他に漢詩、俳諧、狂歌などと多彩になった。また、巡礼など大勢の民衆が、名所としての和歌の浦を訪れた。

⑴民衆遊楽の地としての和歌の浦

頼宣によって一代をかけて整備された和歌の浦は、民衆にも開放されたものであった。和歌の浦は民衆遊楽の地としても整備されたのである。

和歌の浦には早くから熊野参詣者や西国三十三所巡礼が立ち寄っていたと考えられる。近世初期から中期に描かれた絵画に、東照宮と考えられる社頭や境内には、多くの民衆が立ち入っている様子が描かれている。長屋筋も東照宮の門前町としての性格を有していたものと

図７　原在明（安永６(1777)～天保15(1844) 67歳で没）画　溝端佳則氏提供

思われる。

元禄元年（1688）に松尾芭蕉が来遊し「行く春を和歌の浦にて追いつきたり」という名句を残しているが、その翌年には貝原益軒が和歌の浦を訪れ、このときの見聞を『南紀紀行』に書き記している。

「東照宮、右の山上に立玉ふ。宮作大にして甚美麗なり。神領多く、僧舎六坊あり。是より和歌浦を望めば、其景すぐれたり。今日は、此辺桜さかりにさきて、光景もいとまされり。御宮の下和光院に、大猷院公、厳有院公御霊廟あり。其東雲蓋院に仮山水あり、甚佳景なり。芦辺の田鶴など詠ぜし処は、東照宮の下、天神の鳥居ある所なるべしと云。天神の社は、東照宮の右に並べり。是又山上にあり、社又大なり。」（「南紀紀行」『益軒全集第七巻』）

ここには、東照宮、雲蓋院、天満宮が相並んで立地していた当時の宗教的境域としての和歌の浦の様子が簡潔な文体で記されている。雲蓋院には庭園が造られていたが（和歌浦図屏風より）、「雲蓋院に仮山水あり、甚佳景なり」と賞賛されており、旅人にも公開されていたことが伺える。元禄年間に書かれたと考えられている『紀南郷導記』にも次のように記されている。

「御宮（東照宮）ノ右手ノ方ニ御供所有リ。此並ビニ石ノ手水鉢有リ。此際ニ大木ノ桜有リ。御手水鉢ノ桜ト云フ。色香秀逸ナレバ花ノ頃ハ貴賤群ヲナセリ。是ハ野州日光ノ御手水鉢ノ桜ヲ接（つが）セラルト云ヘリ。」（『紀南郷導記』）

桜の季節には、東照宮に貴賤の別なく人々が群れをなして花見に訪れていたのである。正徳3年（1713）に書かれた菅沼逸（俳人菅沼曲水の妻）の旅日記『岸和田紀行』には「東照権現にまふで、雲蓋院の庭をながめぬるに、自らの山を庭に作りこめて、さまざまの草木植、うつくしき石ども敷きならべしさま、たぐひまれ成べし」（『近世女人の旅日記集』26頁）と記されており、東照宮も雲蓋院の庭園も旅人に公開されていたことが分かる。雲蓋院の内六坊の一つ大相院にも庭園が造られていたが、文化10年（1813）にまとめられた『友が島紀行附和泉の紀行』には、「和歌の浦にあしはや小舟漕帰あかぬ夕の見るめをそかる」という歌とともに、「大相院とて国の守の御座所の御廟を守護し奉らるへつとうの庭、見ものなるよしを舟人にきき、たよりを為てみ侍るに築山に蘇鉄を多くうへられたり高き所にのほれは海つらもみえ侍る。」と記されている。幕末（安政元年（1854））の巡礼の旅日記（自芳尼「西国巡拝名所記」）で東照宮を参拝したことを記しているものがあるが、唐門の中側にある灯篭の位置までもが書き留められており、少なくとも東照宮の拝殿のところまでは巡礼に開放されていたことが分かる。

妹背山の整備については慶安4年（1651）までには一応完成されたと思われるが、後に浄土宗学僧の全長は『和歌浦物語』（元文3年（1738））において、妹背山には慶安4年4月の日付で「妹背山禁殺生」というのと「樹木の枝折るべからず」という制札が立てられている

ことを書き記している。こうした制札の存在は、この場所が民衆に開放されていたことを物語っている。

江戸後期に刊行され『名所図会』の白眉と称される『紀伊国名所図会』には、次のように記されている。

「国祖君御造営あり、三つの橋をわたし、山のめぐりは石を畳みて平地とし、山上には宝塔高く聳え、石段くだりて水楼あり。みなみは名にあふ和歌のうら、東面は名草山なり。山水絶妙、言語に絶えたり。かかるやごとなき御制地なるも、下民の遊翫をゆるされ、四季をりをりの間断なく、ここにつどひあつまり、おのがさまざまたのしみ興ず。或人是文　王の囿(ゆう)に比す、また宜ならずや」(『紀伊・名所図会』)

文中の「文王の囿(ゆう)」とは儒教の教えに引かれているもので、覇道ではなく王道によって世を治めた文王を慕う人民によってつくられた庭園のことであり、この庭園の佳景は、文王だけではなくそれをつくった人民ともどもに楽しまれ愛されたとされる。観海閣は、貴賤の上下なく一般民衆も四季を通じて妹背山に立ち入ることができ、自由に遊楽することが出来たのである。その様子が「文王の囿(ゆう)」に喩えられ、賞賛されているのである。

こうした民衆の集う場所として、和歌の浦を整備することは（田中1992、1996)、「身分の上下を超えて万人共に楽しむ」という共楽の理念に基づいていると考えられ、観海閣はそうした理念を具現するものであったと考えられる。妹背山は、聖域として囲い込まれるのではなく、その当初から民衆にも開かれた遊楽の地としても整備されたのであった。

「和歌御祭礼図屏風」には、妹背山への渡り口になる三断橋の袂に茶屋と思しきものが描かれている。これは、三断橋や観海閣の建設など慶安期に行われた妹背山整備に合わせて置かれることになった芦辺屋と朝日屋であろう。この茶屋の袂から紀三井寺に渡し舟が出ていた。芭蕉もこの渡し舟を利用したのであろうか。先にみた紀行の中で、益軒は次のように書き記している。

「俗に称する妹背山は、玉津嶋」の東にあり。弁財天の社あり。岩の形勢あやしき事目を驚せり。凡、和歌の浦の石は皆木理有て甚美なり。他州にては、いまだ見ざる所也。（略）玉津島、妹背山の南は、西の方布引の前より潮の来る入江なり。其むかへ海の方は、高き沙の岡有て、所々に松生たり。此岡、長し。此入江のあたり、亦佳景なり。古歌に（人とはば見つとやいはん玉津嶋かすむ入江の春のあけぼの）とよめるは此所なるべし。是より河を舟にて渡り、むかへに布引の松あり。大木にてかれたり。蟠屈して猶、見所あり。布引とは、此松のある所の西南にある町の名也。藤代へゆく道也。紀三井寺に麓町有り。」(「南紀紀行」『益軒全集第七巻』)

⑵名所案内にみる和歌の浦

先にみたような日記や紀行文以外に、名所としての和歌の浦を広く巡礼や旅行者に知らしめたものに、各種の名所案内がある。

よく知られた木遺歌に、「和歌の浦には名所がござる。一に権現、二に玉津島、三に塩竈、四に妹背山。片男波こそ名所なれ」（『松の葉　元禄十六年』（1703））というのがある。数え歌式に和歌の浦の名所を列挙し、名所としての和歌の浦の名を近世の人々に大いに広めたものである。

享保12年（1727）に大坂で出版された『画典通考』（大岡普斎著述、橘守国画）は、現在確認されている最も古い和歌の浦の絵（版画）入りの名所案内であるが、そこには次のように述べられている。

「和歌浦　和歌浦は眺望眸に及べる所まことに名に逢へる名所なり。歌人おもひを弄し騒人筆を悩しぬ。風景鮮にして其形象ならぶるに物無し　神殿高く輝　仏閣甍調ふ葦辺の田鶴滷乎無美　地の島沖のしまいずれも堪たる様なり。しかにもならず玉津島の社は民屋の東にいまして西三条実隆卿の歌仙の筆あり妹背山弁才天の怪しく並べる驚ろかざるべきにあらず　惣じて紀伊の路の奇石奇樹余の国に目なれぬもてあそびもの也　雑賀の塩濱布引の松所からおもしろき勢ひ御せ里」（『画典通考』）

全長の乾坤二冊からなる『和歌浦物語』の乾冊には、和歌の浦の総説に続いて城下から和歌の浦までの和歌道沿道の名所が述べられており、坤冊には近世和歌村にあった名所が詳しく述べられている。高松から和歌道沿道を経て和歌の浦に至る順路（高松茶屋－愛宕山－猊口石－御房山（御坊山）－矢の宮－亀遊巌－鶴立島－芦辺寺旧跡－宗祇が松－養珠寺－妙見堂）も丁寧に記されている。

この全長の『和歌浦物語』に先立つ「和歌名所記」（崎山楠右衛門直頤著：崎山楠右衛門は有田郡内で医師兼手習い師匠をしていた惣右衛門の子。明暦２年、頼宜に召抱えらる）は、出版年などの詳細は不明であるが（その成立は近世初期にさかのぼるものと思われる）、やはり高松の茶屋を出発点として菅公御廟・浦辺に至るまで和歌の浦の名所旧跡・神社仏閣を一巡する紀行文風にそれらの趣景・由来等を書き綴った往来物であり、広く読み継がれたものと考えられる。これまでに多くの版が確認されているが、文政４年（1821）には江戸で鶴屋喜右衛門板（原版：享和元年（1801））が出版されている。その一節は、次のようにある。

「先、高松の茶店に腰うち懸て暫く休ひ、倡行や是より名所旧跡心静かに尋見むとて、傍に猊口石を過行ば、万劫経るや亀遊の岩。千とせを契る鶴立島を見て遣れば、老の齢ひも養珠寺。・・・（中略）・・・芦辺の茶屋に破篭をひらきつ、　景色にめで丶頚を　めぐらす向ふには　其むかし小野小町と在原の業平朝臣の妹背の契りこめし山とかや渚にさらす布引の　松に掛かれる藤代や　巡礼二番の札所なる紀三井寺　塩焼うらの景趣など　誠に三国無双の勝地なるへし。・・・」（石川謙編　『地理科往来』所収該当箇所）

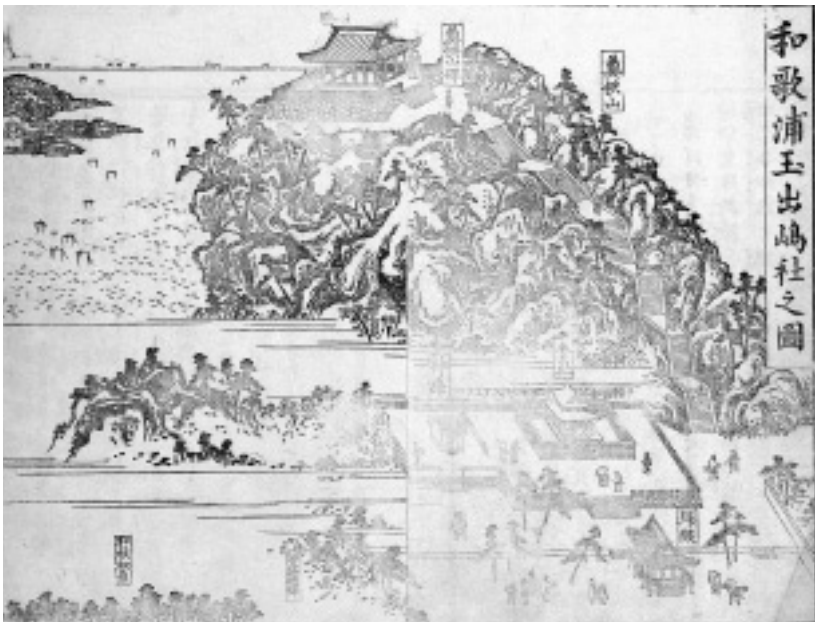
巡礼などに向けられた案内記や絵図は沢山出版されていたものと思われるが、享保８年頃（1723）に出版された「西国三十三ヵ所独案内帳」や享保19年（1734）に出版された「西国三十三所方角絵図」（野田知義作　三番粉川寺大門前魚手屋清左衛門板元）はそうしたもので

ある。

巡礼は、近世を通じて、とくに近世中期以降、和歌の浦に大勢訪れたものと考えられ、玉津島神社には巡礼などの参拝者向けの刷物の版木が残されている。

『紀伊国名所図会』文化８年（1811）は、和歌の浦のみを対象としたものではないが、和歌の浦に多くの頁を費やしてその歴史や由緒を明らかにし、また数多くの詳細な図を掲載しており、今日までも当時の和歌の浦の景観をよく伝えている。

かくて近世の和歌の浦は、古代・中世以来の和歌の聖地・歌枕として継承されるとともに、文人墨客から大勢の民衆が訪れるところの屈指の名所となっていたのである。



（参考図）『玉津島神社略記』慶應三年（1867）改刻「和歌浦玉出嶋社之図」

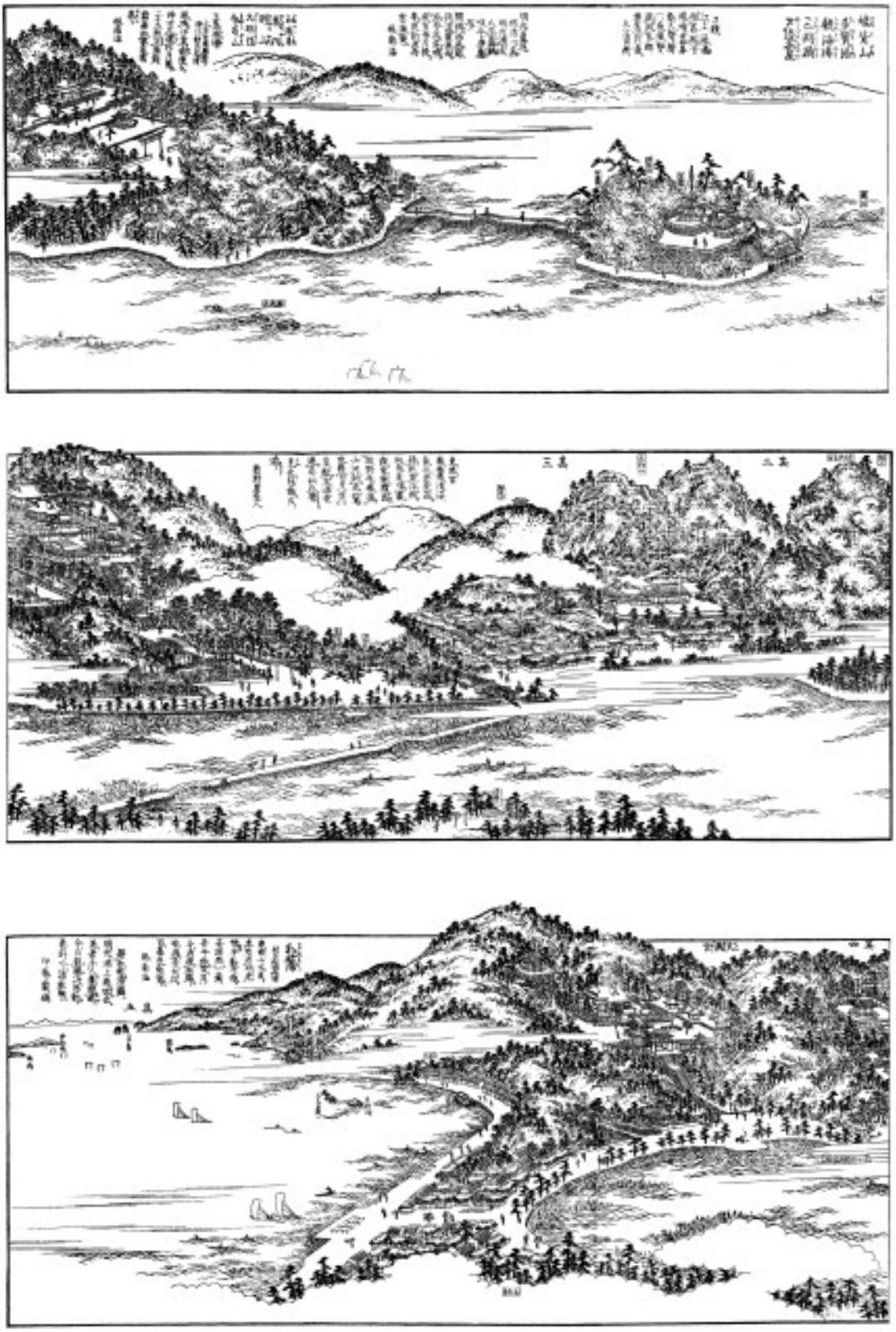


図８　紀伊国名所図会　巻の二（1811）（和歌山県立博物館蔵）

第４節　近・現代

1. 市民による和歌の浦の景観保護活動

明治維新で紀州藩が崩壊すると、和歌の浦の保護体制も失われることになった。名所としての和歌の浦を保護し維持するための新たな体制が必要とされることになるが、特記されるべきことは、民衆が和歌の浦の歴史的環境の保護活動に立ち上がっていることである。

まず、紀州藩崩壊前であるが、慶應２年（1866）に観海閣が台風で倒壊したのに対して、紀州藩は幕末の混乱期で戦時体制が敷かれ財政も逼迫していたことから、再建を城下町中の寄附によって行なうことにし、城下の民衆がこれに応じるということがあった。その際の理由は、次のようなものであったという。

「当時紀之川末流･湊川等ノ各川域ニ於而ハ、舟遊又ハ漁獲ノ如キハ、藩士ノ外ハ禁止ナラザルモ、独リ和歌川拝殿（観海閣）近傍ニ限リ、平民ノ如キモ均シク之ヲ為シ得ラルヲ以而、同所ハ恰モ当時和歌山市民ノ遊娯場ニ特設セラレンモノノ如シ、斯クノ如ク関係ヲ有スル地域中ニ建設ノ拝殿ナルガ故ニ、此ノ因縁ヲ理由トシ、再建工事ヲ和歌山市民ノ寄附ニ説諭ヲ下シタルモノトス」（藤本1990）

観海閣については、文字通り「平民」にも開放された「四民遊息ノ地」となっていたことから、再建工事を「市民」の寄附によることにしたというのである。

明治25年には、和歌村によって観海閣修復の取り組みがなされるが、この折も、「従来ノ通リ何人ニ限ラス、随意遊娯場ニ供セント」とするというもので、「本村風致上必要ノモノ」として今後観海閣の修理などの保護措置を村の予算措置として明確化できるように村有のものとすることを主張している。こうした和歌村々民の動きは、藩なき後の和歌の浦を自らの手で保護しようとするものであった。

ただ、藩に代わって和歌村が和歌の浦の景観保護を担う力はなく、実際には荒廃も進んだようである。和歌村は、明治18年（1885）に和歌山県令宛に「県立公園設置請願書」を提出する。請願主旨は、概略すれば、神亀年間の聖武天皇の行幸から説き起こし、徳川氏による和歌浦の整備と保護を述べ、それが明治になって和歌村一村の支弁によるものとなり、荒廃が進んでいるとして、こうした状況は放置されるべきではなく、和歌の浦を公園に指定し、その整備と保護を行って欲しい、というものである。「古社寺ノ保存ヲ図リ」、公園に指定して「四民遊息ノ地トナス」としていることは、元々和歌の浦が民衆に開放された庭園（「遊息ノ地」）であったことを踏まえての主張であった。こうした「県立公園設置請願書」が和歌村から和歌山県知事宛に提出されたのである。「祠宇僧坊壊廃シテ修ムル能ハス、石欄断橋頽敗シテ理ムル能ハス、岸崩レ、渚荒レ、華表荒叢ノ中ニ立チ、古堂藷圃ノ間ニ遺リ、神祠ノ名空シク」という状況は、和歌村として座視できないものであったのであろう。

2. 和歌公園の設置

その後、和歌村の「県立公園設置請願書」は、恐らくは設置を請願した範囲に民有地を含んでいたことからであろう取り下げられているが（官地が公園指定の対象であった）、その趣

旨は、和歌公園設置として具現化している。明治27年（1894）12月13日に和歌山県から出されていた要請が政府に認められて、翌年2月8日に和歌公園設置をみている。明治30年（1897）6月29日に追加指定がなされ、総面積56町3反7畝21歩の公園になっている。公園地はすべて官林・官有地で、養珠寺周辺、玉津島神社、奠供山、妹背山、雲蓋山、権現山、天神山、片男波、「芦辺潮溜」がその範囲に入れられた。和歌公園の独自の管理規則は明治32年に決定されたが、山林の保護、土地利用の制限、水面利用の制限が規定されている（薗田、藤本1991）。

以上のような和歌公園の設置は、天橋立、松島、嵐山よりも早く、面積も大きいものであった。かつての玉津島山、片男波の砂嘴、干潟という和歌の浦の歴史的景観の骨格となる場所に保護と規制措置がとられることになったが、このような公園設置は、紀州藩崩壊後の和歌の浦の歴史的環境の継承という点で大きな意義を有するものであり、明治以降、和歌の浦を名勝として保護するための制度的基礎になった。

3. 観光開発

明治以降、和歌の浦の歴史的環境に大きな影響を及ぼすことになったのは、観光開発であった。明治後半期から観光開発がすすみ始め、とくに明治末には、観光開発が和歌の浦の歴史的景観を壊すものとして物議を醸すことになる。明治43年（1910）5月に奠供山南側麓で旅館を営んでいた望海楼が奠供山々頂に昇るためのエレベーターを設置しようとしていたことが分かり、これに対して和歌の浦の景観を壊すものだという反対論が新聞紙上で展開されるということになったのである。結局、エレベーターは10月に明光台と名付けられて設置されたが、観光開発が和歌の浦の歴史的環境の保護という点で大きな問題になることが象徴的に示されることになった。その話題性から当時の開発をめぐっては、このエレベーター設置問題に関心が集まることになったのであるが、和歌の浦の歴史的環境と景観保全との関係でこの当時より深刻な問題となっていたのは、和歌の浦における電車路線の敷設問題であった。電鉄会社が望んだ玉津島と片男波を縦貫するルートは、和歌の浦の環境と景観に大きな影響を及ぼすことから和歌浦町や南方熊楠などの反対に合い、和歌浦口から和歌浦港に至るルートで敷設させることになるが、決着するのに数年を要している（薗田、藤本1991）。この時期にはもう一つ、和歌の浦の歴史的環境と景観に大きな影響を及ぼすことになる大規模な土木的改変事業があった。大正元年（1912）9月23日の暴風雨による大きな被害の発生を契機とするもので、新たな防災対策として長大なコンクリート堤防が片男波に建造されたのである。この堤防構築は、和歌の浦の歴史的景観と風致を不可逆的に大きく改変する開発行為に繋がるものであった。工事は、「本県にニ於ケル空前ニシテ恐ラク絶後ノ大計画ニ属シ工費三拾五万余円ヲ計上シ臨時県会ノ決議ヲ求メ国庫ノ補助ヲ得」（和歌山県内務部土木課編1915）て行われたもので、当時としては大規模な土木工事であった。従来の防災対策以上に堤防背後地の開発をあらかじめ想定しての工事であったと考えられ、和歌の浦における開発行為のあり方を根本から変える分岐点となるものであった。明治45年（1912）以来和歌浦地域の地価は急騰しており、この地価の急騰が大規模な堤防構築に繋がっているものと思わ

れる。堤防構築後は皮肉にも土地ブームが去り、地価は一時下落するが、大正５年ころから再び地価が急騰し始めると、この地価騰貴に合わせるかのように和歌浦土地株式会社が設立され、この和歌浦土地株式会社によって片男波堤防の背後地であった干潟の埋立事業が進められたのである（高嶋1989、1990）。

埋立事業の全容は必ずしも明らかではないが、当時盛んに打ち出されていた遊園地構想を実現するためのものであったと思われる。ただ、大正８年に埋め立てが開始されるとすぐにまた地価は下落を始め、埋立工事はなかなか進捗しなかった。州崎の埋立造成部分に遊興施設が造られたものの、結局、埋立地には当初構想されていたと考えられるものは造られず、入江の埋立地は御旅所の鳥居がぽつんと立つ広大な遊休地として放置されることになる。大正末から土地の分譲（売却）が進められ、昭和に入って不老園（高級料理店、旅館など10軒ほどで構成）が造られ、その一部が使用されるようになるが、それも昭和10年代には時節柄好ましくないとの理由で廃止されるに至っている（米田1990）。

4. 名勝指定と風致地区指定

明治末から急速に進む観光開発に対しては、奠供山のエレベーターの設置に限らず、和歌の浦の歴史的環境を損なうものという懸念が示されてきたのであるが、こうした保全を求める声に応ずる形で、大正14年（1925）には和歌山県で史跡名勝天然記念物保存顕彰規定が設けられ、同年７月17日には和歌の浦（和歌浦町、紀三井寺村、雑賀崎村、雑賀村）が名勝に指定されている。従来の和歌公園の範囲を超えて、言わば和歌の浦の歴史的環境の全体が文化財として保護される方向性が示されたことになる。

また、昭和16年（1941）には和歌公園ではカバーしきれていないところを含めて、「歴史と伝統とを背景とする風致景勝の地」として風致地区指定の措置が取られている。和歌の浦の歴史的環境の骨格となる部分が第１種風致地区に指定され、更にそれを取り囲む形で第４種風致地区の指定がなされている（薗田・藤本1991）。

5. 戦後の和歌の浦

戦中期には、片男波の松林の伐採が行われ、また、片男波の埋立地の大部分が荒廃した状態で放置されたことから、和歌の浦の歴史的環境と景観はダメージを被ることになった。戦後は、こうした状況を前にして、赤人の万葉歌碑が立てられるなど、市民によって名勝和歌の浦の顕彰活動が行われている。

しかし、法制度上の保護という点では、和歌公園と風致地区指定は戦後も継承されることになったのに対して、名勝は継承されなかった（理由は不明）。戦後は、都市計画法上の保護のみが継承されることになり、文化財保護法による保護制度として継承されなかったのである。また、干潟は保護規制の対象範囲からはずされてしまった。戦前に比べて法制度上の保護体制が弱体化することになり、和歌の浦の歴史的環境の保護という点で大きな課題が残されることになったのである。

戦後の観光開発は新和歌浦が中心となり、観光開発では大きな影響を受けることは少なくなるが、堤防などの防災施設や学校関係施設の建設など公共建造物の整備による影響が大きくなっている。護岸工事で干潟の水際の自然が失われ和歌の浦を象徴する風物の一つであった葦の生育場所が全滅してしまっている。昭和36年（1961）の第二室戸台風により倒壊した海観閣は、その後はコンクリートでの再建がなされたのみで、元のケヤキ造りの趣は回復されないままになっている。

片男波（入江）の埋立地では、住宅地化が進んだ。大正期に埋め立てが行われ、荒地のままに放置されていたのが、戦後、市営住宅の建設をはじめ急速に住宅地化が進められ、高度成長期には新興住宅街の様相を呈するようになっている。

戦後の和歌の浦における景観上の改変で最も大きなものは、1980年代後半から1990年代半ばにかけて実施された和歌浦湾におけるリゾート開発に伴う一連の土木事業によるものである。大規模な道路建設計画の一環としてあしべ橋が架橋され、片男波海水浴場と片男波公園へのアクセス道路の建設が行われたが、これにより干潟の一部（約１ヘクタール）の埋め立ても行われて、和歌の浦の歴史的景観は大きく改変された（米田1990）。

かくて和歌の浦の歴史的環境は、戦後の公共的土木事業と開発行為により損なわれることになっているのであるが、その大きな要因の一つは、大正期になされた名勝指定が戦後は継承されず、文化財保護法による保護措置が取られてこなかったことにあり、また、干潟に対する有効な保護措置がとられてこなかったことにあると考えられる。

ただ、こうした状況がある一方で、最近の20年ほどは、和歌公園の整備が順次進められるようになってきている。第１種風致地区内（片男波地区と鏡山地区）にある私有地の一部が和歌山県によって買収され、和歌公園として整備されているのである。また、片男波地区（片男波公園）では過剰な整備も見受けられるが、妹背山地区、津屋地区、鏡山地区では、地元自治会及びNPO関係者との連携が図られ、和歌の浦の歴史的環境を害うことがないように工夫され、再生に向けた整備が行われるようになっている。

明治以降の和歌の浦の歴史的環境を取り巻く状況はけっして好ましいものではなかった。とりわけ戦後の状況は極めて厳しいものであったが、明治の比較的早期に公園に指定され、また、昭和の戦前期に風致地区に指定され、それが戦後も継承されたことで、現在に至っても和歌の浦の歴史的環境の骨格となるところは致命的な破壊を免れており、名勝としての景観が辛うじて保存されているのである。

現在、あしべ橋建設問題を契機として、和歌の浦の歴史的景観の保全活動やこれを活かした文化活動並びにまちづくりの活動に多くのNPOが取り組む状況が見られるようになっている。戦後の和歌の浦の歴史的環境の保全という点で欠落状態になっていた文化財保護法による保護と活用のための体制づくりが焦眉の課題になっていたのであるが、平成20年（2008）６月、和歌山県教育委員会は、和歌の浦の歴史的環境の骨格部分約10ヘクタールを史跡・名勝に指定した。今後も、更に一層効果的でより広い範囲に及ぶ高いレベルの保護と活用のための体制づくりが、引き続き行われることが望まれている。

第５節　名勝及び史跡としての価値

1. 和歌の浦の範囲

和歌の浦とはどの範囲を指すのか。各時代により微妙な違いはあるが、歴史的には、大きくは和歌川の河口域一帯を指すと考えられる。その範囲に関しての文献資料は、中世以前は皆無である。最も古い絵図は、14世紀代の『墓帰絵詞』である。しかし、範囲を示す景観ではなく、広々とした海と玉津島社と想定される松を描くのみである。近世以降では、江戸時代17世紀初頭の作である名古屋城本丸御殿対面所次之間の障壁画には、東は名草山・紀三井寺から西は雑賀崎までが描かれ、和歌の浦を正確に描いた住吉如慶の「紀州若浦ノ図」でも同様の範囲が描かれている。とくに「紀州若浦ノ図」では、南西方向から見た和歌の浦の範囲を描き、西は雑賀崎から東は名草山までの範囲を和歌の浦と明確に記載している。当時、和歌の浦と言えば、この範囲をさすと考えられる。この絵図では北側の範囲は不明であるが、江戸時代の和歌村の北側は、高松からであり、また和歌名所記の始まりの地点は、高松の茶屋である。以上のことから、歴史上、和歌の浦の範囲は、和歌川河口部一帯を指し、北側は高松、東は名草山、南は片男波の砂嘴、西は雑賀崎までを含むと考えられる。

以下では、この範囲の中に存在する文化財を把握し、名勝的及び史跡的価値について検討を行う。

図９　歴史的に見た和歌の浦の範囲

2. 構成要素

和歌の浦の景観美は、山々に囲まれた空間にひろがる干潟と、微妙なバランスによって形成された砂嘴、及び海浜が織りなす自然の景観である。この自然の景観に、歴史的・人文的景観が調和して名勝及び史跡和歌の浦を構成する。

紀ノ川本流の河口であった頃、和歌の浦は、弱浜、若の浦と呼ばれ、浜が出来てまだ初期の段階にあり、片男波の砂嘴は出島の先端にのび、玉津島と呼ばれる島の一部が陸とつながっている状態であった。神亀元年（724)、聖武天皇と山部赤人が行幸し、奠供山から片男波、干潟の躍動感に満ちた歌を詠んだ。宮廷人がこよなく愛した風景が、和歌の浦には存在している。

10世紀末に紀ノ川の主流路が水軒川に変わり、和歌川は旧河道となったため、土砂の供給が減り、片男波の砂嘴の発達は微弱となり、長い年月をかけ細長い繊細な砂州になった。和歌の浦は、紀ノ川の堆積作用が進まなかったことにより、奈良時代からの風景が今に残ることになる。細長い片男波砂嘴の出現により、静かな入江の海面と荒い外洋の白波の対照も和歌の浦の景観となる。また、伽羅岩といわれる岩山と松は、平安時代以降、和歌の浦の風景の構成要素になる。

山部赤人が名歌を詠んで以来、和歌の浦は、和歌の名所、歌枕の地となり、上皇や貴族が熊野詣での折などにしばしば立ち立ち寄り、玉津島神社を訪れ、数多くの歌を残した。和歌の浦は歌道の聖地として歌人の憧れの場所になった。その結果、鎌倉時代から室町時代にかけて、「和歌の浦」「玉津島」を読み込んだ作品が数限りなく生み出された。和歌の浦は物語化され、平安時代以降に名所絵として絵画化され、屏風や障子に四季の風物や人々の風俗と共に描かれた。

近世には、風光明媚な自然景観、歌枕としての名所、和歌の浦を構成する紀三井寺、玉津島神社、天満宮の三要素に、御三家の一つになる紀州徳川藩初代藩主徳川頼宣により、新たに父家康を東照大権現として祀る東照宮、母お万の方を祀り、身分に関係なく上皇から庶民までの経石のある妹背山海禅院など寺社名所が台頭した。そして、和歌の浦には、各階層の人々が当地を目的地として、また熊野参詣、西国三十三所観音霊場巡礼、高野山・粉河寺参詣の折に訪れるようになる。訪れた人により、地誌・案内記・紀行なども残され、和歌の浦の文芸も和歌の他に漢詩、俳諧、狂歌など多彩になった。片男波、干潟、及び名草山を望む位置に造られた水楼、妹背山観海閣は、巡礼人や庶民に広く開放され、いわば開かれた庭園とも呼べる施設であった。天下の名所和歌の浦に、徳川家始祖が祀られると共に、庶民が楽しめる施設が造られたのである。

近代以降は、和歌山県が和歌公園として管理し、名勝としても景観保全が図られた。
古代から現代に至るまで、和歌の浦は名所、景勝地である。この和歌の浦には、現在も
万葉以来の重層した景観が残され、各時代の名所としての骨格は今も残されている。

以下、平成20年度に名勝・史跡和歌の浦として県指定された文化財と共に、和歌の浦の名勝及び史跡の構成要素を特定する。

⑴玉津島山

玉津島山即ち和歌の浦が紀ノ川河口部であった頃、万葉集に詠まれ、章魚頭姿山（雑賀山）の東方に玉のように連なる玉津島山とは、船頭山、妙見山（城跡山）、雲蓋山、奠供山、鏡山、妹背山の六つの島である。現在は妹背山のみが島であるが、当時は、船頭山・妙見山辺りまでは成長期の砂浜により陸地となり、雲蓋山・奠供山・鏡山・妹背山の４つの小島は満潮時には完全に陸から分離して海中に点在していたと考えられる。六島の伽羅岩と呼ばれる岩山及び松は、平安時代以降の和歌の浦の重要な景観である。

①奠供山

奠供山は、玉津島神社の背後の山で、標高は38.1mである。神亀元年（724）10月８日に聖武天皇は、玉津島を訪れ、和歌の浦の景観に感動し、名称を変え、さらにこの地の景観を守るため守戸を置いた。

「山に登り海を望むに、此間最も好し。遠行を労せずして、遊覧するに足れり。故に弱浜（わかはま）の名を改めて、明光浦（あかのうら）とす。守戸を置きて荒穢せしむことなかるべし。春秋二時に、官人を差し遣して、玉津島の神、明光浦の霊を奠祭せしめよ」（『続日本紀』）

この山は、奠供山であろうと考えられている。

また天平神護元年（765）10月19日に、称徳天皇行幸の際に奠供山南麓の南浜の「望海楼」で雅楽・雑伎が奏でられた。玉津島神社蔵の慶應３年（1867）改刻の玉津島神社略記添付の「和歌浦玉出嶋社之圖」には山頂に拝所が描かれている。

夏目漱石の小説「行人」にも奠供山の記述がある。現在、山頂には、江戸時代の儒学者仁井田好古撰文碑「望海楼遺址碑」（和歌山市指定文化財）があり、和歌公園として整備されている。

②鏡山

鏡山は、標高19.9mで、南に輿の窟と呼ばれる塩竈神社、東には芦辺屋、朝日屋と呼ばれる茶屋跡がある。現在、和歌公園として管理運営され、和歌の浦の景観を構成する片男波や干潟と共に重要な構成要素である。

③雲蓋山

奠供山の北側に位置し、標高38.1mである。山麓には、明治期に移された雲蓋院が存在する。現在、和歌公園として管理運営されている。

④妙見山（城跡山）

雲蓋山の北側に位置し、標高31.1mである。雑賀衆の城跡があったとされる。また江戸時代には、初代紀州藩主徳川頼宣の母養珠院の菩提寺、養珠寺が建立され、頂上部には妹背山を守るために妙見堂が建てられた。現在も養珠寺、妙見堂は存在する。

養珠寺、妙見堂は、徳川頼宣によって整備された近世初期の和歌の浦の原風景をうかがい知ることができる。

⑤船頭山

妙見山の西北に位置し、玉津島山と呼ばれる六島の一つである。標高は、17.6mであ

る。

⑥妹背山

慶安元年（1648）４月17日、東照大権現の33回忌に家康の側室養珠院が、息子の紀州初代藩主徳川頼宣と共に父家康の冥福追善と日本中すべての人々のために『法華経』の「題目」（南無妙法蓮華経の七字）を小石に書写し、多宝塔の下の石室に埋納した。この経石埋納事業は、封建時代にあって上皇から在家の庶民にいたるまで階級を超えて多くの人々が参画したものであり、このような法事は、我が国の歴史上存在しない。

また、江戸時代、四季を通じて庶民に開放された観海閣は、台風により幾度となく破壊されたが、その度に再建されている。

県内では最古の石橋である三断橋や史跡和歌山城と同じ石垣など、父家康を祀った東照宮と共に母養珠院を祀った海禅院多宝塔が建つ妹背山は、今も島であり、万葉の頃の玉津島の原風景を今に残す。現在は、和歌公園として整備され、また多宝塔がある地区は海禅院が守っている。

⑵天神山

章魚頭姿山の東、天満宮の背後の山である。和歌公園として管理運営される。天満宮の背後を構成する重要な山である。

⑶権現山

章魚頭姿山の東、東照宮の背後の山である。和歌公園として管理運営される。東照宮の背後を構成する重要な山である。

⑷章魚頭姿山（雑賀山）

山の形がタコの頭に似たところからこのように呼ばれる。新吉野と呼ばれ、桜の名所としても知られる。頂上からは、和歌浦湾を初めとして和歌山市内が一望できる。晴天の日には遠く四国まで望むことが出来る。

章魚頭姿山西の雑賀崎、西南部岬端の断崖絶壁は、鷹の巣と呼ばれ、緑泥片岩からなる。緑泥質片岩はほかに四国・九州に分布しているが、壮大で勇壮な景観を形成しているものはめずらしく、県指定の天然記念物となっている。現在は、瀬戸内海国立公園である。海岸の洞窟は、信長に敗れた本願寺の教如が隠れた場所の伝説があり、「上人の窟」と呼ばれている。近世には、釣りの名所として有名であった。急な傾斜に段々と家々が連なる雑賀崎、田ノ浦集落は、漁村の文化的景観である。

章魚頭姿山は、和歌の浦を囲む西の骨格部分を占め、現在も緑豊かであり、重要な構成要素である。

⑸双子島他

章魚頭姿山の西の海上に位置する。大島、中ノ島と共に四島で構成され、瀬戸内海国立公園である。四島を雑賀崎先端部から見る夕日の景観は、絶景である。四島は、和歌の浦を囲む西端を占め、和歌の浦の重要な構成要素である。

①双子島

双子島は、二島で構成される。章魚頭姿山の先端部に位置する。

②大島

双子島の北側に位置する。

③中ノ島

中ノ島は大島の南に位置する。

⑹名草山

和歌の浦の東方に位置する。標高229mである。中腹には西国三十三番札所の紀三井寺がある。

名草山の山容は、穏やかであり、柔らかである。この山が満潮時、波静かな和歌の浦干潟の水面に影を落とす姿は絶景である。名草山を万葉人も、

名草山言にしありけり我が恋ふる千重の一重も慰めなくに　（万葉集巻六1213）

と詠んだ。

名草山は、和歌の浦干潟の東方に位置し、和歌の浦の景観を構成する重要な要素である。

⑺和歌川河口部の干潟

名勝和歌の浦の中心である干潟は、時代によりその景観は変化しているが、干潟の存在は万葉時代に遡ることができる。

神亀元年、聖武天皇は和歌の浦に行幸し、次のような詔を出している。

「山に登り海を望むに、此間最も好し。遠行を労せずして、遊覧するに足れり。故に弱浜（わかはま）の名を改めて、明光浦（あかのうら）とす。守戸を置きて荒穢せしむことなかるべし。春秋二時に、官人を差し遣して、玉津島の神、明光浦の霊を奠祭せしめよ」（『続日本紀』）

ここで明光浦と名付けられたところには、すでに干潟がよく発達していたと考えられる。この行幸に従駕した万葉歌人山部赤人が詠んだのは、まさしく干潟が大きく広がる和歌の浦の景観であった。

若の浦に潮満ちくれば潟を無み　芦辺を指して田鶴鳴き渡る（万葉集巻６・919番）

このときに歌に詠まれた干潟は、その後和歌の浦が紀ノ川の主流路の河口部ではなくなるなどのことから姿を変えてゆくことになるが、名所としての和歌の浦の景観の常に中心にあり、核となってきた。

このような和歌の浦の干潟では岩海苔（妹背海苔）の採取がおこなわれ、海苔養殖が行われた。最盛期には一面が海苔のいかだやひびで占められた。この海苔養殖も平成17年（2005）に廃業されることになったが、生き物の宝庫であることに変わりはなく、片手をふる蟹「シオマネキ」をはじめ、多くの希少種が生息している。これら多様な生物によって水は浄化され、自然環境は守られている。また、毎年春から初夏にかけての潮干狩りには大勢

の人が繰り出し、和歌の浦の風物となっている。

和歌の浦の干潟は、和歌の浦の景観の核であり、保全させるべき最も重要な構成要素である。

⑻片男波

片男波という名は、山部赤人の有名な万葉歌の「潟を無み（かたをなみ）」から取られたと言われる。天橋立や三保の松原と同じく海からの吹上の砂により形成された砂嘴である。奈良時代には、紀ノ川は和歌の浦を河口部として和歌浦湾に注いでおり、入江は、現在より山裾まで奥深く湾入し、小雑賀や中島付近まで河口州であった。雑賀山の東方に連なる玉津島山は、船頭山･妙見山辺りまでは成長期の砂浜によって陸地とつながったが、雲蓋山･奠供山･鏡山・妹背山の４つの小島は満潮時には完全に陸から分離して海中に点在していたと考えられる。その周囲は潮の干満によって姿を変える干潟や低湿地が広がっていた。また和歌の浦北部は吹上・高松から続く大きな砂堆（砂州・砂丘）と繋がっており、片男波の砂嘴も形成されつつあったと考えられるが、現在のように長く伸びた形状になるのは少なくとも中世以降のことである。近世以降は多くの絵画に、その特徴ある形状と白砂青松が、和歌の浦の景観の構成要素として描かれることになる。細長い砂嘴が形成されたことで後背湿地が形成され、静かな入江と荒い白波が打ち寄せる砂浜との対照が和歌の浦の景観として文人墨客の鑑賞眼を捉えることになるのである。現在は、和歌公園として管理運営されるため、人工的構築物も少なくないが、片男波の松林とその特徴のある形状に基づく景観は、干潟と共に和歌の浦の不可欠な構成要素になっている。

⑼御手洗池

和歌浦の風景は江戸時代から現在にかけて大きく変わっている。18世紀中頃の「紀州和歌山和歌浦之図」によると、東照宮のある雑賀山に並ぶ天神山と片男波との間には入江奥深く続き、また津屋川河口（妹背山の北側）も広い入江をなしており、和歌の浦は広大な内湾を形成している。この入江を正面に見る位置に天満宮は再建された。また和歌浦天満宮の象徴とも言うべき鳥居は、入り江の最も奥に造られていた。天満宮、東照宮が造られたのは、入江の最も奥の場所である。入江の大半が埋めたてられ宅地化し、市町川がその一部を残すのみであるが、御手洗池は和歌浦の原景観を知る上で重要である。現在、御手洗池公園として和歌山市によって管理活用されている。

⑽秋葉山

章魚頭姿山の北東に位置する。近世において、和歌の浦は高松の茶屋から始まり、和歌道沿道をさす。全長の『和歌浦物語』（1739）の坤冊には、近世和歌村にあった名所が詳しく述べられている。高松から和歌道沿道を経て和歌の浦に至る順路（高松茶屋－愛宕山－猊口石－御房山（御坊山）－矢の宮－亀遊巌－鶴立島－芦辺寺旧跡－宗祇が松－養珠寺－妙見堂）も丁寧に記されている。この中の御房山（御坊山）が秋葉山である。中世においては、紀州浄土真宗の道場、御坊が置かれたことにより、御坊山と呼ばれた。秋葉山は、和歌の浦の出発点である高松茶屋から和歌道を行く際の東側景観を占める。中腹には、寛政５年（1793）

に道仙なる者が創建したとされる秋葉権現社がある。近くには和歌山市指定文化財猊口石がある。現在は、和歌山市により秋葉山公園として管理運営されている。

秋葉山は、和歌道を挟んで章魚頭姿山と対面する位置にあり、和歌の浦の北東部景観保全の上で重要である。

⑾玉津島神社

神亀元年（724）に即位した若き23歳の聖武天皇は、和歌の浦に行幸する。そして、和歌の浦の景観に感動し、この地の風致を守るため守戸を置き、玉津嶋と明光浦の霊を祀ることを命じた詔を発する。これが玉津嶋の初見である。この時同行した万葉歌人山部赤人の詠んだ歌（万葉集⑥　919）「若の浦に潮満ち来れば　潟を無み　葦辺をさして　鶴鳴き渡る」はあまりにも有名である。当時は、島山があたかも玉のように海中に点在していたと思われる。玉津嶋神社の祭神は、稚日女（ワカヒルメ）尊、息長足姫尊（オキナガタラシヒメ）、衣通姫（ソトオリヒメ）とされるが、玉津嶋の神は和歌の神様として、住吉明神、北野天満宮（近世以降は柿本人麿）と並ぶ和歌三神の一柱として尊崇を受けることになる。平安中期の歌人として名高い藤原公任（996～1041）も玉津嶋に詣でている。中世には、歌道の名家である飛鳥井家の雅永が、嘉吉3年（1443）「多年の宿願を果さむために」玉津嶋に詣出ており、文明2年（1470）には蹴鞠の名手でもあった甥の雅親が玉津嶋に詣出ている。

聖武天皇の詔で玉津嶋と明光浦の霊が祀られるようになったわけであるが、その詳細は不明である。「玉津嶋山」が神の降臨する依代として、あるいは神そのものとして祀られていたとも考えられる。玉津嶋が描かれた絵画で現存する最古のものは、『慕帰絵詞　第7巻』（1351年、玉津嶋の部分は1482年に補写されたもの）にあるが、そこに描かれているのは、絵馬が吊り下げられた松である。15世紀に活躍した歌人東常縁（とうつねより）は、「玉津嶋には社一もなし。鳥居もなし。只満々たる海のはたに古松一本横はれり。是を玉津嶋の垂迹のしるしとするなり。然るを続拾遺の時、為氏卿洛中より御船を作らせて、玉津嶋に社壇を立つべき由被存て参詣有り。即ち彼の所に社壇を建てらるる、其の夜あらき波風立ちて、一夜の中に沙中に埋れりと云々。それより後は本の如くにして古松許りなり。」（「東野州聞書」）としている。

天正13年（1585）紀州を平定した秀吉は、早々に玉津嶋に詣でている。この後、紀州に入部した浅野幸長により社殿の再興が図られ、徳川頼宣により本社殿などの本格的な整備がなされた。寛文4年（1664）には、春秋二期の祭祀が復活している（藤本1991）。現在、境内には頼宣が承応4年（1655）に寄進した灯篭が残されている。近世に整備された玉津嶋神社は、和歌の浦の名所として巡礼をはじめ大勢の人々が詣でるところになり、現在に至っている。

⑿塩竈神社

結晶片岩の岩盤が露出した鏡山の南面に位置にする。岩肌は曝れた木理のような観を呈することから伽羅岩と呼ばれ、岩と松の組み合わさった風景が玉津島の原風景を今に伝える。祠は、海風により自然に浸食された洞窟である。祠の中には小さな拝殿が設けられている。元は玉津島神社の抜所で、興（こし）の岩屋（いわや）、と呼ばれた。

興(こし)の岩屋(いわや)と言われるのは、かつて浜降り神事の際に神輿が奉置される場所であったからである。浜降りとは、毎年9月16日に高野山の地主神である天野丹生都比売神社の神輿が、紀ノ川沿いにはるばる玉津島神社まで渡御し、翌日日前宮へと渡御してゆく神事をいい、神輿が玉津島神社で一晩奉置されるところが輿の窟であった。浜降り神事はその起源を古代まで遡ることができると考えられるが、鎌倉時代に一時中断された時期があり、文保2年（1318）に再開されたことが記録に残されている。その後戦国期に途絶え、近世には天野社の鳥居外から玉津島神社を遥拝するなどの神事になっている。ただ、この窟に対する信仰は、浜降り神事に限られたものではなく、江戸時代後期には、「しおかま」の名で信仰の対象になっていた。江戸時代に「一に権現、二に玉津島、三に下り松、四に塩竈よ」と歌われ、塩田の塩を焼く釜からこの名が付けられたという。また、古くから安産の神様として祀られてきたことが考えられる。慶長19年（1615）に描かれた名古屋城本丸御殿対面所次之間の障壁画には玉津島神社とこの窟も描き込まれるが、安産を祈願するものであろうか、この窟に船でお参りにやってきている一行が描かれている。現在も安産の守護として、人々に親しまれている。神社近くの小高い丘に、山部赤人の有名な歌碑が建っている。

塩竈神社及びその周辺の伽羅岩は玉津島の原風景を伝えるとともに、玉津島一帯の歴史的景観を形成する上で不可欠な構成要素である。

⒀天満宮

天満宮は和歌浦天神山（標高約93m）の中腹に位置し、菅原道真を祀り、和歌の浦一円の氏神として尊崇されている。現在、社地は急勾配の階段を登ったところに　楼門が建ち、東西廻廊がこれに接し、唐門に続く瑞垣の中に本殿が建つ。神社の創立は、『関南天満宮傳記』によれば、菅原道真が延喜元年（901）年太宰府に流されるとき、風雨をさけて和歌の浦へ立ち寄ったとされ、橘直幹（964～968）がこれを偲んで社殿を創建したと伝えられる。

豊臣秀吉の天正13年（1585）の兵火の後、桑山重晴や浅野幸長により再建された。浅野氏は、慶長9年（1604）～同11年（1606）にかけて天神山の中腹を開いて社地を造成し、本殿、唐門、拝殿、楼門、東西廻廊などを再建した。本殿奥や楼門前面の石垣は、この時造られたものである。再建された本殿、楼門など4棟が重要文化財である。本殿五間社の入母屋造りで、由緒と格式を誇る大社の造形であり、正面にそびえる楼門は1間1戸では最大級で、禅宗様を取り入れている。本殿、楼門棟の建築や彫刻には、江戸幕府御大工棟梁の平内政信が関わった。

⒁東照宮

東照宮は、和歌浦権現山に位置する。紀州初代藩主として入国した徳川頼宣により、東照大権現を祀る東照社として建立された。現在は頼宣も合祀されている。『紀伊続風土記』によれば、境内は方八町で、宮山周囲50町余りであった。

唐門、東西瑞垣(みずがき)、楼門、回廊と共に重要文化財である。また社蔵の鎌倉・南北朝時代の太刀13振、南蛮胴具足、小袖三領が重要文化財美術工芸品である。

東照宮の例祭は、趣向を凝らした絢爛豪華な風流の祭りとして創始されているが、江戸時

代には、国中第一の大祭であった。諸国から多数の見物人がきたという。明治以降も和歌祭と呼ばれて、大勢の観衆を集め、親しまれた。初代紀州藩主徳川頼宣が紀州東照宮に奉納した『東照宮縁起』（住吉如慶1646年）や家康50回忌の年に行われた和歌祭を描いた『和歌御祭礼図屏風』（1665年）には、東照宮から片男波の御旅所まで渡御する祭礼行列及び御旅所の様子が克明に描かれている。近年地元の有志により和歌祭は復興し、毎年行列が催されている。

⒂元御旅所跡（和歌公園　８の字公園）

御旅所とは、普段本社にある御神体が祭礼時に神輿に載せられて本社を出てゆき、また本社に戻るまで仮にとどまる場所である。和歌祭では御神体が奉移された神輿が片男波の御旅所まで渡御し、藩主臨席（藩主が参勤交代で在府の年は名代）の下で所定の法神事や城下の民衆による練物の芸能披露などが行われる間、仮屋に安置され、終ると再び本社に還御してゆくのである。近世期には毎年４月17日に御旅所への神輿の渡御と還御が行われることになっていた。

御旅所周辺には松が植えられて聖域として風致が保たれるとともに、近世中期以降は鳥居以外にも恒久的な建造物が建てられるようになっている。ただ、海浜部にあるため度々高波などの被害を受けたようで、そのために御旅所の地先には防波堤が造られており、『紀州和歌浦絵図』（1851以前）にはそれが描かれている。嘉永４年（1851）に治宝によって塩浜の東の一画に御旅所が移されて、この場所は元御旅所になるが、かつての防波堤（旧波止）の位置から現在の８の字公園であることが比定できる。現在は和歌公園として整備されている。

和歌の浦は東照宮が造営されることで、渡御行列（和歌祭）が挙行される祭礼空間としても整備されるが、元御旅所はその祭礼空間の構成を現在にも伝えるところとして東照宮と共に重要な場所である。

⒃芦辺屋跡、朝日屋跡

現和歌公園・鏡山公園地区には、藩政期、芦辺屋と朝日屋という茶屋があった。初代藩主頼宣は、父家康を東照大権現として祀る宗教的境域として和歌の浦を整備しているが、後にお万の方（承応３年（1854）没）を祀ることになる妹背山を整備するにつき、妹背山に渡る三断橋を架し、その西側橋詰に芦辺屋と朝日屋という二軒の茶屋を設けている。芦辺屋と朝日屋である。時期は、妹背山に観海閣が建立され、三断橋が架けられた慶安４年（1651年）頃と考えられる。

頼宣は、芦辺屋と朝日屋に暖簾を与え、式日にはこれが掛けられた。

芦辺屋と朝日屋の前は、和歌の浦と紀三井寺とを結ぶ渡し場であった。元禄２年（1689年）に和歌浦を訪れた貝原益軒もここから舟で紀三井寺へ渡ったと考えられるが、前年に和歌の浦の地を踏んだと思われる芭蕉も、紀三井寺と和歌の浦を結ぶこの渡しを使ったものと思われる。多くの巡礼や旅人がこの茶屋を利用したことであろう。ここから眺める和歌の浦の景観は、『和歌浦物語』（元文３年（1738））では、「東南遠望の景、云はん方無し」、また、『和歌名所記』（享和元年（1801））では、「誠に三国無双の勝地なるへし」、と絶賛されている。

天保４年（1833年）に十代藩主治宝の命により、二軒の茶屋の間に芭蕉の句碑が建立されている。

明治期には芦辺屋という料理旅館が営まれていたが、多くの文人墨客が宿泊し、逗留した。その中には南方熊楠がいる。熊楠は、明治34年（1901年）、ロンドンで知り合いになっていた孫文とここで再会している。現在は、風致公園として整備され、天保４年（1833）に建立された芭蕉の句碑が残されている。

玉津島山の一つである鏡山麓に造られた芦辺屋、朝日屋の跡地は、妹背山、三断橋と一体となって、紀州徳川氏によって整備された近世初期の和歌の浦の原風景をうかがい知ることのできる重要な和歌の浦の構成要素である。

⒄不老橋

和歌の浦の市町川に架かる不老橋は、東照宮御旅所の移築に際して紀州徳川家第十代藩主徳川治宝（架橋当時は十三代藩主徳川慶福の治世中）の命により嘉永３年（1850）に着手し、翌４年（1851）に完成したアーチ型の石橋である。この橋は、徳川家康を祀る東照宮の祭礼である和歌祭の際に藩主や徳川家の人々および東照宮関係者が、片男波松原にあった御旅所に向かうために通行する「お成り道」に架けられた橋であった。

江戸時代のアーチ型石橋は畿内周辺では極めて少なく、アーチ部分については肥後熊本の石工集団の施工であり、勾欄部分については湯浅の石工・石屋中兵衛の施工と推定されている。勾欄部分には、雲を文様化したレリーフがみられ、装飾的に優れたものとなっている。石材としては和泉砂岩を使用し、敷石およびアーチ部分の内輪内には規格化された直方体状の石材が使用される。

地震や台風による被害を受け、後世の補修もなされているが、架橋当時の姿を十分、うかがい知ることができる。

⒅金剛宝寺護国院（紀三井寺）

名草山の中腹に位置する。金剛宝寺護国院（紀三井寺）は、西国観音霊場三十三所第二番目の札所である。寺伝によれば、宝亀元年（770）、唐の僧為光がこの地を気に入り、創建したと伝えられる。多宝塔、鐘楼、楼門などは重要文化財である。

表１　構成要素一覧

	構成要素	名勝的価値	史跡的価値
⑴	玉津島山	玉津島山は、奠供山、鏡山、雲蓋山、妙見山、船頭山、妹背山の六島で構成される。	
①	奠供山	聖武天皇が登ったとされる山。伽羅岩と松が和歌の浦の原景観を今に伝える。	聖武天皇が登った山とされ、山頂には望海楼遺址碑が建つ由緒ある場所として重要。
②	鏡山	伽羅岩が和歌の浦の原景観を伝える。	南面には塩竈神社、東面には芦辺屋・朝日屋跡。
③	雲蓋山	玉津島山の一つ。	－
④	妙見山	玉津島山の一つ。	中世には雑賀衆の城があり、近世には、養珠院菩提寺の養珠寺、山頂には妙見堂が造られる。近世和歌の浦の景観を形作る重要な史跡。
⑤	船頭山	玉津島山の一つ。	－
⑥	妹背山	現在唯一島として存在しており、また伽羅岩と松も合わさり、万葉の頃の和歌の浦の景観を残す。	徳川頼宣の母お万の方を祀り、三断橋と共に近世和歌の浦の景観を形作る重要な史跡。
⑵	天神山	章魚頭姿山の東に連なる。	天満宮背後を構成する。
⑶	権現山	章魚頭姿山の東に連なる。	東照宮背後を構成する。
⑷	章魚頭姿山	和歌の浦の西部分の重要な景観。	－
⑸	双子島他	和歌の浦の西端部分を占める。	－
①	双子島	和歌の浦の西端部分。	－
②	大島	和歌の浦の西端部分。	－
③	中ノ島	和歌の浦の西端部分。	－
⑹	名草山	和歌の浦干潟前面に位置し、風致景観上重要。	中腹には、奈良時代の創建とされる紀三井寺がある。
⑺	和歌の浦河口部の干潟	万葉集に詠まれた場所。干潟がひろがり、潮の干満で変わる景観は、和歌の浦の景観の核。	－
⑻	片男波	万葉集に詠まれた場所。特徴のある細長い砂嘴と白砂青松が特徴。	－
⑼	御手洗池	天満宮、東照宮前面の入江の景観を残す。	－
⑽	秋葉山	和歌の浦を取り囲む部分。	中世に浄土真宗の道場、御坊が置かれた地で史跡として重要。

	構成要素	名勝的価値	史跡的価値
⑾	玉津島神社	−	聖武天皇の詔で、玉津嶋と明光浦の霊を祀ることが命じられるが、それが玉津嶋の初見。玉津嶋の神は和歌三神の一つ。14世紀の慕帰絵には、玉津島神社として絵馬が描かれている。近世に社殿が再建された。和歌の浦景観の核ともいえ、史跡として重要。
⑿	塩竈神社	−	鏡山南面に位置する。元玉津島神社の抜所で、輿の窟と呼ばれた。玉津島一帯の歴史的景観を形成する重要な史跡。
⒀	天満宮	−	橘直幹が創建したとされる。再建された本殿、楼門など4棟が重要文化財。近世和歌の浦を形作る重要な史跡。
⒁	東照宮	−	紀州初代藩主徳川頼宣により造られ、東照宮大権現を祀る。境内は方八町で、宮山周囲50町余りといわれる。権現造りの社殿や唐門などが重要文化財である。近世和歌の浦の景観を知る上で重要。
⒂	元御旅所跡	−	渡御行列が挙行された空間として東照宮と共に史跡として重要。
⒃	芦辺屋跡、朝日屋跡地	−	妹背山整備の際に設けられた二軒の茶屋跡。芭蕉の句碑が建つ。近世和歌の浦の景観を形作る重要な史跡。
⒄	不老橋	−	御旅所へ行くための御成道として、徳川治宝により造られたアーチ型の石橋。近世和歌の浦の景観を形作る重要な建造物であり、周辺部の景観と共に史跡として重要。
⒅	金剛宝寺護国院（紀三井寺）	−	奈良時代の創建と伝えられる。多宝塔、楼門、鐘楼は、重要文化財であり、境内は史跡として重要。

3. 名勝としての価値

和歌の浦の名勝としての価値はどこにあるのか。和歌の浦の範囲は、緑豊かな緑地帯である山並みに囲まれる。和歌の浦の西方には、双子島、大島、中ノ島、雑賀崎から章魚頭姿山、東方には、なだらかな山容の名草山、南方には、手前に毛見崎、更に南には幾十にも連なる長峰山脈が水平線上に連なる。青い空のもと、この緑の大パノラマ空間に囲まれた中に、海、川、水面、砂嘴がある。標高50m前後の六つの島々、玉津島山が適度な間隔で玉を連ねたかのように並び、名草山の山容が水面に静かに影を落とす。片男波の砂嘴の外側には、大海原から打ち寄せる波、干潟は、潮の満ち引きによって生命の循環を示すかのように姿を変える。その水辺の風景は、静寂感と力動感に満ちている。空、海、波、干潟、音は動的に躍動して景観を変え、一瞬たりとも同じではない。

和歌の浦の景観美とは、青い空のもと緑の山並みに囲まれた海、片男波の砂嘴、干潟の潮の干満による姿の変化、白い砂浜と清らかな岩礁である。これら自然が造りあげた空間が調和して、古来より、自然的名勝として和歌の浦は、高い評価を受けてきた。

和歌の浦の名勝としての範囲は、玉津島山である奠供山、妹背山などの六つの島々と更にそれに連なる権現山、天神山、章魚頭姿山、大島、中ノ島、双子島、秋葉山、万葉歌に詠まれた名草山、和歌川河口部水面、外を海、内を干潟に区分する片男波の砂州、入江の面影を残す御手洗池など、島・山・水面などにより構成される大きな広がりをもつ自然的名勝の空間である（図９）。

以上のような名勝としての和歌の浦は、全体として一つのまとまりのある歌枕－名所として今日に至っているが、幾つかの特徴のある部分からも把握することができる。

名勝１群（和歌の浦干潟・玉津島区）は、和歌の浦干潟を中心に片男波、玉津島山と呼ばれる六つの島々で構成される空間である。妹背山、鏡山、奠供山は、和歌の浦干潟を見下ろす位置にある。妹背山、鏡山、奠供山の岩肌は、伽羅岩と呼ばれ、岩と松が組み合わさった景観を作り出す。

名勝２群（天神山・権現山区）は、入江の最深部を占める空間である。入江の痕跡を留める御手洗池と共に天神山、権現山がある。現在は名勝１の範囲と独立した様相を呈するが、江戸時代までは入江として和歌の浦干潟を構成する空間であった。入江は埋めたてられ、現在市街地となっている。市町川やその対岸に位置した元御旅所跡（和歌公園の８の字公園）の砂州部分に入江の痕跡を見ることが出来る。

名勝３群（名草山区）は、和歌の浦干潟東方に位置する名草山である。名草山は、和歌の浦干潟の水面と共に和歌の浦の風致景観を構成する重要な要素である。

名勝４群（雑賀山・秋葉山区）は、和歌の浦の大きなパノラマ空間、和歌の浦の緑豊かな緑地帯を占める大島、中ノ島、双子島から章魚頭姿山、天神山、権現山に至る範囲、また和歌の浦の北部を占める秋葉山の範囲である。名勝和歌の浦の北部を囲む緑豊かな景観の範囲である。

４つの範囲は、南方に位置する長峰山脈や毛見崎に囲まれ、相互に影響し合い高い風致景

観を構成する。

以上の４つの区域は、南方に位置する長峰山脈や毛見崎に囲まれ、相互に影響し合い高い風致景観を構成しており、名勝和歌の浦の本質的価値はこれらがそれぞれに特色を失うことなくしかも不可分な全体性をもって存在しているところにある。

4. 史跡としての価値

自然的名勝の中に各時代に構築された社寺仏閣が史跡を構成する。玉津島神社、天満宮、塩竈神社、また江戸時代の東照宮、妹背山海禅院・観海閣・三断橋、元御旅所跡（和歌公園　８の字公園）、養珠寺、妙見堂、不老橋などの人文的な要素である建造物群により構成される空間である（図10）。

歌枕－名所としての和歌の浦のなかに各時代に作り出された史跡は、不可分な全体性をもって存在している。特色のある範囲は、３つのまとまりとして把握することができる。

史跡Ａ群（玉津島・妹背山区）は、古代、玉津島山と呼ばれる六つの島々と歌道の聖地としての玉津島神社を中心とする範囲である。入江の入口に位置する玉津島神社は、玉津島山である奠供山と鏡山の間に存在する。古来、玉津島山が神の降臨する依代として、あるいは神そのものとして祀られていたとも考えられている土地で、その場所に玉津島神社は位置する。塩竈神社は、鏡山の南に位置し、玉津島神社の元抜所で、輿の窟とも呼ばれた。近世には芦辺屋、朝日屋があり、妹背山と結ぶ三断橋が設置され、妹背山に観海閣が造られ、和歌の浦の景観を楽しむ場所となった。また妙見山の麓には、養珠院の菩提寺である養珠寺があり、山頂には妙見堂が造られる。和歌の浦干潟を望む位置に築かれた不老橋も造られる。

史跡Ｂ群（天満宮・東照宮区）は、天満宮及び東照宮を中心とする入江の最深部の範囲である。入江の痕跡を残す御手洗池を前面に天神山、権現山を背後に持つ位置に天満宮、東照宮は造られる。東照宮と不可分な関係にある元御旅所跡（和歌公園　８の字公園）も存在する。

史跡Ｃ群（紀三井寺区）は、名草山中腹に建てられた紀三井寺である。

名勝和歌の浦の内に成立しているこれら三つ史跡は、名勝の場合と同じく、それぞれに特色を失うことなく、しかも相互に響き合う不可分な全体性として存在していることを本質的特徴としている。

5. 名勝及び史跡としての価値

和歌の浦は、古代以降現代に至るまで万葉集に詠まれた景勝地である。歌枕の地として、各時代に高い評価を受けてきた。近世以降には、人文的な要素が大きく加わった。

平安時代、紀ノ川の流れが現在の水軒川に変わったことにより、和歌の浦には、砂嘴が発達し、干潟の空間も残された。和歌の浦干潟は、現在も往時の姿を留めている。近世以降、和歌の浦は徳川家が景勝地として手厚い保護をし、近代以降は、和歌山県が和歌公園として指定し、管理・運営し、更に瀬戸内海国立公園として守られてきたことにより、主要な骨格

となる景観は維持され、保全されている。また天満宮、紀三井寺、玉津島神社、塩竈神社、東照宮、妹背山など社寺仏閣も良好な状態で保存されている。和歌山市の都市化が進み市街地となったことにより、現在多少の改変は受けているが、往時の名勝としての和歌の浦の景観は、今も存在する。

現在は住民が住む市街地でもあるが、古代から現代に至るまで重層した時間の中に和歌の浦は存在する。それ故、個別の名勝及び史跡の構成要素は、一定のまとまり、範囲を示す。そして、名勝と史跡とが全体として一体的に存在し、またそれぞれに特色のある区域としても一体的なものとして把握することができる。このようなことから、和歌の浦は、全体として一体性のある名勝及び史跡として存在し、更に次のような四つの特色のある区域をも見出すことができるものになっている（図12）。

第Ⅰ区は、「名勝１群（和歌の浦干潟・玉津島区）」、「史跡Ａ群（玉津島・妹背山区）」が一体的に存立している区域で、自然的名勝の価値を持つ古来万葉集に詠まれた和歌の浦干潟、片男波、玉津島山を中心とした範囲である。玉津島山、更に奠供山の麓に造られた和歌の神を祀る玉津島神社、輿の窟と呼ばれる塩竈神社、江戸時代に造られた妹背山多宝塔、観海閣や三断橋などの構成要素を持つ。聖武天皇が山に登って眺望したとされる奠供山や徳川頼宣が造った妹背山観海閣を眺望地点として、和歌の浦干潟を望む範囲で、現在最も和歌の浦の原景観を残す（図13・写真４）。

第Ⅱ区は、「名勝２群（天神山・権現山区）」、「史跡Ｂ群（天満宮・東照宮区）」が重層するかつての入江の最深部で、前面には、入江の最深部の痕跡を残す御手洗池、天満宮の後には天神山、東照宮の背後には権現山が位置し、元御旅所（和歌公園　８の字公園）の範囲である（図14・写真６）。

第Ⅲ区は、「名勝３群（名草山区）」、「史跡Ｃ群（紀三井寺区）」の和歌の浦干潟の東に位置する名草山の範囲である。名草山は、和歌の浦干潟の水面と共に和歌の浦の風致景観を構成する重要な要素である（写真５・７・８）。

第Ⅳ区は、「名勝４群（雑賀山・秋葉山区）」の章魚頭姿山、雑賀崎、秋葉山など和歌の浦の緑豊かな景観を占める自然的名勝の範囲である。名勝和歌の浦のパノラマ的大景観を構成する不可欠な要素になっている（図15・写真９）。

以上のごとく和歌の浦には、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳ区というそれぞれに特色がある区域があるが、同時に全体として名勝の本質的な価値を構成する枢要の諸要素の内、自然的名勝に該当する。また、第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区は、史跡の本質的な価値を構成する枢要の諸要素の内、歴史的な建造物、及び「土地に関連する史料又は伝承その他によって証明される場合には、その土地の地形等の諸要素」（文化庁2005）に該当する。

これらで構成される名勝及び史跡和歌の浦は、文部省告示の

国指定『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』

「名勝

左に掲げるもののうち我が国の歴史の優れた国土美として欠くことができないものであって、その自然的なものにおいては、風致景観の優秀なもの、名所的あるいは学術的価値の高いもの、また人文的なものにおいては、芸術的あるいは学術的価値の高いもの」のうち、

八．砂丘、砂嘴、海浜、島嶼

十一．眺望地点

に該当する。また同基準のうち、

「史跡

左に掲げるもののうち我が国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、かつ、その遺跡の規模、遺構、出土遺物等において、学術上価値のあるもの」のうち、

三．社寺の跡又は旧境内その他祭祀施設に関する遺跡

八．旧宅、園池その他特に由緒のある地域

に該当する。

また、平成17年5月の文化庁文化財部記念物課による

『当面重点をおいて指定する記念物について』

「名勝

我が国の国土美として欠くことのできないものであって、芸術的、名所的あるいは学術的価値の高いものを以下の観点から選定する」とするうち、

4．古来詩歌に詠まれるなど由緒ある山、川、海岸、眺望地点などの観点から、風土や時代を反映しているものを選定していく。

に該当する。

和歌の浦の名勝及び史跡としての本質的価値を構成する二つの要素は、不可分に関連し、全体として相互に影響しあって調和ある価値の高い風致景観を形成する。

6. 指定の進め方

古代から現代に至るまで、和歌の浦は、景勝地として重層した時間の中に全体として一体性のある名勝及び史跡として存在し、更に四つの特色のある区域をも見出すことができた。

今後、和歌山県教育委員会は、第１段階から第３段階に区分して、第Ⅰ区から第Ⅳ区の国指定を目指す。

第１段階は、第Ⅰ区「名勝１群（和歌の浦干潟・玉津島区）」・「史跡Ａ群（玉津島・妹背山区）」の範囲である。自然的名勝である古来万葉集に詠まれた和歌の浦干潟、片男波、玉津島山を中心とし、更に奠供山の麓に造られた玉津島神社、輿の窟と呼ばれる塩竈神社、江戸時代に造られた妹背山多宝塔、観海閣や三断橋、不老橋などの構成要素を持つ。聖武天皇が

山に登って眺望したとされる奠供山や徳川頼宣が造った妹背山観海閣、徳川治宝が造った不老橋を眺望地点として、和歌の浦干潟を望む範囲で、現在最も和歌の浦の原景観を残す範囲である（図13・写真４）。

第２段階は、第Ⅱ区「名勝２群（天神山・権現山区）」、「史跡Ｂ群（天満宮・東照宮区）」で、入江の最深部に位置する天満宮と東照宮を中心とし、権現山、天神山、更に入江の痕跡である御手洗池などの範囲である（図14・写真６）。

第Ⅰ区及び第Ⅱ区は、名勝和歌の浦としての価値が高く、万葉景観を今に残す部分であるため、早急な国指定を目指すことが必要である。

第３段階で意見具申を目指す第Ⅲ区「名勝３群（名草山区）」、「史跡Ｃ群（紀三井寺区）」と第Ⅳ区「名勝４群（雑賀山･秋葉山区）」は、和歌浦干潟と共に重要な和歌の浦の構成要素である名草山など緑豊かな名勝和歌の浦のパノラマ的大景観を構成する範囲であり、第１、２段階の国指定後に様々な問題を解決しながら意見具申を行うべく進めていきたいと考えている。

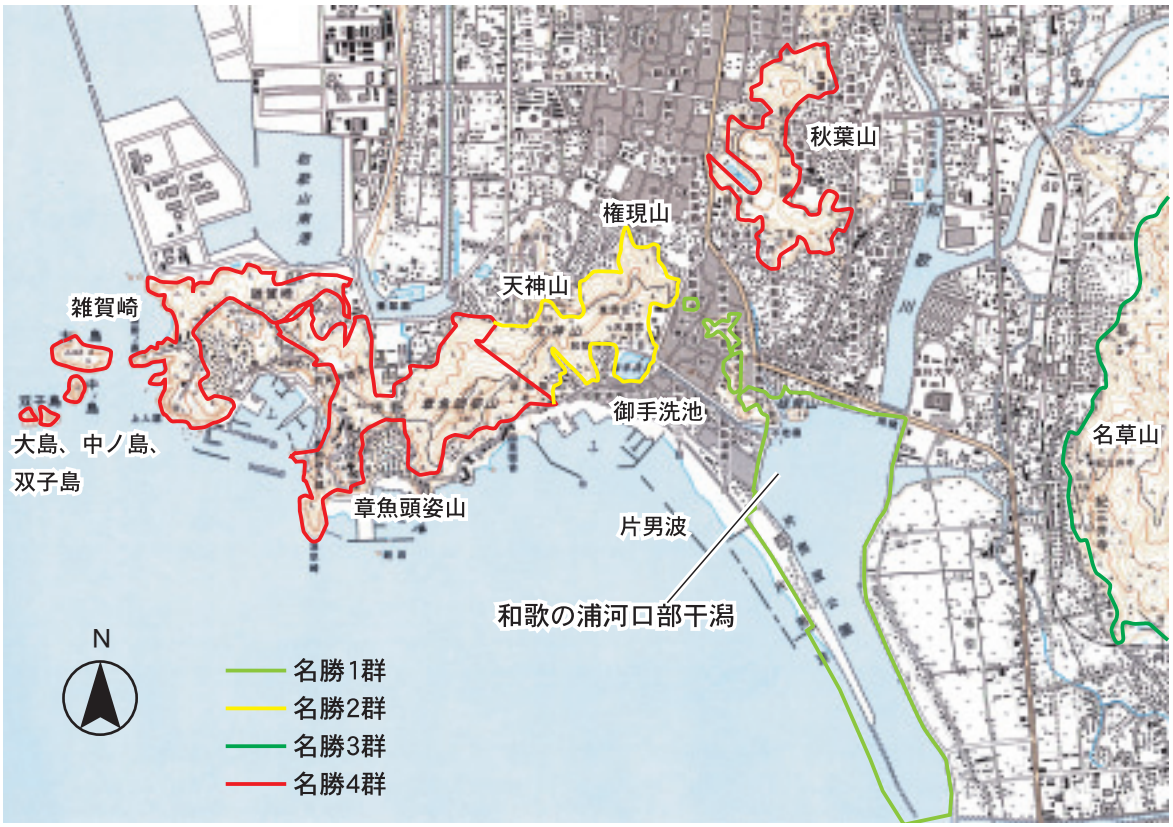


図10　自然的名勝の範囲

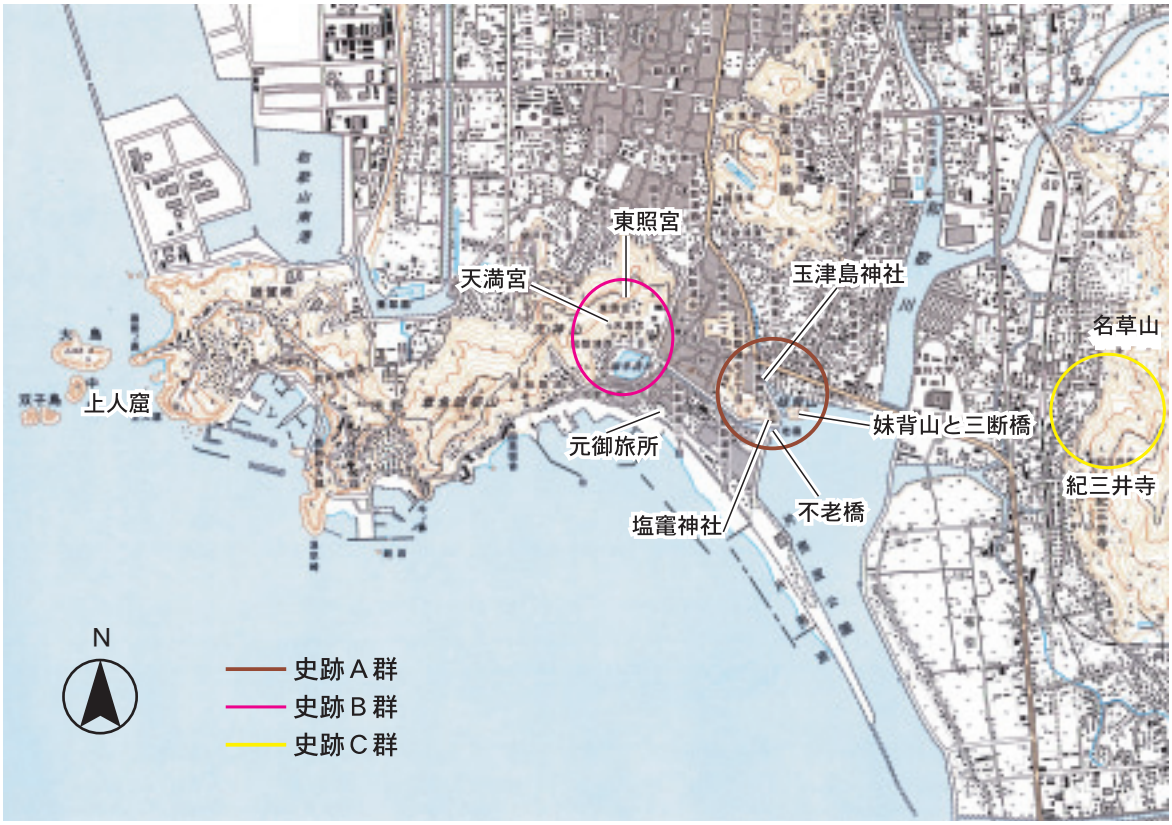


図11　史跡の位置

表２　区分一覧表

区分	構成要素	価値の概要	該当指定基準	名勝及び史跡の価値
第Ⅰ区	和歌の浦干潟、片男波、玉津島神社、塩竈神社、妹背山と三断橋、芦辺屋･朝日屋跡地、不老橋、奠供山、鏡山、雲蓋山、妙見山、船頭山、	聖武天皇が登ったとされる奠供山や徳川頼宣が造った観海閣を眺望地点として、万葉集に詠われた和歌の浦干潟、片男波を望む範囲である。入江の入り口部分に社寺は集中する。名所的あるいは学術的価値の高い範囲であり、和歌の浦景観の核的部分である。	『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』の「名勝の八、十一」「史跡の三、八」	名勝１群（和歌の浦干潟・玉津島区） 史跡A群（玉津島・妹背山区）
第Ⅱ区	天神山、権現山、天満宮、東照宮、御手洗池、８の字公園（元御旅所）	入江の最深部に造られた天満宮と東照宮を中心とする範囲で、江戸時代に造られた建物は重要文化財であり、近世の和歌の浦景観を形作る。	『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』の「史跡の三、八」	名勝２群（天神山・権現山区） 史跡B群（天満宮・東照宮区）
第Ⅲ区	名草山、紀三井寺	万葉集に詠われた名草山は、和歌の浦干潟水面と共に重要な風致景観を構成する。	『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』の「名勝の八、十一」「史跡の三、八」	名勝３群（名草山区） 史跡C群（紀三井寺区）
第Ⅳ区	章魚頭姿山、双子島、大島、中ノ島、秋葉山	章魚頭姿山など和歌の浦景観の骨格を構成する。	『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』の「名勝の八、十一」	名勝４群（雑賀山・秋葉山区）

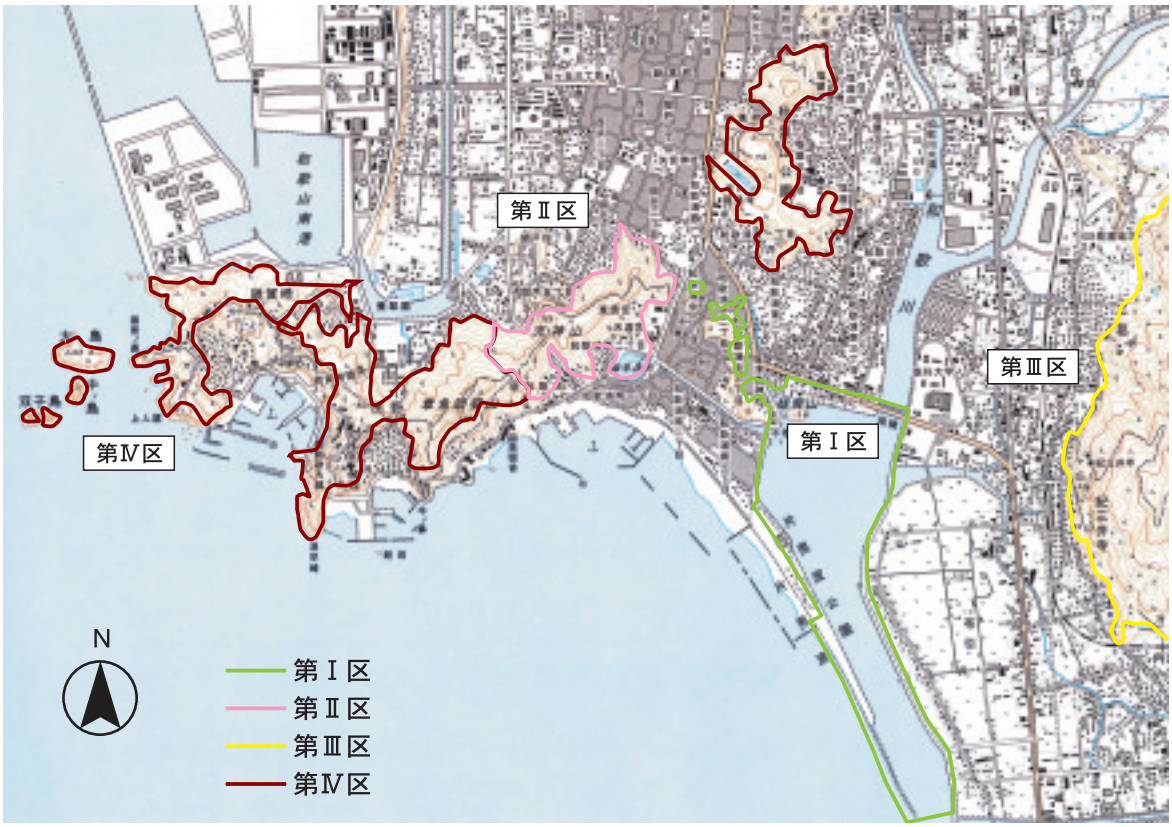


図12　和歌の浦全体図

写真３　章魚頭姿山から見る玉津島山

1－⑤船頭山
1－④妙見山、養珠寺、妙見堂
1－③雲蓋山
16 芦辺屋跡・朝日屋跡
1－②鏡山
11 玉津島神社
1－①奠供山
1－⑥妹背山
17 不老橋
12 塩竈神社
7 和歌の浦干潟
8 片男波
第Ⅰ区

図13　第Ⅰ区

写真４　第Ⅰ区

写真５　章魚頭姿山から見る名草山、片男波

図14　第Ⅱ区

写真６　第Ⅱ区

写真７　第Ⅰ区、第Ⅲ区

写真８　第Ⅲ区　名草山

写真９　第Ⅳ区　章魚頭姿山

図15　第Ⅳ区

参考文献　引用文献

第４章　名勝・史跡和歌の浦

第１節　古代

日下雅義　2001 「紀ノ川の河口と海岸地形の変化」『和歌山市史』第１巻

栄原永遠男　1993 「和歌の浦と古代紀伊」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

村瀬憲夫　1993 『万葉　和歌の浦』求龍堂

寺西貞弘　1993 「和歌浦をめぐる行幸とその景観美」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

村瀬憲夫　1993 「平安文学の和歌の浦」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

村瀬憲夫　2002 『万葉びとのまなざし―万葉歌に景観をよむ―』塙書房

直木孝次郎　1991 「万葉景貴族と玉津嶋・和歌の浦」『東アジアの古代文化』

薗田香融・藤本清二郎　1991 『歴史的景観としての和歌の浦』

小山靖憲　1993 「中世の参詣記にみる和歌浦」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

三木雅博　2008 「平安前期宮廷文学と和歌の浦　吹上の登場をめぐって」

廣岡義隆　1993 「赤人の若の浦賛歌」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

第２節　中世

薗田香融・藤本清二郎　1991 『歴史的景観としての和歌の浦』

小松茂美編集　1990 「慕帰絵詞」『続日本の絵巻』９　中央公論社

海津一朗　2003 「文明十一年　飛鳥井殿下下向之儀式―惣国の風景―」『地方史研究』46

米田頼司　2007 「和歌浦と和歌浦天満宮」『紀州経済史文化史研究所紀要』28

第３節　近世

高市志友・加納諸平編　1811～1937 『紀伊国名所図会』

仁井田好古　1839 『紀伊続風土記』

平凡社　1983 『和歌山県の地名』

米田頼司　2009 「和歌浦と綱敷天神」『和歌浦天満宮の世界』清文堂出版

鳴海祥博　2009 「和歌浦天満宮の建築」)『和歌浦天満宮の世界』清文堂出版

米田頼司　2009 「名古屋城障壁画に描かれた和歌浦天満宮とその社頭」『和歌浦天満宮の世界』清文堂出版

高松良幸　2005年 「名古屋城本丸御殿対面所障壁画『風俗図』に関する一考察－その政治表象性を中心に－」『美術史』158号　356～372頁

藤本清二郎　2009 「近世屏風絵に見る天満宮」『和歌浦天満宮の世界』清文堂出版

薗田香融　1997 「海禅院多宝塔と日護上人」『和歌山地方史研究』31・32

菅原正明　2002 「経石に込められた夢　妹背山多宝塔の建立」『久遠の祈り　紀伊国神々の考古学』

藤本清二郎　1989 「近世和歌の浦の歴史景観」『和歌山地方史研究』17

高橋克伸「絵画にみる近世和歌浦の景観変遷」『和歌山地方史研究』17

高橋修　1990 「紀州東照宮の創建と和歌浦」『紀州東照宮の歴史』

高橋克伸　1990 「輿洗岩と不老橋の修理」『和歌山地方史研究』19

藤本清二郎　1993 「紀州徳川家と和歌の浦」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

鶴崎裕雄　1993 「中世文学の和歌浦」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

柏原卓　1993 「近世和歌浦の名所の文学と言葉」『和歌の浦　歴史と文学』薗田香融監修

村瀬憲夫　1993 『万葉和歌の浦』求龍堂

藤本清二郎　1993 『和歌浦百景』東方出版
柏原卓編　1996 『和歌浦物語』 和泉出版
村瀬憲夫　2002 『万葉人のまなざしー万葉歌に景観を詠むー』塙出版
和歌山市博物館　2005 『和歌浦（わかのうら）その景とうつりかわり』
高松良幸　2005 「描かれた和歌浦」『和歌浦（わかのうら）その景とうつりかわり』和歌山市立博物館
須山高明　2008 『平成20年度和歌山県文書館歴史講座「和歌浦名所」を読み歩く。』
藤本清二郎　2009 「和歌浦天満宮の成り立ち」『和歌浦天満宮の世界』清文堂出版
鳴海祥博　2009 「和歌浦天満宮の建築」『和歌浦天満宮の世界』清文堂出版
米田頼司　2009 「和歌浦と綱敷天神」『和歌浦天満宮の世界』清文堂出版
米田頼司　2009 「名古屋城障壁画に描かれた和歌浦天満宮とその社頭」『和歌浦天満宮の世界』清文堂
米田頼司『和歌祭の社会誌―風流の祭典―』
菅原正明　2005～ 『妹背山経石通信』」http://imosefutatabi.net/col4/col4.cgi
和歌の浦景観訴訟の裁判記録刊行会　1996 『よみがえれ和歌の浦』東方出版
雲蓋文書（文政８年（1825）
雲蓋院文書（寛文九年）
貝原益軒　1911 「南紀紀行」『益軒全集』第七集　益軒会編纂
菅沼逸『岸和田紀行』
『友が島紀行　附和泉の紀行』
自芳尼「西国巡拝名所記」安政元（1854）年
『和歌浦物語』
『松の葉　元禄十六年』（1703）
大岡普斎著述、橘守国画『画典通考』
崎山楠右衛門直頤著「和歌名所記」 1993　石川謙編『地理科往来』大空社
『和歌浦名所記』文政４年（1821）鶴屋嘉右衛門板（原版：享和元年（1801））
『西国三十三ヵ所独案内帳』（享保８年頃）
『西国三十三所方角絵図』（野田知義作　三番粉川寺大門前魚手屋清左衛門板元）
田中正大　1992 「ランドスケープニュース　和歌の浦景観保全訴訟の証人に立って」『造園雑誌』５（３）221～222ページ
田中正大　1996 「開かれた庭園」『よみがえれ和歌の浦』和歌の浦景観訴訟の裁判記録刊行会　東方出版
児玉荘左衛門　1967 『紀南郷導記』楠本慎平編　紀南文化財研究会
菅沼逸　1931 「岸和田紀行」前田淑編『近世女人の旅日記集』葦書房

第４節　近・現代

和歌山県内務部土木課編　1916 『和歌浦海岸災害復旧誌』
藤本清二郎　1990 「江戸・明治前期、和歌の浦の社会史々料－景観保全・水産業両立化への歩み－」『和歌山大学紀州経済史・文化史研究所紀要』10号　135～229頁　所収
高嶋雅明　1989 「近代の開発と和歌浦」『和歌山地方史研究』17、後に1993 「近代の和歌浦」薗田香融監修『和歌の浦　歴史と文学』に改稿
高嶋雅明　1991 「和歌浦開発と和歌浦土地株式会社」『紀州経済史文化史研究所紀要』10号
前田頼嗣　1991 「和歌浦における環境問題と地域社会」『紀州経済史文化史研究所紀要』10号

重松正史　2001 『大正デモクラシーの研究』清文堂
薗田香融・藤本清二郎　1991 『歴史的景観としての和歌の浦』

第５節　名勝及び史跡としての価値

藤本清二郎　1991 「近世玉津島社をめぐる紀州徳川藩と朝廷」『紀州経済史文化史研究所紀要』11号
田中正大　1996 「開かれた庭園」『よみがえれ和歌の浦』和歌の浦景観訴訟の裁判記録刊行会　東方出版
文化庁　2005 『史跡等整備のためのてびき』Ⅰ　総説編・資料編　63ページ

和歌の浦年表

和歌の浦年表

年号	西暦	事　　項
安閑２年	535	５月諸国に屯倉を設置。紀伊国には、経湍（ふせ）、河辺屯倉を置く。
欽明17年	556	10月大臣蘇我稲目（そのがいなめ）を派遣し、紀伊国海部屯倉等を設置。
敏達10月	583	日羅を迎えるために紀国造押勝らを百済に派遣。
推古３年	593	聖徳太子、推古天皇の摂政となる。
大化元年	645	大化の改新。この頃、国郡制を施行。
斉明３年	657	９月有馬皇子（幸徳天皇皇子）、牟婁温泉で療病。
斉明４年	658	10月、斉明天皇、牟婁温泉に行幸。翌月、有馬皇子の変起きる。皇子を捕らえて牟婁温泉に送り、帰途藤白坂で誅す。
持統４年	690	９月、持統天皇、紀伊国へ行幸（牟婁温泉か）。
大宝元年	701	10月、聖武天皇の父、文武天皇と持統天皇、紀伊国に行幸。この時、武漏温泉（湯崎温泉か）に行幸する際、和歌の浦に寄った可能性あり。
和銅3年	710	平城京に遷都。
神亀元年	724	10月、聖武天皇、紀伊国玉津島に行幸。この時、山部赤人「若の浦」の歌を作る。
天平神護	765	10月、称徳天皇、紀伊国玉津島に行幸。望海楼に御す。「続日本紀」。 桓武天皇の父、白壁王（のち光仁天皇）を同行。
宝亀元年	770	紀三井寺を開く。
延暦13年	794	桓武天皇、平安京へ遷都。
延暦23年	804	10月、桓武天皇、紀伊国玉津島に行幸。船遊びを楽しむ。
元慶５年	881	10月、紀伊国玉津島神に従五位下の位を授ける。
元和３年	887	９月13日、光孝天皇、右大臣源隆行を遣わして、玉津島の社殿を造立したという。
寛平年間	889～898	宇多天皇の主催で「寛平菊合」の歌会が催され、菅原道真が「吹上の浜菊」の歌を詠む。歌題に設定された十カ所の名所のうち、一カ所が紀伊国吹上浜。和歌浦の景観と共に吹上浜の景勝が取り上げられる。
	900前後	紀貫之、紀州へ下向（貫之集）
延喜元年	901	右大臣菅原道真、太宰権師に左遷。
延喜６年	906	２月、紀伊国玉津島明神に従五位上の位を授ける。
延喜13年	913	「古今和歌集成立」（一説、905年）
康保年間	964～968	橘直幹、天満宮社殿建立。
天禄～長徳年間	970～999	「宇津保物語」成立。吹上巻、紀伊国、吹上浜を舞台に物語が展開。
寛弘６年 ～長和３年	1009～1014	藤原公任（966～1041）、子息定頼を伴って粉河寺参詣の次、和歌の浦・吹上浜を遊覧。「前大納言公任集」に和歌の浦探訪が記録。船に乗った記録がないことから、妹背山を除いて、吹上の浜から一続きの陸地。これに伴い、玉津島の北側の海面が「玉津島の入江」として意識される。また松の生育。 この頃、津守国基（1023～1102）の家集に、玉津島の神を衣通姫と記す。
長和５年	1016	藤原道長、摂政となる。

年号	西暦	事　　項
永承３年	1048	10月、関白藤原頼通（990～1074）、高野参詣の次、和歌の浦・吹上浜を遊覧「宇治関白高野山御参詣記」。和歌の浦の初見。
応徳３年	1086	後白河上皇、院政を始める。
天仁２年	1109	11月、権中納言藤原宗忠（1062～1141）、熊野参詣の次、和歌の浦･吹上浜を遊覧。日記「中右記」に記す。「岩色々　松樹処々　地形幽趣にして風流勝絶せり」。
康治３年	1144	２月、前関白藤原忠実、高野参詣の次、和歌の浦・吹上浜を遊覧。「台記」。
久安４年	1148	３月、内大臣藤原頼長、高野参詣の次、和歌の浦・吹上浜を遊覧。
文治２年	1186	藤原俊成、玉津島神を京に勧請し、新（いま）玉津島神社創建。
建久３年	1192	源義朝、鎌倉幕府を開く。
建永２年	1207	４月、最勝四天王院障子和歌に「若浦」「吹上浜」各10首が選ばれる。
弘長３年	1263	３月、藤原為家（1197～1275）、一門を率いて玉津島に参詣し同社社頭において「玉津島歌合」を興行。阿仏尼、為氏、為教、為顕、源承など参加。「玉津島社歌会」。
弘安元年	1278	12月、「続拾遺和歌集」成る。選者、為家の子二条為氏（1222～1286）、玉津島社を創建したという。
乾元元年	1302	芦辺寺、讃州から和歌の浦へ移転
延慶～政和年間	1308～1317	本願寺覚如（1270～1351）、和歌の浦に遊び、玉津島社に法楽歌10首を奉納。「慕帰絵詞」によれば、社殿なし。
文保２年	1318	この頃、毎年６月16日に丹生明神の神輿、玉津島へ神幸したが、この年日前宮と座次争う。
元応元年	1319	９月、二条為世（1250～1338）、一門を率いて玉津島社へ参詣。
建武元年	1333	後醍醐天皇、京都で新政を行う。
延元元年	1338	足利尊氏、鎌倉幕府を開く。
貞治６年	1367	３月、将軍足利義詮、京都烏丸五条に新玉津島社を勧請し、「新玉津島社歌会」を興行. 頓阿（1289～1372）、実質的にお膳立て。 二条派の和歌浦憧憬、玉津島崇敬は、新玉津島社の京都勧進になる。
嘉慶２年	1388	この春、足利義満、高野参詣の次、紀伊の岡城（和歌山城辺り）に遊ぶ。
明徳２年	1391	玉津島社禰宜、京都吉田家に相伝を申請。
応永34年	1427	９月、足利義満側室北野殿、熊野参詣の次、藤白峠より和歌の浦・吹上浜･玉津島社の眺望を楽しむ。「熊野詣日記」。藤白坂からの眺望を絶賛。筆捨松記事あり。
永享11年	1439	８月、歌僧正徹（1341～1459）59才、紀州に遊び、紀三井寺・玉津島社に参詣。「草根集」巻三。
嘉吉３年	1443	飛鳥井雅永「和歌懐紙」成る。
寛正４年	1463	３月、歌僧心敬（1406～1475）、和歌の浦に遊ぶ。
応仁元年	1467	応仁の乱起こる。
文明２年	1470	５月４日～９日、飛鳥井雅親「飛鳥井殿下向之儀式」では、「玉津島和歌之天神ことことく御参り」とある。
文明４年	1472	５月、飛鳥井雅康の勧進により、「法楽百首和歌」を玉津島社に奉納。

年号	西暦	事　　項
応仁９年	1477	応仁の乱終わり、この後約100年間、戦国時代となる。
文明12年	1480	飛鳥井雅康、和歌の浦に遊ぶ。
文明14年	1482	飛鳥井雅永・藤原久信写「慕帰絵詞」。玉津島の部分はこの時期。 この頃、東縁常（？～1484)、「東野州聞書」に「玉津島ニハ社一もなし鳥居もなし、只漫々たる海のはたに古松一本横れり、」という。
文明18年	1486	３月、本願寺蓮如、紀伊冷水浦に来化の次、藤白坂より眺望を楽しむ。
明応７年	1498	８月25日、明応の大地震
明応８年	1499	２月、後土御門上皇、玉津島社へ法楽歌4首詠進。
大永３年	1523	３月、醍醐理性院厳助、高野参詣の次、和歌の浦・吹上浜・玉津島・紀三井寺・藤白峠を巡覧。
天文19年 ～永禄６年	1550～63	弥勒寺山（秋葉山）に御坊。
永禄元年 ～永禄13年間	1558～1570	風波により天野の神輿、和歌の浦の海中に没し、浜降り神事廃絶。
永禄12年	1569	２月、里村紹巴、玉津島社へ参詣。
天正５年	1577	２～３月、織田信長紀州進攻。この時、玉津島社神体、難を逃れ高松村に避ける。
天正13年	1585	３～４月、羽柴秀吉、紀州進攻、平定。岡山に城を築き、和歌山城と称す。太田城水攻めあり。この間、秀吉、和歌の浦・玉津島・紀三井寺を遊覧。「打出でて玉津島より詠むればみとり立そう布引の松」。 天満宮摂社三宝荒神社再建。
天正14年	1586	羽柴秀長の城代桑山重晴、天満宮観音堂再建。
天正16年	1588	桑山重晴、天満宮荒神社造立。「一説曰く常社上古之鎮座也、桑山家再興の云々」。
天正18年	1590	豊臣秀吉、北条氏を打ち、全国統一。
慶長４年	1599	天満宮、桑山重晴、「現世安穏、後世善処」のため、十一面観音を祀る本地堂（観音堂）再建
慶長５年	1600	９月、関ヶ原の戦い。 10月、浅野幸長、和歌山に入国。翌年一斉検地を行い、37万石を領す。 慶長年間に、浅野幸長の招きにより、儒者藤原惺窩が訪れ、「和歌浦天満宮銘」や「紀州雑詠」詩を残す。また、和歌海苔生産も朝鮮半島から職人を呼び寄せて始めたと言われる。
慶長６年	1601	12月、天満宮社領として、和歌村の内、十石を寄附。
慶長７年	1602	３月　徳川頼宣、家康の十男として誕生。
慶長８年	1603	徳川家康、江戸幕府を開く。
慶長10年	1605	浅野幸長、天神山の中腹を造成して、和歌の浦天満宮の社殿･唐門･拝殿･回廊等を造営。併せて、玉津島社の再興に着手。
慶長11年	1606	11月４日、和歌の浦天満宮社殿成り、遷宮。 11月27日、玉津島社殿なり、遷宮。
慶長19年	1614	大坂冬の陣。
慶長20年	1615	大坂夏の陣。

年号	西暦	事　　項
元和２年	1616	４月、徳川家康没す（75歳）。
元和３年	1617	日光山に改葬される。東照大権現の神号が贈られる。
元和5年	1619	７月、徳川頼宣、和歌山に入国し、紀・勢55万石を領す。 11月、頼宣、玉津島社へ社領10石余を寄進。
元和６年	1620	６月家康の廟（東照社）を和歌の浦に卜定し、着工。
元和７年	1621	４月11日、林羅山、和歌浦、紀行文「西南行日録」。「西都北野南潟浦三処祠堂一色松」「林羅山詩集上巻」。 11月24日、東照社及び別当天曜寺（雲蓋院）落成し、天海を導師として正遷宮を行う。山門衆徒370余人参列。楼門・唐門・薬師堂（本地堂）・三重塔が建立され、参道入り口の本社までの石灯籠群が寄進され社頭が形成される。 同月、天満社を改修。神田若干を寄進し、同社を地主神とする。
元和８年 ～嘉永４年	1622～1851	東照社、御旅所設営
元和８年	1622	４月、東照社の祭典を定め、初めて祭礼（和歌祭）を行う。和歌村、神輿を担ぐ特権。和歌の浦北端の山上に、愛宕権現社勧請、和合院(内六ヶ坊）創建
元和９年	1623	宝蔵院（内六ヶ坊）創建
寛永元年	1624	東照社、社領1千石余が寄附される。
寛永３年	1626	玉泉院・円成院（内六ヶ坊）創建。
寛永４年	1627	徳川頼宣の長男、光貞誕生。
寛永５年	1628	大相院（内六ヶ坊）創建
寛永11年	1634	８月、天海、「東照大権現年中行事」を定める。
寛永13年	1636	１月、頼宣、「和歌山天曜寺法式」を定め、東照社に社領1000石寄進。鳥居も建立し、東照社確立。 東照社と天満宮の山境確定の際、天神山の一部を割いて権現山を創立。天満宮に代替地を与え、25石に増やす。
寛永14年	1637	頼宣、矢の宮神社再興
寛永20年	1643	正法院（内六ヶ坊）創建
正保元年	1644	この頃、住吉如慶「紀州若浦之図」成立。寄洲郷坪・中浜坪・外浜坪辺り　塩田化
正保2年	1645	宮号宣下。「東照社」を「東照宮」と号す。
正保3年	1646	この頃、「東照宮縁起絵巻」成る。 徳川頼宣は、「此地にもとよりありし玉津島･菅原神も、ともに光をそへて」「浦はるかに見渡せば、波も空もひとつにして、千里の外までの眼の前につきぬ」「ここかしこ海山のたたすまい」「まことにいろを得たる勝地」で鎮座に最適な場所。
正保4年	1647	この頃、日護上人和歌山城へ招かれ、釈迦仏などを彫り、和歌村津屋に寺庵を営む。
慶安元年	1648	徳川頼宣の生母お万の方、家康33回忌の追善のため、法華教題目石250万返の勧進を発願。この秋、日護上人、妙見大菩薩像を奉彫刻。

年号	西暦	事　　項
慶安２年頃	1649	弁才天社を妹背山から甲崎へ移す。 ２月17日、日護上人 題目碑・梵文題目碑撰文。 ２月15日、題目250万返書写成り、妹背山の巌洞に経石埋納。上に経堂建立。 ２月15日三浦長門守平為時　石灯籠寄進。
慶安4年	1651	４月に制札２枚設置。この頃までに三断橋架設。観海閣建立。この年、妹背山に寺庵（のち海禅院）を置く。
慶安年間	1648～51	芦辺茶屋・朝日茶屋、頼宣の命により営業開始。
承応２年	1653	８月 養珠院没（77歳）。
承応３年	1654	日護上人の寺庵を養珠寺とし、生母養珠院の霊牌所として養珠院の位牌と遺骨を収める。寺領200石寄進。妹背山多宝塔建立。
承応４年	1655	４月大猷院（家光）の御霊屋を東照宮境内に建立。
明暦元年	1656	８月21日、頼宣、自筆法華教写経を妙見大菩薩像の腹中に納める。
正保３年 ～明暦３年	1646～57	堀川掘削。
明暦３年	1657	３月21日、妹背山の経堂を宝塔に改め、養珠院の遺骨（分骨）を釈迦仏の体内に納める。釈迦仏を養珠寺から宝塔内に移し安置。 ８月、東照宮鳥居前に下馬橋架設。
万治元年	1658	「百姓猥に御山入込申間敷事」と触れが出される。
万治２年	1659	11月7日、玉津島社の本社瓦葺き遷宮。玉垣等を造営。矢ノ宮本社殿等再建。
万治３年	1660	４月、玉津島神社歌仙殿建立。頼宣、三十六歌仙絵を寄進。 この年、養珠寺の西南山頂に妙見堂建立し、妙見大菩薩を安置。 下馬橋の柵だけではなく、西の神主家の屋敷前にも柵が描かれる。
万治４年	1661	布引村の新田60余町を開発。
寛文３年	1663	狩野探幽「和歌三神」成る。 ３月、頼宣、家臣の斉藤作の丞に、国中の名所旧蹟の調査を命じる。 （～寛文8年まで）
寛文４年	1664	６月１日、御西院、玉津島社へ御製等50首を奉納。 ７月22日、頼宣、社領20石加増。 この年、玉津島神社宝蔵建立。「和歌浦祭礼図屏風」成る。
寛文５年	1665	頼宣、勘文に従い、玉津島社の祭礼復興を命ずる。 この年、雄湊沖合に、鯨現れる。 「和歌祭祭礼図屏風」成立。堀川が流れ、御手洗川に流入する辺りに下馬橋が描かれている。
寛文７年	1667	頼宣、病気のため隠居。光貞第二代藩主になる。城下町南端に新堀川を掘削。途中で中止し、堀止と呼ばれる。
寛文５年 ～元禄８年	1665～1695	和歌村の長屋筋より出島に至る市町川の新道（中道）敷設
寛文８年	1668	７月、頼宣、玉津島社へ詠歌1首を奉納。

年号	西暦	事　　項
寛文11年	1671	１月、徳川頼宣没（70歳）
寛文13年	1673	７月、和歌村より御旅所近辺に家建てを願出。許可。
天和３年	1683	６月、霊元天皇、玉津島社へ御製等50首を奉納。
貞享元年	1684	11月17日、吉宗誕生。
元禄元年	1688	３月、松尾芭蕉、高野山から和歌の浦を巡遊。
元禄２年	1689	５月、貝原益軒、南紀巡遊の次、和歌の浦を遊覧。「諸州めぐり」成立。正徳３年（1713）板行。
元禄８年	1695	５月、市町前入江の塩浜化と御旅所未洲崎の新田化が願出されるが、雲蓋院の反対で不許可。
元禄16年	1703	歌謡集「松の葉」刊行。
元禄18年	1705	９月14日光貞死去。吉宗第５代紀州藩主。
宝永４年	1707	10月、領内浦々の塩浜、津浪により破損。 12月、徳川吉宗の命により市町前の入江14～15町を臨時的に塩浜化。
正徳３年	1713	11月、水戸藩徳川光圀、玉津島社へ「扶桑拾葉集」35冊を奉納。 貝原益軒「諸州めぐり」刊行。
正徳４年	1714	８月、藩主徳川宗直、玉津島社へ霊元天皇等の「月次法楽和歌」上下２巻を奉納。 同月、中院通躬、玉津島社へ詠歌3首を奉納。
享保元年	1716	将軍となり、吉宗、享保の改革を始める。
享保５年	1720	玉津島社へ後奈良院宸筆の掲額 この頃、市町前塩浜取り壊される。
享保７年	1722	和歌浦をたびたび訪れた似雲、「としなみ草」の中に紀行。 この頃、難波の狂歌師、油煙斎永田貞柳、和歌の浦訪れる。
享保17年	1732	享保の大飢饉。
元文４年	1739	名高専念寺の僧全長、「和歌浦物語」２巻を撰述。
延享元年	1744	６月、桜町天皇、玉津島社へ御製等50首を奉納。 この年、冷泉為村、玉津島社へ父為久作の「吹上八景手鑑」を書写奉納。
宝暦元年	1751	４月、藩主宗直、太田道知に命じて「吹上八景」の謡曲を作らせる。
宝暦５年	1755	11月、和歌村より市町前塩浜化を願出。雲蓋院の反対で不許可。
宝暦６年	1756	森幸安「紀州和歌山和歌浦之図」成る。和歌浦を平面的に記した地図では最古。
宝暦10年	1760	３月、桃園天皇、玉津島社へ御製等50首を奉納。 「三十三間堂由来」初演・刊行。
明和３年	1766	６月、後桜町天皇、春秋二季の玉津島社祭典の復興を指示。同年9月より勅使派遣開始。
明和４年	1767	３月、後桜町天皇、玉津島社へ御製等50首を奉納。
明和８年	1771	３月、玉津島社の二季祭典に初めて院使派遣（以下毎年）。
明和９年	1782	桑山玉洲「若浦図巻」成る。
天明３年	1783	４～９月、後桜町上皇、内々に和歌の浦を遊覧。玉津島社に参詣。 天明の大飢饉。
寛政２年	1790	１月、岡本稚川編「玉藻詩集」刊行。和歌の浦の人々が和歌浦を詠む。

年号	西暦	事　　項
寛政５年	1793	行者道仙、御坊山の南に秋葉権現創建。
寛政６年	1794	本居宣長、和歌山に滞在し、玉津島神主弟子入り許す。
寛政９年	1797	11月、光格天皇・後桜町上皇、玉津島社へ御製等を奉納。
寛政11年	1799	司馬江漢（鈴木春重）、紀三井寺を訪れる。
享和元年	1801	江戸で「和歌名所記」が発刊。
文化３年	1806	紀州藩、「紀伊続風土記」編纂に着手。
文化８年	1811	「紀伊国名所図会」第１編成る。「養珠寺境内絵図」成る。
文化10年	1813	３月、「望海楼遺趾碑」（仁井田好古撰文）、奠供山の麓に建立される。
文化11年	1814	徳川家康200回忌法会の際に、御手洗池を浚渫した土砂で市町川の新中道敷設。
文政元年	1818	藩主徳川治宝、水軒御用邸（養翠園）の造営に着手（文化8年完成）。
文政２年	1819	２月、治宝、西浜御殿の造営に着手（文化10年完成）。
文政６年	1823	紀ノ川流域の大百姓一揆起こる。
文政７年	1824	６月、藩主治宝退隠。
文政８年	1825	４月、頼山陽、和歌の浦に来遊。 市町前の一部が埋立られ塩浜・塩田化
天保３年	1832	９月、玉津島社神主、奠供山上に拝所を建立し、「望祀の礼」を復旧。奠供山碑（仁井田好古撰文）、奠供山上に建立。
天保４年	1833	芭蕉の句碑、三断橋西に建立。 天保の大飢饉。
天保10年	1839	３月、「紀伊続風土記」完成
天保13年	1842	12月、仁孝天皇、玉津島社へ御製等50首を奉納。
弘化３年	1846	７月、和歌山城天守閣落雷焼失。
嘉永３年	1850	６月、和歌山城天守閣再建。 10月、治宝、和歌の浦東照宮御旅所の造替を命じる。この時、不老橋架橋計画具体化。 頼山陽「南遊史」成る。
嘉永４年	1851	４月、新御旅所裏道・不老橋架橋。東照宮新御旅所への移転。 この頃までに、上賀茂社書家岡本保誠が「不老橋」を揮毫。
嘉永５年	1852	徳川治宝没（82歳）
嘉永７年	1854	６月、不老橋の修理工事（地震のため）。
万延元年	1860	７月12日、烈風高浪により旧御旅所流失。新御旅所より東照宮お霊屋前まで浸水。洲崎切れる。
文久３年	1863	五雲亭貞秀画「日本三景之内勝景」（錦絵）板行
慶応2年	1866	８月７日、暴風のため観海閣（拝殿）破壊。
慶応3年	1867	９月、城下町町民の寄付により、観海閣を再建。 10月、大政奉還。
明治元年	1868	明治改元。
明治２年	1869	和歌村の牡蛎問屋、藩から牡蛎海苔受負を命ぜられる。紀三井寺・布引村も免許。
明治３年	1870	１月、カール・ケッペン、「これほど美しい景色は見たことがない」（和歌山日記）、和歌の浦に遊ぶ。

年号	西暦	事　　項
		４月、神仏分離により、東照宮本殿等から仏具取り除け。禰宜が祭主になる。
		この年、東照宮境内の寺院破却。雲蓋院は東照宮への奉仕を免ぜられ、大相院へ避難。
明治４年	1871	５月、妹背山の内、参加の島周囲の地・建物等を徳川家より和歌山藩庁へ引き渡す。
		７月、廃藩置県。和歌山藩を和歌山県と改称。
		この夏、台風のため片男波洲崎決壊。海苔養殖地埋没。
明治５年	1872	５月、和歌村成立。五百羅漢寺横に小区の会議場設置。
		７月、東照宮境内の多宝塔・鐘楼堂・薬師堂・護摩堂・神輿堂払い下げ告示。
明治７年	1874	和歌祭、和歌村村民により復興。
明治８年	1875	東照宮の山麓、旧雲蓋院跡地に南龍神社創建。
明治10年	1877	和歌村、戸数988戸、人口2465人と記録。就業構成、農250戸･商524戸、工50戸、雑戸100戸その他。
		西南戦争。
明治12年	1879	海部郡和歌村になる。
明治14年	1880	洲崎の鼻、暴風雨のため、欠亡変形。
明治18年	1885	１月、和歌祭執行の後援組織徳盛会設立。
		９月、和歌村戸長、県令により「県立公園設置請願書」を提出。公園区域としては、「和歌の浦」の北端の円珠院（愛宕社）・秋葉社・羅漢寺、東の玉津島・妹背山・片男波海岸、西の東照宮・天満宮・御手洗池を中心として、その面積8.6haに達し、民有地･寺社地を含む。翌年、都都合により取り下げ。
明治20年	1887	大相院を雲蓋院と改称。
明治22年	1889	大日本国憲法発布。
		和歌村村長・村役場設置。
		水害で牡蠣大打撃。
明治24年	1891	暴風雨のため洲崎大破壊。
明治26年	1893	和歌村より観海閣の村有認定を県に申請。
		この頃、和歌村、逓信大臣あてに「通信開設願」。これによると、和歌浦の名所旧跡を尋ねる参詣者名年4500人、和歌祭への観覧客４万人にのぼる。
		この頃、明治新撰「紀伊繁昌誌」には、この地域の名所旧跡として和歌浦･芦辺浦・妹背山（三断橋・多宝塔・観海閣）・不老橋・かたおなみ・望海楼の遺跡・養珠寺山を紹介し、神社仏閣として、東照宮・天満宮・南龍社・玉津島神社を挙げていた。養珠寺維新後に廃れ、社殿荒廃していた玉津島神社、「翌年改造」。
		５月、「紀州和歌浦図」に「和歌浦海水浴」一文掲載。温泉療法と同じ考えで海水療法。
		この頃、和歌浦出島の和歌浦港「冬港」と称せられ、大型の蒸気船、軍艦も停泊。

年号	西暦	事　　項
明治27年	1894	８月１日、日清戦争開始～1895年４月17日まで
明治28年	1895	12月、和歌山県、奠供山や芦辺潮溜等の官有地34町歩を充用し、県立和歌公園設置。 秋葉山地域を除き、また民有地・寺社地を含まない官林・海岸地・干潟を主とする。
明治30年	1897	６月、県立和歌公園に官有地約20町歩追加。 この頃、和歌浦の漁業は、沿岸で操業する網漁村としては、日高郡三尾村と並び位置。漁獲物は旧藩時代から城下町への漁類供給を引き受けてきた和歌浦魚市場で売り捌かれる。
明治32年	1899	３月、和歌村、和歌浦町となる。 同月、和歌公園規則制定。東照宮・天神社上地の山林と松原、鏡山の山林、芭蕉句碑周辺などは風致、浪除のため、一切使用不可。公園内の樹木を切ったり、車馬を乗り入れたり、魚鳥を捕ったり、木石・塵介を放棄することが禁じられたばかりでなく、露店設置も厳しく制限。ただ、「芦辺潮留」「御手洗池」などは、従来の慣行により牡蠣･海苔などの採取や養殖場が認められる。 和歌浦東照宮祭典等保存のための組織である東照宮明光会が設立。 この年、木製の旭橋架かる。
明治33年	1900	４月、明治天皇連合艦隊を率いて和歌浦湾に碇泊。この時、望海楼遺址碑を奠供山山頂へ移す（奠供山碑は既に玉津島社拝殿横に移動）。
明治36年	1903	南海鉄道、難波～和歌山市間全線開通。
明治37年	1904	２月８日、日露戦争～翌９月５日まで
明治38年	1905	塩の専売制施行、不採算の塩田整理の対象。
明治39年	1906	明光会の崩壊のあとを受けて和歌浦東照宮保存会設立。 12月10日、与謝野鉄幹、北原白秋ら和歌の浦、紀三井寺を見学。
明治40年	1907	晩夏、若山牧水、和歌の浦へ来遊。
明治41年	1908	10月、和歌山水力電気･南海軌道、和歌浦までの橋畔まで線路設置終了。東西いづれに延伸させるか検討開始。 12月、名所案内図「和歌之浦公園景」刊。海水浴場あり。
明治42年	1909	２月、坪内逍遙「和歌の浦」新小説書く。 ６月19日付け和歌山新報、南海鉄道専務、大阪からの和歌浦遊覧者全て不平断を述べ、和歌浦を傷つけているとして、和歌浦開発を示す。「和歌浦の没趣味なること」「旅館の不行届なること」「諸機関の整備せざること」にあるとした。 ７月、芦辺屋前・三断橋・妹背山・不老橋畔・望海楼前にアーク灯建設、点灯。 ８月22日、和歌浦鉄橋（旭橋）開通式。
明治43年	1910	３月、森田庄兵衛、和歌浦新天地（新和歌浦）に公園計画。和歌浦から雑賀崎の山林45㌶ を買収。和歌浦が近代の観光事業と結びついて開発計画の拠点となる。

年号	西暦	事　　項
		10月、旅館望海楼の庭園、奠供山に高さ30mの昇降機（エレベータ明光台）を設置、開業。東洋一と称されたエレベーター建設に伴う地元新聞の間で論戦有り（大正５年まで営業）。 南海遊園株式会社、御手洗池を埋立、水族館・養魚釣池・すべり船・運動場・海産物陳列場などを建設する計画。和歌山県風致を害するとのことで不許可。
明治44年	1911	３月、河東碧梧桐、和歌の浦に来遊。「三千里」成る。南紀に旅し、牟婁新報社主毛利柴庵の紹介で、南方熊楠と歓談。 ７月 森田庄兵衛の新和歌浦遊園落成。 この年、新和歌浦第一トンネル開通。 和歌山水電が不老橋付近の沼沢を埋立て、遊園地建設計画。 ８月、夏目漱石、望海楼に宿を取り、和歌の浦に来遊。行人の主人公「所にも似ず無風流な装置には違いないが、浅草にもまだない新しさが、昨日から自分の注意を惹いていた」に語らせる。「現代日本の開花」を和歌山で講演。
明治45年	1912	４月、和歌浦遊園を南海・和歌山水電が計画。 大阪商船の紀南航路の寄港地が和歌山港から和歌浦港に切り替わる。 ２月、和歌山水力電気軌道、不老橋・三断橋辺り海面約3万坪埋立計画。不老橋―埋め立て地―出島の延長線を出願。この頃、南方熊楠、この計画を批判。 ５月、和歌浦口―御手洗池畔―出島線に決定。 ６月、和歌浦新道（奥天神―雑賀村大浦）の計画決定。玉津島社社殿大破につき造営修理の計画。 ＊明治から大正への改元は、1912年７月30日
大正元年	1912	９月、台風のため、片男波堤防決壊、同地の砂丘消滅。 この頃、和歌浦に電柱設置。
大正２年	1913	10月、和歌山水力軌道、和歌浦口―新和歌浦開通。 11月、夏目漱石「行人」完成（朝日新聞）。 和歌浦の主要品である海苔採取業者600人以上に達する。和歌川流域での工場立地に伴い、工場の排水などが和歌浦海苔色沢香気を失わせつつあるとの記事（毎日新聞「和歌の浦の海苔の前途」11月7日付け）。
大正３年	1914	１月、片男波海岸（和歌浦出島から片男波砂嘴に至る海岸線）にコンクリート製防波堤2.6km 完成。 ７月28日、第一次世界大戦始まる。1918年11月11日終結。 ９月23日、暴風雨激浪にて新設の片男波海岸崩壊。 有本芳水「芳水詩集」刊行。
大正５年	1916	２月、第一次世界大戦の鉄類高騰に伴い、奠供山の昇降機撤去、売り払われる。 ５月31日付け和歌山新報、和歌浦町長らにより「芦辺屋の亭より洲崎にかけて三角形の埋立」を企て、和歌浦公園設置計画。 ９月、観海閣の雨漏り、三断橋の損傷を応急修理。

年号	西暦	事　　項
大正６年	1917	和歌浦東照宮保存会解散 ６月、南龍神社を東照宮に合祀。 10月、新和歌浦土地株式会社設立（新和歌浦の開発）資本金50万円。
大正７年	1918	３月15日、和歌浦土地開発株式会社設立（曙橋以東、市町前の入り江埋立計画）。芦辺屋にて創立総会。
大正８年	1919	２月、東照宮の改装工事完成（5万4000円）。 ４月、「史蹟名勝天然記念物保存法」制定。 ６月、新和歌浦に山上ケーブルカー設置工事開始。
大正９年	1920	４月、東照宮で徳川氏入国三百年祭典を行う。 この頃、和歌浦港年間35万人乗降客。
大正10年	1921	５月、徳富蘇峰、和歌の浦に来遊。「此所は土地会社とかの埋築工事で、ほとんどその風景は全滅だ。片葉の芦の生じる余地もなく、片男波押しするな渚もなく、唯々唯々殺風景な埋立地が、石垣で築き上げられているのみだ」と嘆く。玉津島神社、雲蓋院前面の地域埋めたてられる。 この頃、市町村入江（現片男波地区）、約４万坪の大半が埋立。
大正11年	1922	10月、東宮（昭和天皇）来県に先立ち、県史跡名勝保存会が写真帳を献上。奠供山山調整備。 12月、東宮、和歌の浦に遊覧。
大正12年	1923	１月、紀三井寺塩田跡地にピクリン酸製造工場建設計画に対し、同村、和歌浦町など地元に反対運動起こる。計画断念（４月）。 ３月、衆議院議員久下豊忠、和歌浦を中心とする国立公園設置建議、衆議院を通過。
大正13年	1924	５月、和歌の浦を国名勝指定とする動きおこる。 10月、雑賀村宇須の根上松（枯死）、玉津島社鳥居前に移転、保存。 同月、天満宮の大鳥居ほか、新造奉納。 この頃、和歌浦地域は大阪方面からの行楽・遊覧客の格好の観光地。夏期の海水浴客４万人超える。
大正14年	1925	６月10日、徳川頼倫らにより、県の「史蹟名勝天然記念物保存顕彰規程」制定。 ７月17日、和歌浦町、紀三井寺・雑賀崎・雑賀各村の一部を含んだ和歌浦は、県名勝に指定。 10月、「新和歌浦遊園」開設。 12月、芦辺屋廃業。和歌浦観光の拠点が新和歌浦へ移行。 同月、日本画家山口八九子、和歌の浦を転地療法の地として選ぶ。
昭和元年	1926	３月７日付け和歌山新報、「和歌浦遊園地、景勝を俗化する勿れ」和歌浦の景観美はその南国的な柔らかい海の形、山のさまにあるとし、景観美の保存をしておく要があると述べる。 ５月、市町前埋立地北東部に和歌浦芸妓町10戸上棟、「不老園」として開業。 ９月、和歌街道の松並木県史蹟に指定。 12月、南海遊園株式会社設立。

年号	西暦	事　　項
		この頃、武者小路実篤、和歌の浦に滞在。和歌の浦西正寺に実姉伊嘉子に墓所有り。
昭和２年	1927	この年、和歌川河口に築港造成計画。
昭和３年	1928	５月、鶴立島猊口石、競売に付される。
		８月、御手洗池、浚渫決定。
昭和４年	1929	６月、芦辺屋経営主、坪内逍遙作和歌浦あしべ踊り・音頭を発表。
		７月頃、「和歌浦」国の名勝に内定（内務省）。のち告示はなし。
昭和５年	1930	3月頃、文部省の指示で南葵育英会が指定区域を調査（但し、官報告示なし）。
		９月、海苔業者、和歌川貯水場新設反対を陳情。
		和歌浦町が中心となって、玉津島神社・大相院を結ぶ大陸橋取り付け。
		阪和電鉄、天王寺～和歌山間を開通。
昭和７年	1931	この頃、「年々百万以上の遊覧客を吸収している新和歌浦」と言われる。
昭和８年	1933	５月、和歌公園の内、玉津島社付近の山一帯に花崗岩の石設置。
		６月、和歌浦町、和歌山市に合併、吸収される。
		９月、和歌公園の整備を計画。この時、奠供山―雲蓋院に大陸橋架橋。
昭和９年	1934	３月27日、佐藤春夫、和歌の浦泊。「先塵紀行」中央公論5月刊行。
		５月和歌浦観光自動車道路（和歌浦～新和歌浦、現あしべ通）整備完成。この時、欄干擬宝珠設置。
		７月、和歌浦街道（和歌道）松並木に白蟻、9月の暴風で多数倒れる。残り百数十本あり。
昭和10年	1935	７月、七年ぶりに和歌祭を挙行。
		８月、台風のため、片男波防波堤決壊。
		10月、和歌浦桟橋の架橋決定。
昭和11年	1936	７月、和歌浦東部一帯（現和歌浦東3・4丁目）の和歌山都市計画土地区画整理決定。
		８月、河岸（現和歌川町、和歌浦東3・4丁目の一部）の埋立を伴う和歌川改修工事許可される（翌年11月埋立完成）。
		この年、市町前の入江埋立地の大半を住宅地とする分譲広告出る。
昭和12年	1937	５月17日、このときの和歌祭をもって途絶
		８月「旭橋」（鉄コンクリート製）に掛け替え工事着工。
昭和13年	1938	１月、秋葉山公園設置。
		11月12日、大阪～和歌山に大阪商船の定期航路、廃止
昭和14年	1939	12月、新和歌浦～雑賀崎周遊道路（幅員5m）完成。
昭和15年	1940	３月、和歌山中学ボート部、片男波沖で遭難。
		12月、太平洋戦争始まる。
昭和16年	1941	３月、赤人の歌碑建設の声上がる。
		11月、和歌浦地区の37ha余を都市計画風致地区に指定。
昭和18年	1943	12月、新旭橋竣工。
昭和20年	1945	８月、ポツダム宣言受諾。
		９月、米軍、和歌浦湾に上陸開始の噂。西浜に上陸。

年号	西暦	事　　項
昭和22年	1947	11月、紀三井寺塩田跡地に競馬場建設。
昭和23年	1948	５月、和歌祭、みなと祭りで復活
昭和25年	1950	７月、新和歌浦・雑賀崎、瀬戸内海国立公園に編入指定。
昭和26年	1951	４月、和歌公園の区域から､｢芦辺潮溜まり｣(干潟8.6ha)を除外。
		11月、和歌山県文化財規則制定。和歌山県史蹟名勝天然記念物保存顕彰規程（大正14年制定）を承継
昭和27年	1952	９月、芭蕉句碑無断移転事件起こる。12月、県議会で問題化。
		11月３日、和歌山市文化財協会、尾上柴舟指揮亳の赤人の歌碑を不老橋北側に建立。
昭和28年	1955	３月、養翠園が開放される。
		８月、県営和歌浦魚市場開設。
昭和35年	1960	５月、新和歌浦章魚頭姿山のロープーウエー開通。平成８年まで営業。
昭和36年	1961	５月、黒江湾埋立工事着工。
		８月、第二室戸台風により観海閣破壊される（翌年コンクリートにより、再建)。
昭和42年	1967	３月、和歌山南港の貯木場・工業団地完成（水軒の浜埋立)。
昭和46年	1971	３月、市内路面電車廃止。国体道路開通。
		８月、県道新和歌浦線トンネル開通。
昭和47年	1972	７月、県、自然環境保全条例を公布。
昭和48年	1973	９月、和歌山市御手洗池を整備。
昭和49年	1974	和歌山市、新和歌浦観光遊歩道建設開始（海水浴場～)。
昭和50年	1975	片男波海岸の養浜工事（五カ年計画）着手。
昭和59年	1984	県、「関西国際空港地域整備（概要)」発表。
		この年の和歌祭で途絶
昭和60年	1985	６月、和歌山県地方港湾審議会、毛見地区のマリーナ計画を策定。
		この年、津屋川ポンプ場設置。
昭和61年	1986	４月、県知事、松下興産に海洋性リゾート計画の検討を要請。
		12月、県、「長期総合計画新世紀紀の国21」を発表。
		同月、片男波和歌公園、建設大臣より「健康運動公園」の指定を受ける。
昭和62年	1987	３月、松下興産、「マリーナシティ計画（埋立面積58ha)」を発表。
		５月、「総合保養地域整備法（リゾート法)」施行。松下興産、「和歌山マリーナシティ計画」を発表。
昭和63年	1988	３月、和歌山県、和歌浦港湾リゾート開発の一環として「新不老橋」建設計画推進へ。
		６月３日、和歌山地方史研究会（会長薗田香融)、「文化財保護について緊急アピール」
		９月14日、和歌山県、「新不老橋」建設計画を発表。
		９月27日、地元住民団体として、「和歌浦を考える会（代表多田道夫)」発足。
		10月６日、古代史・万葉学者17名、和歌山県に新不老橋建設計画再考を要望。

年号	西暦	事　　項
		10月29日、新不老橋建設に反対する和歌山の文化関係者の会（代表津本陽）、反対の要望書を和歌山県に提出。
		11月24日、新不老橋建設反対連絡会議（17団体、73個人、代表津本陽）発足。
		12月２日、古代史、万葉学者の要望を指示する会、和歌山県知事に約4万人の反対署名（翌年１月分を合わせると5万5千人）を提出。
		12月８日、県議会、一般質問で「新不老橋」建設を巡って論戦。
平成元年	1989	４月、人口島「マリーナシティ」建設工事に着手。
		５月、新不老橋建設工事に着手。
		９月、住民ら63人、住民監査請求（11月請求斥けられる「理由なし」）。
		12月、和歌の浦景観保全訴訟原告団、和歌山地方裁判所に提訴。
		同月、田ノ浦漁港関連道に着手。
平成２年	1990	２月、県、和歌健康運動公園の整備工事に着手。
		８月1日、和歌山県、新不老橋をあしべ橋と命名。
		11月３日、和歌祭六年ぶりに復活、戦後初めての和歌浦での実施。
		12月、「燦黒潮リゾート構想」、リゾート法による事業として承認される。
平成３年	1991	３月25日、あしべ橋開通式。
		８月、和歌山市、不老橋の解体修理・文化財指定を決定。
		10月、奥和歌大橋完成。
平成4年	1992	８月、不老橋等が写る最古級写真乾板、かつらぎ町で発見。
平成5年	1993	１月、近畿の生物学者・万葉学・歴史学研究者155名が和歌の浦の干潟埋立再検討を和歌山県知事に要望。不老橋修理。
平成6年	1994	11月30日、判決言い渡し、原告の訴えを棄却。
平成7年	1995	５月、和歌山市、不老橋を文化財指定。
平成20年	2008	６月24日、「県指定文化財名勝・史跡和歌の浦」指定。
平成22年	2010	８月５日、「国指定記念物（名勝）」として、名勝和歌の浦が指定される。

年表については、以下を参照。

園田香融編　1991 『歴史的景観としての和歌の浦』
園田香融編　1993 『和歌の浦　歴史と文学』
柏原卓　1996 『和歌浦物語』
和歌の浦景観保全訴訟の裁判記録刊行会編　1996 『よりがえれ和歌の浦』
和歌山市立博物館　2005 『和歌浦（わかのうら）その景とうつりかわり』
須山高明　2008 「和歌浦名所を読み歩く」『平成20年度和歌浦歴史講座』

資　料　編

資料１

県指定名勝・史跡和歌の浦学術調査委員会設置要綱

（目的）

第１条　県指定名勝・史跡和歌の浦の学術的価値を確定するため、県指定名勝・史跡和歌の浦学術調査委員会（以下「調査委員会」という。）を設置する。

（任務）

第２条　調査委員会は、和歌山県教育委員会（以下「教育委員会」という。）が行う県指定名勝･史跡和歌の浦の調査に対して、学術上及び文化財保護上必要な助言及び指導を行う。

（組織）

第３条　調査委員会の定数は10人とする。

２　調査委員会の委員は、考古学、歴史地理、文学、歴史、社会学、造園史、生物、植生、地学に関する学識経験のある者のうちから教育委員会が任命する。

（委員の任期）

第４条　委員の任期は、平成22年３月31日とする。

２　委員が欠けた場合における補欠の任期は前任者の残任期間とする。

（役員）

第５条　調査委員会に会長及び副会長を置く。会長は会務を総括し、調査委員会を代表する。

２　会長は、委員の中から互選により選出し、副会長は、会長が任命する。

３　会長は、会務を総括し、調査委員会を代表する。

４　副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときなどの職務を代行する。

（会議の招集）

第６条　調査委員会は、会長が招集する。

（助言者の招聘）

第７条　調査委員会は、必要に応じて専門知識の保有者（以下「助言者」という。）を会議に出席させ、助言を得ることができる。

（経費）

第８条　調査委員会に要する経費は、和歌山県が負担する。

（委員の報酬及び費用弁償）

第９条　委員及び助言者の報酬は、「附属機関の委員その他の構成員の報酬及び費用弁償条例」（昭和38年４月７日　和歌山県条例第３号）に基づき支給し、委員会出席に要する費用は、「職員等の旅費に関する条例（昭和41年10月15日　和歌山県条例第34号）」に基づき支弁する。

（事務局）

第10条　調査委員会の事務局を和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課におき、調査委員会に

係る事務処理を行う。

（その他）

第11条　この要綱に定めるもののほか、調査委員会の運営に必要な事項は、会長がこれを定める。

附　則

この要綱は、平成20年8月28日から施行する。

資料２　県指定文化財名勝・史跡和歌の浦指定一覧表、説明及び古写真等資料

県指定文化財名勝・史跡和歌の浦　指定地一覧表

名　称	地番	地目	面　積	所有者	管理者
和歌公園（妹背山）	和歌浦中３丁目1061番 1062番	公園	3,774㎡	財務省	和歌山県
	和歌浦中３丁目1064番				
三断橋	和歌浦中３丁目1062番先	－	－	財務省	和歌山県
和歌公園（鏡山）	和歌浦中３丁目1065番 1059番	公園	2,879㎡	財務省	和歌山県
和歌公園（奠供山）	和歌浦中３丁目1067番	公園	6,634㎡	財務省	和歌山県
和歌公園（芦辺屋敷）	和歌浦中３丁目1057番	公園	1,484㎡	和歌山県	－
海禅院境内地	和歌浦中３丁目1063番	境内地	393㎡	海禅院	－
不老橋	和歌浦南３丁目1079番24外先	－	－	－	和歌山市
玉津島神社境内地	和歌浦中３丁目1066番	境内地	8,195㎡	玉津島神社	－
塩竈神社境内地	和歌浦中３丁目1065番１	境内地	304㎡	塩竈神社	－
天満神社境内地	和歌浦西２丁目1305番１	境内地	8,707㎡	天満神社	－
天満神社境内地	和歌浦西２丁目1306番	境内地	7,292㎡	天満神社	－
天満神社境内地	和歌浦西２丁目1307番	境内地	4,654㎡	天満神社	－
東照宮境内地	和歌浦西２丁目1300番４	境内地	376㎡	東照宮	－
東照宮境内地	和歌浦西２丁目1302番	境内地	18,357㎡	東照宮	－
東照宮境内地	和歌浦西２丁目1302番１	境内地	1,021㎡	東照宮	－
東照宮境内地	和歌浦西２丁目1302番２	境内地	132㎡	東照宮	－
東照宮境内地	和歌浦西２丁目1302番３	境内地	155㎡	東照宮	－
東照宮境内地	和歌浦西２丁目1303番	境内地	8,799㎡	東照宮	－
東照宮境内地	和歌浦西２丁目1304番１	境内地	5,752㎡	東照宮	－
東照宮境内地 （御手洗池公園）	和歌浦西２丁目1308番１	境内地	1,474㎡	東照宮	和歌山市
東照宮境内地 （御手洗池公園）	和歌浦西２丁目1309番１	境内地	211㎡	東照宮	和歌山市
東照宮境内地 （御手洗池公園）	和歌浦西２丁目1310番１	境内地	17,484㎡	東照宮	和歌山市
東照宮境内地 （御手洗池公園）	和歌浦西２丁目1310番５	境内地	3,507㎡	東照宮	和歌山市
東照宮境内地 （御手洗池公園）	和歌浦西２丁目1310番８	境内地	714㎡	東照宮	和歌山市
総　面　積			102,298㎡		

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　奠供山

3　地　　番　　和歌山市和歌浦中三丁目1067

4　所　有　者　　財務省

5　管　理　者　　和歌山県

6　指 定 理 由

奠供山（てんぐやま）は、玉津島神社の背後の山である。神亀元年（724）10月八日に23歳の若き聖武天皇は、玉津島に到着し、その後十四日間滞在した。天皇は詔を出す。

『山に登り海を望むに、この間最も好し。遠行を労せずして、以て遊覧するに足る、故に弱浜（わかはま）の名を改めて明光浦（あかのうら）と為せ、宜しくし守戸を置きて荒穢（こうわい）せしむことなかれ、春秋二時官人を差遣し、玉津島の神・明光浦の霊を奠祀せよ。』

東大寺を建立し天平文化を謳歌した聖武天皇は、和歌浦の景観に感動し、名称を変え、さらにこの地の景観を守るため守戸を置き、減税を行った。この山は奠供山であろうと考えられています。この時、宮廷歌人山部赤人が読んだ一首

『若の浦に潮満ちくれば潟を無み　芦辺を指して田鶴鳴き渡る』

はあまりも有名である。

また天平神護元年（765）10月19日に称徳天皇行幸の際に奠供山の南麓の南浜の「望海楼」で雅楽・雑伎が奏でられました。玉津島神社蔵の慶應3年（1867）改刻の玉津島神社略記添付の「和歌浦玉出嶋社之圖」に奠供山に拝所が描かれています。

奠供山山頂には、江戸時代の儒学者仁井田好古撰文碑「望海楼遺址碑」（和歌山市指定文化財）があります。また夏目漱石の小説「行人」にも奠供山は書かれています。

奈良時代からの原景観を今に残し、歴史にも数多く登場する由緒ある地であり、史跡として重要である。

奠供山

明治期の奠供山

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　玉津島神社

3　地　　番　　和歌山市和歌浦中３丁目1066番地

4　所　有　者　　玉津島神社

5　管　理　者

6　指 定 理 由

724年に即位した若き23歳の聖武天皇は、和歌の浦に行幸する。そして、和歌の浦の景観に感動し、この地の風致を守るため守戸を置き、玉津嶋と明光浦の霊を祀ることを命じた詔を発する。これが玉津嶋の初見である。この時同行した万葉歌人山部赤人の詠んだ歌（万葉集⑥　919）「若の浦に潮満ち来れば　潟を無み　葦辺をさして　鶴鳴き渡る」はあまりにも有名である。当時は、島山があたかも玉のように海中に点在していたと思われる。玉津嶋神社の祭神は、稚日女（ワカヒルメ）尊、息長足姫尊（オキナガタラシヒメ）衣通姫（ソトオリヒメ）とされるが、玉津嶋の神は和歌の神様として、住吉明神、北野天満宮（近世以降は柿本人麿）と並ぶ和歌三神の一柱として尊崇を受けることになる。平安中期の歌人として名高い藤原公任（996～1041）も玉津嶋に詣でている。中世には、歌道の名家である飛鳥井家の雅永が、嘉吉３年（1443）「多年の宿願を果さむために」玉津嶋に詣でており、文明２年（1470）には蹴鞠の名手でもあった甥の雅親が玉津嶋に詣でている。

聖武天皇の詔で玉津嶋と明光浦の霊が祀られるようになったわけであるが、その詳細は不明である。「玉津嶋山」が神の降臨する依代として、あるいは神そのものとして祀られていたとも考えられる。玉津嶋が描かれた絵画で現存する最古のものは、『慕帰絵　第７巻』（一三五一年、玉津嶋の部分は1482年に補写されたもの）にあるが、そこに描かれているのは、絵馬が吊り下げられた松である。15世紀に活躍した歌人東常縁は、「玉津嶋には社一もなし。鳥居もなし。只満々たる海のはたに古松一本横はれり。是を玉津嶋の垂迹のしるしとするなり。然るを続拾遺の時、為氏卿洛中より御船を作らせて、玉津嶋に社壇を立つべき由被存て参詣有り。即ち彼の所に社壇を建てらるる、其の夜あらき波風立ちて、一夜の中に沙中に埋れりと云々。それより後は本の如くにして古松許りなり。」（「東野州聞書」）としている。

天正13年（1585）紀州を平定した秀吉は、早々に玉津嶋に詣でている。この後、紀州に入部した浅野幸長により社殿の再興が図られ、徳川頼宣により本社殿などの本格的な整備がなされた。寛文４年（1664）には、春秋二期の祭祀が復活している。現在、境内には頼宣が承応４年（1655）に寄進した灯篭が残されている。近世に整備された玉津嶋神社は、和歌の浦の名所として巡礼をはじめ大勢の人々が詣でるところになり、現在に至っている。

玉津嶋神社とその一帯は、和歌の浦の歴史的景観の核とも言えるものであり、史跡としてとくに重要である。

鳥居

本殿（撮影　松原時夫）

本殿

根上り松（名称鶴松）

仁井田好古撰文碑　　奠供山碑　和歌山市指定文化財　歴史資料
昭和63年3月30日指定

明治末～大正初期の玉津島神社

昭和初期の玉津島神社

昭和初期の玉津島神社

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　御手洗池公園

3　地　　番　　和歌山市和歌浦西二丁目1308番1
　　和歌山市和歌浦西二丁目1309番1
　　和歌山市和歌浦西二丁目1310番1
　　和歌山市和歌浦西二丁目1310番5
　　和歌山市和歌浦西二丁目1310番8

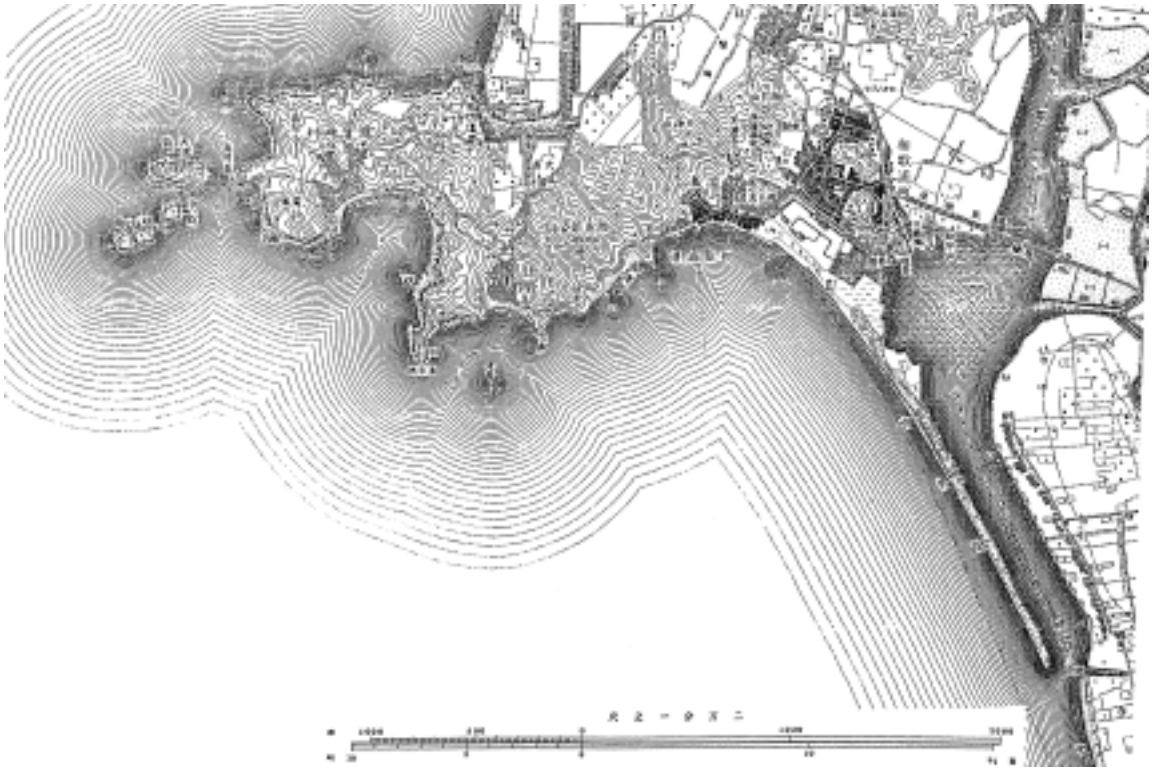
4　所　有　者　　東照宮

5　管　理　者　　和歌山市

6　指 定 理 由

和歌浦の風景は江戸時代から現在にかけて大きく変わっている。18世紀中頃の「紀州和歌山和歌浦之図」によると、東照宮のある雑賀山に並ぶ天神山と片男波との間には入江奥深く続き、また津屋川河口（妹背山の北側）も広い入江をなしており、和歌の浦は広大な内湾を形成している。この入り江を正面に見る位置に天満宮は再建された。また和歌浦天満宮の象徴とも言うべき鳥居は、入り江の最も奥に造られていた。天満宮、東照宮が造られたのは、入り江の最も奥の場所であり、和歌浦の原景観を知る上で重要である。

現在御手洗池公園として和歌山市によって管理活用されている。御手洗池は、江戸時代以降の土地利用及び町並みの変化が現在でもわかる池であるため、史跡として重要である。



明治19年測量　仮製２万分の１（縮尺）

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　塩竈神社

3　地　　番　　和歌山市和歌浦中３丁目1065番１

4　所　有　者　　玉津島神社

5　指 定 理 由

結晶片岩の岩盤が露出した鏡山の南面に位置にする。岩肌は曝れた木理のような観を呈することから伽羅岩と呼ばれ、岩と松の組み合わさった風景が玉津島の原風景を今に伝える。祠は、海風により自然に浸食された洞窟である。祠の中には小さな拝殿が設けられている。元は玉津島神社の抜所で、興の岩屋（こしいわや）、と呼ばれた。

興の岩屋（こしいわや）と言われるのは、かつて浜降り神事の際に神輿が奉置される場所であったからである。浜降りとは、毎年９月16日に高野山の地主神である天野丹生都比売神社の神輿が、紀ノ川沿いにはるばる玉津島神社まで渡御し、翌日日前宮へと渡御してゆく神事をいい、神輿が玉津島神社で一晩奉置されるところが輿の窟であった。浜降り神事はその起源を古代まで遡ることができると考えられるが、鎌倉時代に一時中断された時期があり、文保２年（1318）に再開されたことが記録に残されている。その後戦国期に途絶え、近世には天野社の鳥居外から玉津島神社を遥拝するなどの神事になっている。ただ、この窟に対する信仰は、浜降り神事に限られたものではなく、江戸時代後期には、「しおかま」の名で信仰の対象になっていた。江戸時代に「一に権現、二に玉津島、三に下り松、四に塩竈よ」と歌われ、塩田の塩を焼く釜からこの名が付けられたという。また、古くから安産の神様として祀られてきたことが考えられる。慶長19年（1615）に描かれた名古屋城本丸御殿対面所の障壁画には玉津島神社とこの窟も描き込まれるが、安産を祈願するものであろうか、この窟に船でお参りにやってきている一行が描かれている。現在も安産の守護として、人々に親しまれている。神社近くの小高い丘に、山部赤人の有名な歌碑が建っている。

塩竈神社及びその周辺の伽羅岩は玉津島の原風景を伝えるとともに、玉津島一帯の歴史的景観を形成する上で不可欠な構成要素となっており、史跡として重要である。

塩竈神社　南より

昭和初期頃の塩竈神社

明治末期の塩竈神社

大正初期の塩竈神社

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　天満宮

3　地　　番　　和歌山市和歌浦西二丁目1305番1（8,707㎡）

和歌山市和歌浦西二丁目1306番地（7,292㎡）

和歌山市和歌浦西二丁目1307番地（4,654㎡）

4　所　有　者　　天満宮

5　管　理　者

6　指 定 理 由

天満神社は和歌浦天神山（標高約93m）の中腹に位置し、菅原道真を祀り、和歌浦一円の氏神として尊崇されている。現在、社地は急勾配の階段を登ったところに　楼門が建ち、東西廻廊がこれに接し、唐門に続く瑞垣の中に本殿が建つ。神社の創立は、『関南天満宮傳記』によれば、菅原道真が延喜元年（901）年太宰府に流されるとき、風雨をさけて和歌浦へ立ち寄ったとされ、橘直幹（964～968）がこれを偲んで社殿を創建したと伝えられる。

豊臣秀吉の天正13年（1585）の兵火の後、桑山重晴や浅野幸長により再建された。浅野氏は、慶長9年（1604）～同11年（1606）にかけて天神山の中腹を整地して社地を造成し、本殿、唐門、拝殿、楼門、東西廻廊などを再建した。本殿奥や楼門前面の石垣は、この時造られたものである。再建された本殿、楼門など4棟が重要文化財である。本殿五間社の入母屋造りで、由緒と格式を誇る大社の造形であり、正面にそびえる楼門は1間1戸では最大級で、寺社建築の最高峰の建築様式、禅宗様を取り入れている。本殿、楼門棟の建築や彫刻には、江戸幕府御大工棟梁の平内政信が関わった。

天満宮は近世以前の創建であり、和歌浦の歴史を知る上で、また近世和歌浦を知る上でも重要な史跡である。

天満宮

本殿

楼門前の石段

天満宮前面の石積み

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　東照宮

3　地　　番　　和歌山市和歌浦西二丁目1300番4　（376㎡）
和歌山市和歌浦西二丁目1302番　（18,357㎡）
和歌山市和歌浦西二丁目1302番1　（1,021㎡）
和歌山市和歌浦西二丁目1302番2　（132㎡）
和歌山市和歌浦西二丁目1302番3　（155㎡）
和歌山市和歌浦西二丁目1303番　（8,799㎡）
和歌山市和歌浦西二丁目1304番1　（5,752㎡）

4　所　有　者　　東照宮

5　管　理　者

6　指 定 理 由

東照宮は、和歌浦権現山に位置する。元和５年（1619）紀州初代藩主として入国した徳川頼宣（1602～71）により、東照大権現を祀る東照社として建立された。頼宣の紀州入国とともに計画され、元和６年（1620）起工、元和７年（1621）に竣工･遷宮式が行われた。『紀伊続風土記』によれば、境内は方八町で、宮山周囲50町余りであった。現在は頼宣も合祀している。

鬱蒼とした木々に囲まれた東照宮参道は青石が敷き詰められ、両側は低い石垣で区切られる。鍵の手で折れ曲がると、急勾配の108段の石段にたどり着く。参道と石段の両側には、家臣団が寄進した石灯籠が並ぶ。

高台の南端には、楼門が南面し、その両脇に東西廻廊が建つ。高さ約２ｍの石垣により一段高くなった社地北側には、唐門と瑞垣、その内側に正面に拝殿、その奥に本殿が建ち、「石の間」と呼ばれる部分で繋いで一つの建物にまとめたもので権現造りと呼ばれる。かつては社殿の右に三重の塔、左に薬師堂があった。

社殿建物は和様という伝統様式を用い、様々な彫り物で飾る。内外部共に黒、赤の漆を塗り、複雑な組物や彫刻類には色とりどりの色彩を施す。また社殿の隅々まで金箔を施す。代表的な江戸時代初期の建造物である。この豪華な社殿により、俗に紀州の日光と称される。唐門、東西瑞垣（みずがき）、楼門、回廊と共に重要文化財建造物である。また社蔵の鎌倉・南北朝時代の太刀13振、南蛮胴具足、小袖三領が重要文化財美術工芸品である。

東照宮の例祭は、元和８年（1622）に趣向を凝らした絢爛豪華な風流（ふりゅう）の祭りとして創始されているが、江戸時代には、国中第一の大祭であった。諸国から多数の見物人がきたという。明治以降も和歌祭りと呼ばれて、大勢の観衆を集め、親しまれた。近年復興されている。

東照宮は、近世和歌浦の景観を形作る重要な要素である。

東照宮

木々に囲まれた青石の参道と石灯籠

和歌祭

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　妹背山と三断橋

3　地　　番　　和歌山市和歌浦中３丁目1061、1062、1063、1064

三断橋　和歌山市和歌浦中３丁目1062番先

4　所　有　者　　財務省、海禅院

5　管　理　者　海禅院、和歌山県

6　指 定 理 由

和歌川河口部に浮かぶ妹背山は、周囲250m程の小島で、相模の江ノ島、近江の竹生島それに安芸の厳島と並ぶ水辺の名勝であった。この妹背山の西側には、砂岩製高蘭付きの三断橋が架けている。県内最古の石橋で紀州初代藩主徳川頼宣（1602～1671）が妹背山の整備をした慶安元年に建設したものである。中国の景勝地ある杭州西湖を模したものといわれている。三断橋の欄干、板石、橋桁、橋脚などは何度か補修されているが、橋の原型そのものは４世紀にわたって崩される事なく、今日まで継承されている。

妹背山への三断橋を妹背山へと渡ると、その正面の右側に梵文題目碑がある。かつては「経王堂」と呼ばれる「小堂」の中にあった。さらに、南側の磯部の道を行くと、東向きに水中に観海閣が建っている。三段橋と同じ時期に頼宣により建造されたものである。『紀伊国名所図会』には、「山水絶妙、言後（ごんご）に絶えたり。かかるやごとなき御制地（ごせいち）なるも、下民（かみん）の遊翫（ゆうぐわん）をゆるされ、四季をりをりの間斷（かんだん）なく、爰（こゝ）につどひあつまり、おのがさまざまたのしみ興（きょう）ず。」とあり、観海閣は四季を通じて民衆に開放されていた。ここから石段を登ると多宝塔（和歌山市指定文化財）の前に出る。この多宝塔の下には石室（東西210cm、南北164cm）があり、この中に『法華経』の「題目」が書写された15万余個を超える経石が埋納されている。この経石の埋納は、東照大権現（徳川家康、1542～1616）の33回忌（慶安元年（1648）４月17日）を期に、家康の側室である養珠院（お万の方、1577－1653）が、衆生の慰霊救済と天下静謐を祈って発願したものである。この浄業には、後水尾上皇（1596～1680）から民衆に至るまで、また僧俗を問わず多くの人々が参加するところとなり、経石の題目数の合計が250万返に達したことをもって、慶安２年（1649）浄業は成就している。経石が埋納された場所には、経石埋納供養の由来が刻まれた題目碑が造立され、明暦元年（1655）には、養珠院の菩提を弔うため多宝塔が建造されている。この経石埋納事業は、上皇から庶民にいたるまで貴賤の上下なく大勢の人々が参画したものであり、他に例を見ない。

県内では最古の石橋である三断橋と妹背山は、頼宣の時期の和歌浦の整備を今に伝え、和歌浦の歴史的景観を形づくるものとして、極めて重要な史跡である。

三断橋と妹背山

海禅院多宝塔　昭和42年2月14日　和歌山市指定建造物

以下の文章と写真等は、菅原正明氏の「妹背山経石通信」から引用したものです。

『紀伊國名所圖會』に描かれた妹背山の伽藍　（文化８年、1811 年）

西（左側）より東（右側）に向けて　三断橋、（経王堂）、多宝塔、（唐門）、（拝殿）、（瑞門）、自然石階段、観海楼、北に井戸、（海禅院）

大正頃の妹背山

『紀伊國名所圖會』より

妹背山の「観海閣」について『紀伊續風土記』第１輯巻之22は、「東西三間南北五間余、土人これを妹背の拝殿といふ、閣は水上に臨み眺望最絶勝なり」と記し、また『紀伊國名所圖會』第１編巻之２の挿図の「観海楼」には、庶民が飲食に興じたり、西国三十三所順礼者が休息をとったり、また参詣人や簪を付け綺麗に着飾った女人、それに紀三井寺を眺める子供連れの見物人もみえます。これらの多くの人々が集っていた水辺の水閣の様子がうかがえます。

また、『紀伊國名所圖會』は、妹背山多宝塔の説明の中で「水樓」(観海閣)について次のように述べています。「石段くだりて水樓あり。みなみは名にあふ和歌のうら、東面は名草山なり。山水絶妙、言後に絶えたり。かゝるやごとなき御制地なるも、下民の遊翫をゆるされ、四季をりをりの間斷なく、爰につどひあつまり、おのがさまざまたのしみ興ず。或人是を文王の囿に比す、また宜ならずや」

観海閣

ここに記された徳川家の「やごとなき御制地」というのは、「格別に定めら

大岡普斎著述・橘守国画『画典通考』巻三の四・五「和歌の浦」享保12年（1727）

れた地」でもあったのです。さらに全長上人の説明は、その上の段の経堂・多宝塔に移ってゆきます。

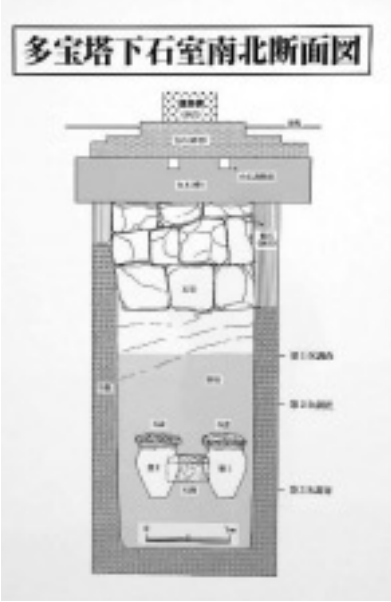
経石を埋納している石室と多宝塔との関係。石室内の中ほどに石函と甕2個が納められていました。石室内のうす墨色の部分は経石です。

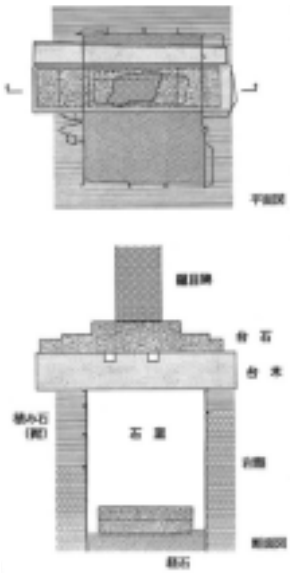
妹背山東面中腹にある多宝塔下の石室は、平面形が長方形（幅南北164cm、奥行東西210cm）で、岩盤を垂直に約4ｍ掘削して造られており、石室の上面が東側に傾斜しているために南・東・北面に砂岩の切り石を数段積み上げ、石室の上部を水平にしています。この石室の上に直接南北方向に直接架け渡した直方体の巨大な台木（長さ278.7cm、幅65.0cm、高さ51.8cmのケヤキ材）があり、その上に凸字形の台石（下段の長さ254.5cm、上段の長さ125.3cm、幅57cm、総高42.8cm、砂岩製）を据え、この台石の中央に題目石碑（268cm）を立ています。台木の上面にはこの上に乗る台石を定位置に据え付けるための角材を通す断面凵形の溝（幅14cm、深さ13cm）を長軸に直行し2条（間隔は46cm）彫り込んでいます。この台木の西に接して来迎柱を支える台木（長さ269cm、幅28cm、高さ30cmのヒノキ材）を渡しています。この石室について『續風土記』巻之22の「二重寶塔」に、「四方石を疊みて高く築き其上一大石を立て題目石の事を記し小堂を其上に作らせ給ふ」と簡潔に記しています。

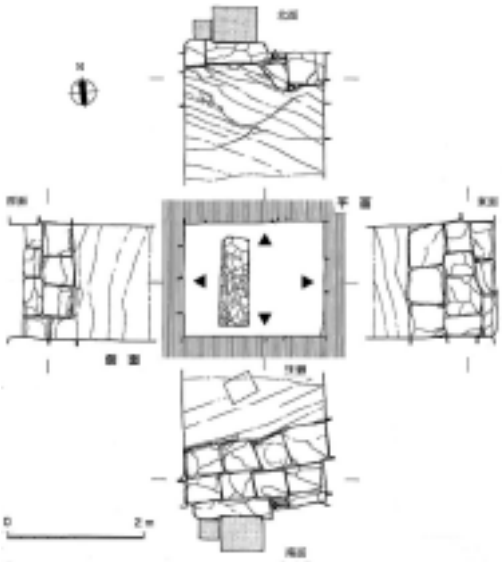
石室内の経石埋納状況については、上図に示した石室内の灰色の部分が、埋納経石で、この経石の中に、砂岩製石函と砂岩製石蓋付備前焼甕2個が据えられていました。

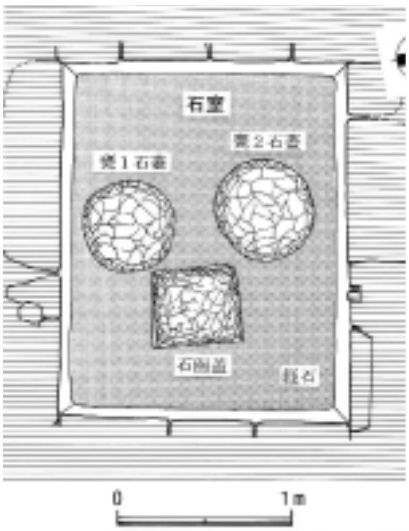
多宝塔下石室の経石埋納状況が明らかになりました。石函の出土状態です。方形で石の蓋をしています。石函は砂岩製で、その寸法は身が縦47.0cm、横43.7cm、高さ21cm、内寸は

多宝塔東西断面図


多宝塔下石室南北断面図






石室
第1石壺
第2石壺
石棺蓋
経石
0
1m

縦33cm、横31cm、深さ13cmです。蓋が縦47.0cm、横43.7cm、高さ8 cm、内面中央部が縦32cm、横30cm、高さ5 mm突出しています。

この石函については、妹背山多宝塔内の題目碑の銘文の他に、次の文書により、『題目石詩並序』に「別彫石函以蔵宸翰(しんかん)題目石」、『徳川史』巻之三の「南龍公譜畧」の慶安二年巳丑条に、「別造石函、蔵所賜宸翰石」、『徳川史』「池上本門寺記録」 に「別造石函崇之」とあり、後水尾上皇が染められたという宸翰石が、別に造った石函の中に蔵され、妹背山多宝塔の地下石室深く納められていることが経石調査以前から分かっていました。この石函は予想して

いたものより、はるかに質素なものでした　。石函の蓋の内面に以下の銘文が刻まれています。これこそ、宮中よりもたらされた後水尾上皇・皇后・女官の経石であることを示しています。この石函の銘文を撰した中正院日護上人は、妹背山多宝塔内の題目碑の撰者でもあり、同一の年月日に記したものあることがわかります。

仙院后宮以至妃嬪滕嬙真翰也
於後代
献拝之倫深可発甚信者也
慶安第二己丑二月十七日
中正院日護拝書

石函の蓋を明けたところです。経石が112点納められていました。この中に後水尾上皇の宸翰石及び皇后・女官の経石が納められていました。

和歌の浦に浄土をみた養珠院

江戸幕府初代将軍徳川家康の側室養珠院は、家康の33回忌の経石埋納供養を和歌の浦に浮かぶ「イモ島」において執り行うことを慶安元年（1648）に発願し、息子の和歌山初代藩主徳川頼宣がこの島に勧請した辨才天の社を甲崎の蜆の宮に移し、「妹背山」と名を変え、東西一直線にお堂を配した伽藍を整備しました。これと併行して養珠院は、頼宣と共に経石に御題目（南無妙法蓮華経の七字）　を書写しました。この浄行が宮中にも伝わり、後水尾上皇は宸翰を染められ、僧俗・貴賤を問わずに、多くの人々がこの経石題目書写に参加し、題目総

大正末期

数が250万返（15万余個）に達したので、慶安２年にこれらの経石を妹背山の中腹に掘った石室（1.64m × 2.1m、深さ4.0m）に納め、この石室の上に経石埋納供養の経緯を刻んだ題目碑（高さ2.68m）を立てました。題目碑の正面には、御題目と共に家康の神号「東照大権現」ではなく養珠院の法名「養珠院殿妙紹日心大姉」が刻まれ、背面上部中央には、『法華経』「見宝塔品」の虚空会説法に示された多寶如来と釈迦牟尼佛を配し、両脇には東照大権現・大辨才天女が刻まれました。これは、養珠院が日蓮の図顕した大曼荼羅の中心部を妹背山の題目碑に正面と背面を合わせて立体的に顕したものであり、『法華経』の語る釈尊が法華経を説いたインドの霊鷲山をここに具現化した養珠院の大曼荼羅なのです。さらに『法華経』に添って考えると、石室に納められた経石は、「従地涌出品」に記す、大地より涌き出た無数の菩薩を象徴しています。また、妹背山の多宝塔に掲げられた扁額「令法久住」は、「見宝塔品」の釈尊の滅後の『法華経』の流通を勧めることを宣言した文なのです。

このように、養珠院が妹背山を霊鷲山の浄土とした背景にあったものは、和歌の浦には、自然の織りなす広大な聖域が存在しており、養珠院はここに浄土を観ていたためと考えられます。それは、聖武天皇が神亀元年（724）に紀伊国に行幸した折、この和歌の浦の景観に玉津島の神、明光浦の霊を見て、国家の管理の及ぶ空間として創出され、また藩主徳川頼宣により和歌の浦の景観に厳しい制限が加えられており、江戸時代初頭までは、この和歌の浦の霊的な原風景が残っていたためなのです。養珠院の大曼荼羅において妹背山は、和歌の浦の内海（干潟）の風光を基層にして、その上部の甲崎蜆宮の大辨才天女、妙見山の妙見大菩薩、権現山の東照大権現により守護された久遠実成の本仏釈尊による衆生救済の霊山浄土であり、和歌の浦の真珠とでもいうべき至宝なのです。

多宝塔内題碑

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　芦辺屋・朝日屋跡（現和歌公園・鏡山公園地区）、鏡山

3　地　　番　　和歌山市和歌浦中三丁目1065、1059

4　所　有　者　　和歌山県

5　管　理　者　　和歌山県

6　指 定 理 由

現和歌公園・鏡山公園地区には、藩政期、芦辺屋と朝日屋という茶屋があった。初代藩主頼宣は、父家康を東照大権現として祀る宗教的境域として和歌の浦を整備しているが、後にお万の方（承応3年〔1654年〕没）を祀ることになる妹背山を整備するにつき、妹背山に渡る三断橋を架し、その西側橋詰に芦辺屋と朝日屋という二軒の茶屋を設けている。芦辺屋と朝日屋である。時期は、妹背山に観海閣が建立され、三断橋が架けられた慶安4年（1651年）頃と考えられる。

頼宣は、芦辺屋と朝日屋に暖簾を与え、式日にはこれが掛けられた。

芦辺屋と朝日屋の前は、和歌の浦と紀三井寺とを結ぶ渡し場であった。元禄2年（1689年）に和歌浦を訪れた貝原益軒もここから舟で紀三井寺へ渡ったと考えられるが、前年に和歌の浦の地を踏んだと思われる芭蕉も、この紀三井寺と和歌の浦を結ぶこの渡しを使ったものと思われる。多くの巡礼や旅人がこの茶屋を利用したことであろう。ここから眺める和歌の浦の景観は、『和歌浦物語』（元文3年〔1738年〕）では、「東南遠望の景、云はん方無し」、また、『和歌名所記』（享和元年〔1801年〕では、「誠に三国無双の勝地なるへし」、と絶賛されている。

天保4年（1833年）に十代藩主宝治の命により、二軒の茶屋の間に芭蕉の句碑が建立されている。

明治期には芦辺屋という料理旅館が営まれていたが、多くの文人墨客が宿泊し、逗留した。その中には南方熊楠がいる。熊楠は、明治34年（1901年）、ロンドンで知り合いになっていた孫文とここで再会している。現在は、風致公園として整備され、天保4年に建立された芭蕉の句碑が残されている。

鏡山に造られた芦辺屋、朝日屋跡地は、妹背山、三断橋と一体となって、紀州徳川氏によって整備された近世初期の和歌の浦の原風景をうかがい知ることのできる歴史的環境として残されており、史跡として極めて重要である。

鏡山全景（東より）

鏡山全景（南より）

芦辺屋・朝日屋跡地

芭蕉の碑

明治30年代の芦辺屋と朝日屋跡

明治末の芦辺屋

明治末の芦辺屋と同玉津島別荘

（指定するもの）

1　区分・種別　　名勝・史跡和歌の浦

2　名　　称　　不老橋

3　地　　番　　和歌山市和歌浦南３丁目1679番24外先

4　所　有　者

5　管　理　者　　和歌山市

6　指 定 理 由

和歌の浦の市町川に架かる不老橋は、東照宮御旅所の移築に際して紀州徳川家第十代藩主徳川治宝（架橋当時は十三代藩主徳川慶福の治世中）の命により嘉永３年（1850）に着手し、翌４年（1851）に完成したアーチ型の石橋である。この橋は、徳川家康を祀る東照宮の祭礼である和歌祭の際に藩主や徳川家の人々および東照宮関係者が、片男波松原にあった御旅所に向かうために通行する「お成り道」に架けられた橋であった。

江戸時代のアーチ型石橋は畿内周辺では極めて少なく、アーチ部分については肥後熊本の石工集団の施工であり、勾欄部分については湯浅の石工・石屋中兵衛の施工と推定されている。勾欄部分には、雲を文様化したレリーフがみられ、装飾的に優れたものとなっている。石材としては和泉砂岩を使用し、敷石およびアーチ部分の内輪内には規格化された直方体状の石材が使用される。

地震や台風による被害を受け、後世の補修もなされているが、架橋当時の姿を十分、うかがい知ることができる江戸時代の重要な構造物であり、平成７年５月10日に和歌山市指定文化財になっている。

明治末頃の不老橋

（指定するもの）

1　区分・種別　　天然記念物

2　名　　称　　鷹の巣

3　地　　番　　和歌山市雑賀崎

4　所　有　者

5　管　理　者　　和歌山市

6　指 定 理 由

雑賀崎の西南部岬端の断崖絶壁を鷹の巣と呼んでいる。直立した絶壁の高さは50メートルで、青石と呼ばれる緑泥片岩からなる。鷹がこのような絶壁の岩穴に巣を作るので「鷹の巣」と名付けられたという。緑泥片岩はほかに四国・九州に分布しているが、壮大で勇壮な景観を形成しているものはめずらしい。その下の洞窟は、信長に敗れた本願寺の教如が隠れた場所とされており、「上人の窟」と呼ばれている。

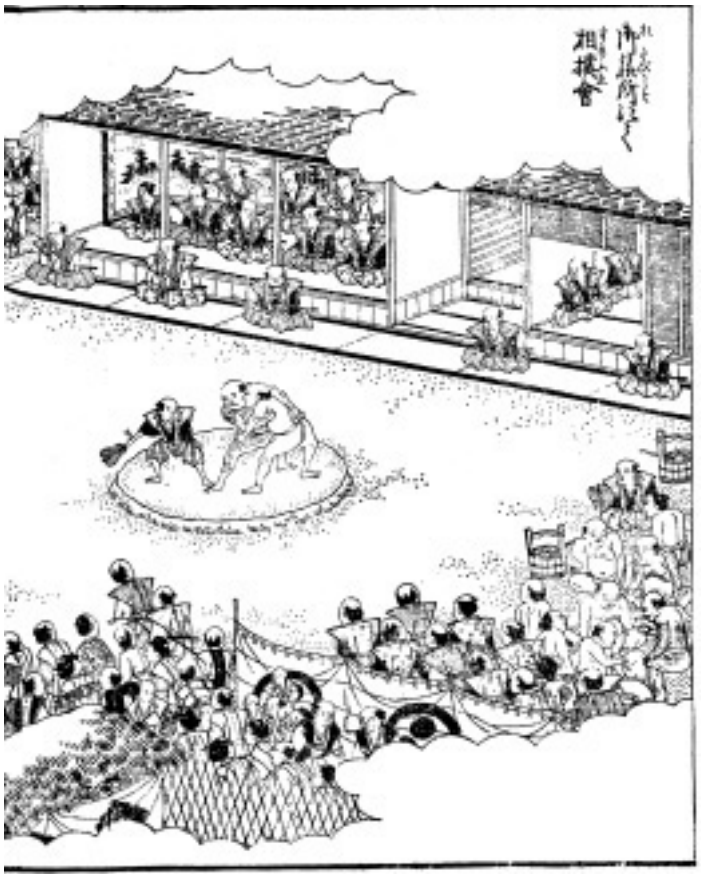
和歌山県教育委員会1999『和歌山県文化財ガイドブック』上巻より

元御旅所跡（県立和歌公園　8の字公園）

1　区分・種別
2　名　　称　　元御旅所跡
3　地　　番　　和歌山市和歌浦南
4　所　有　者　　財務省
5　管　理　者　　和歌山県
6　指 定 理 由

和歌祭は紀州東照宮の例祭で、戦国時代からまだほど遠くない元和8年（1622）に始まる。和歌山城下の民衆による風流（ふりゅう）を極めた練物行列があり、他国にも知られた名高い祭礼であった。明治から昭和にかけては、「日本三大祭の一つ」と称され、和歌祭が挙行される日の和歌の浦には群集が押し寄せた。現在は、原則として毎年5月の第2週日曜日に行われる。

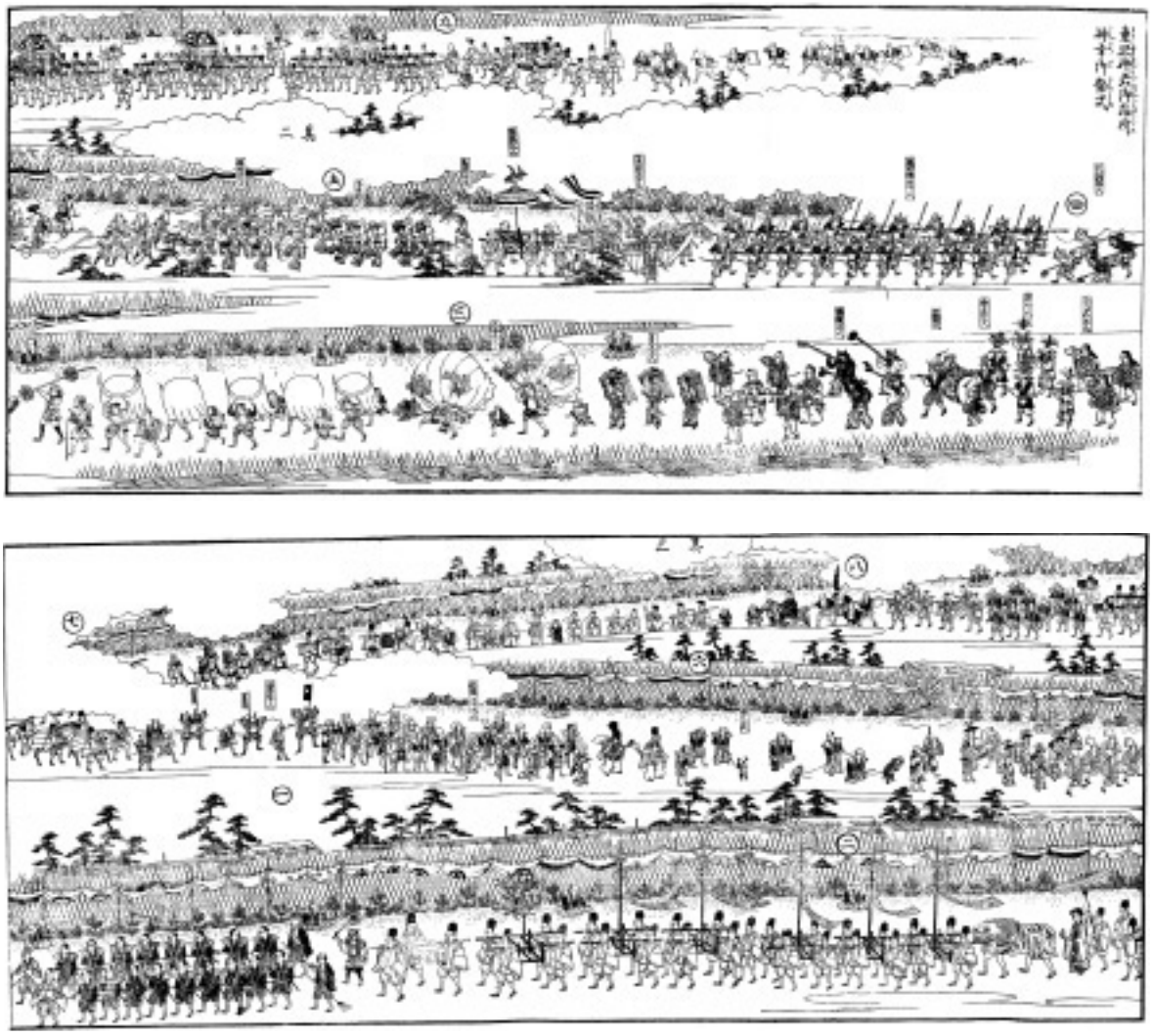
初代紀州藩主徳川頼宣が紀州東照宮に奉納した『東照宮縁起』（住吉如慶1646年）や家康50回忌の年に行われた和歌祭を描いた『和歌御祭礼図屏風』（1665年）には、東照宮から片男波の御旅所まで渡御する祭礼行列及び御旅所の様子が克明に描かれている。御旅所とは、普段本社にある御神体が祭礼時に神輿に載せられて本社を出てゆき、また本社に戻るまで仮にとどまる場所である。和歌祭では御神体が奉移された神輿が片男波の御旅所まで渡御し、藩主臨席（藩主が参勤交代で在府の年は名代）の下で所定の法神事や城下の民衆による練物の芸能披露などが行われる間、仮屋に安置され、終ると再び本社に還御してゆくのである。近世期には毎年4月17日に御旅所への神輿の渡御と還御が行われることになっていた。


『紀伊國名所圖會』より

御旅所周辺には松が植えられて聖域として風致が保たれるとともに、近世中期以降は鳥居以外にも恒久的な建造物が建てられるようになっている。ただ、海浜部にあるため度々高波などの被害を受けたようで、そのために御旅所の地先には防波堤が造られており、紀州和歌浦絵図（1851以前）にはそれが描かれている。嘉永4年（1851）に宝治によって塩浜の東の一画に御旅所が移され

て、この場所は元御旅所になるが、かつての防波堤（旧波止）の位置から現在の８の字公園であることが比定できる。

和歌の浦は東照宮が造営されることで、渡御行列（和歌祭）が挙行される祭礼空間としても整備されるが、元御旅所はその祭礼空間の構成を現在にも伝えるところとして重要な歴史的遺跡になっている。



『紀伊國名所圖會』より

和歌の浦干潟

1　区分・種別

2　名　　称　　和歌の浦干潟

3　地　　番　　和歌山市和歌浦

4　所　有　者　　国土交通省

5　管　理　者　　和歌山県

6　指 定 理 由

名勝和歌の浦の中心である干潟は、時代によりその景観は変化しているが、現在残されている干潟はその存在を万葉時代に遡ることができる。

神亀元年、聖武天皇は和歌の浦に行幸し、次のような詔を出す。

「山に登り海を望むに、此間最も好し。遠行を労せずして、遊覧するに足れり。故に弱浜（わかはま）の名を改めて、明光浦（あかのうら）とす。守戸を置きて荒穢せしむことなかるべし。春秋二時に、官人を差し遣して、玉津島の神、明光浦の霊を奠祭せしめよ」（『続日本紀』）

ここで明光浦と名付けられたところには、すでに干潟がよく発達していたと考えられる。この行幸に従駕した万葉歌人山部赤人が詠んだのは、まさしく干潟が大きく広がる和歌の浦の景観であった。

若の浦に潮満ちくれば潟を無み　芦辺を指して田鶴鳴き渡る（巻６・919番）

このときに歌に詠まれた干潟は、その後和歌の浦が紀ノ川の主流路の河口部ではなくなるなどのことから姿を変えてゆくことになるが、名所としての和歌の浦の景観の常に中心にあり、核となってきた。

このような和歌の浦の干潟では岩海苔（妹背海苔）の採取がおこなわれ、海苔養殖が行われた。最盛期には一面が海苔のいかだで占められた。この海苔養殖も平成17年に廃業されることになったが、生き物の宝庫であることに変わりはなく、多くの希少種が生息している。毎年春から初夏にかけての潮干狩りには大勢の人が繰り出し、和歌の浦の風物となっている。

和歌の浦の干潟は名勝和歌の浦の景観の核であり、保全させるべき最も重要な歴史的環境となっている。

紀伊国名所図会　妹背海苔取図

片男波

1　区分・種別
2　名　　称　　片男波
3　地　　番　　和歌山市和歌浦
4　所　有　者　　国土交通省
5　管　理　者　　和歌山県
6　指 定 理 由

片男波という名であるが、全長はその著書『和歌浦物語』で、熊野方面に開いた和歌浦湾の波は荒いとし、片男波という名は「男波ばかり寄る」ということに因んだものであるとの説を唱えているが、貝原益軒の見立てを待つまでも無く、その名は山部赤人の「和歌の浦に潮満ちくれば潟を無み　芦辺を指して田鶴鳴き渡る」の有名な万葉歌の「潟を無み（かたをなみ)」から取られたものと考えるべきである。

天橋立や三保の松原と同じく海からの吹上の砂により形成された砂嘴である。奈良時代には、紀ノ川は和歌の浦を河口部として和歌浦湾に注いでいた。入江は、現在より山裾まで奥深く湾入し、小雑賀や中島付近まで河口州であった。雑賀山の東方に連なる玉津島山は、船頭山・妙見山辺りまでは成長期の砂浜が陸地となるが、雲蓋山・奠供山・鏡山・妹背山の4つの小島は満潮時には完全に陸から分離して海中に点在していたと考えられる。その周囲は潮の干満によって姿を変える干潟や低湿地が広がっていた。また和歌の浦北部は吹上・高松から続く大きな砂堆（砂州・砂丘）と繋がっており、片男波の砂嘴も形成されつつあったと考えられるが、現在のように長く伸びた形状になるのは少なくとも中世以降のことである。近世以降は多くの絵画に、その特徴ある形状と白砂青松が、和歌の浦の景観の基本的構成要素として描かれることになる。細長い砂嘴が形成されたことで後背湿地が形成され、静かな入江と荒い白波が打ち寄せる砂浜との対照が和歌の浦の景観として文人墨客の鑑賞眼を捉えることになるのである。

現在は、人工的構築物も少なくないが、片男波のグリーンベルトとその特徴のある形状に基づく大きな景観は、和歌の浦の歴史的景観における不可欠な構成要素になっている。

明治の頃の片男波

明治40年前後の片男波

朝日橋より妹背山観海楼を望む（明治末）

和歌の浦より名草山紀三井寺を望む（明治末）

紀州和歌浦雲蓋院御道絵図（嘉永４年（1851）以降）

和歌の浦学術調査報告書
平成22年12月17日

編集・発行　和歌山県教育委員会
〒640－8585
和歌山市小松原通１－１
TEL. 073－432－4111（代）

印刷　株式会社ウイング